

**ソードアート・オンライン** ５

ファントム・バレット

川原　礫

**イラスト／adec**

*［＃挿絵img0501.png］*

*［＃挿絵img0502.png］*

*［＃挿絵img0503.png］*

「――氷。私は、冷たい氷でできた機械」

　　シ　ノ　ン　§銃と鋼鉄のＭＭＯ《ガンゲイル・オンライン》プレイヤーの少女。長大なライフル《ヘカートⅡ》愛用する

*［＃挿絵img0504.png］*

「なんとなく、解ったよ。君がわたしをここに連れてきてくれた理由」

　　　§和人の恋人にして、《ＳＡＯ》時代は、キリトとペアを組んだ名プレイヤーの少女

「え……、そ、そう？」

　　　§悪夢のＭＭＯ《ＳＡＯ》をクリアに導いた黒の剣士。別名「キリト」

*［＃挿絵img0505.png］*

「聞いたよ、一昨日の話。大活躍だったんだって？」

　　　　　　§詩乃の元クラスメート。図書館での出会いをきっかけに、自らもプレイし楽しんでいる《ＧＧＯ》を詩乃に勧めた

「……そんなことないよ。こっちのスコードロンは六人中四人もやられたんだから。待ち伏せで襲ってその結果じゃあ、とても勝ったとは言えない」

　　　　　　§都内で一人暮らしをする高校一年生の少女。《ＧＧＯ》にログインし、プレイすることで自分のトラウマから抜け出そうとしている

*［＃挿絵img0506.png］*

「……これが本当の力、本当の強さだ！ 愚か者どもよ、この名を恐怖とともに刻め！ 俺と、この銃の名は《死銃》…………《デス・ガン》だ!!」

　　死　　銃　　§《ＧＧＯ》でを行う謎のアバター。《ＧＧＯ》内で《死銃》に撃たれたプレイヤーは、《現実世界》でも死に至る

*［＃挿絵img0507.png］*

　　† ガンゲイル・オンライン

略称ＧＧＯ。銃と鋼鉄が支配する世界で、プレイヤー達は最強のガンナーを目指す。ＰＫが可能なため、敵モンスターだけでなくプレイヤー同士でも争い勝利を狙うというゲームシステムである。《ＧＧＯ》に登場する武器は、実弾銃、光学銃の二つに大別される。対プレイヤーには実弾銃が、対モンスターには光学銃が有効というセオリーが最近のトレンドとなっている。この二つのカテゴリーには性能面以外にも大きな特徴があり、光学銃がすべて架空の名称と姿を持っているのに対し、実弾銃は現実世界に本当に存在する銃器をそのまま登場させている。よって、《ＧＧＯ》プレイヤーの大多数は所謂ガンマニアが多い。

そして、《ＧＧＯ》は、二本で唯一《プロ》がいるＶＲＭＭＯである。《ゲームコイン現実還元システム》を採用しているため、ハイレベルプレイヤーは毎月高額の電子マネーを稼ぎ出すことができる。《ＧＧＯ》をプレイし高スコアを出し続ければ、日々の生活費も賄うことが可能。その分、《ＧＧＯ》プレイヤーたちは他のＭＭＯと比較にならないほどの時間と情熱をゲームにつぎ込んでいる。

　　　ＰＧＭ・ウルティマラティオ・ヘカートⅡ

全長１３８０ミリ、重量１３・８キロ。50口径（直径１２・７×99ミリ）の巨大な弾丸を使用する。

現実世界では、対物狙撃銃（アンチマテリアル・スナイパーライフル）というカテゴリーに属し、車両や建築物を貫くことを目的とする（そのあまりの威力から、対人狙撃への使用は禁止されている）。《ヘカート》とは、ギリシャ神話の冥界を司る女神からとられている。

《ＧＧＯ》内での《ヘカートⅡ》は、サーバーにわずか十丁ほどしか存在しない《アンチマテリアル・スナイパーライフル》の一つで、ショップで購入できない《発掘武器》の中でも、最もレアリティの高い一群に属する武器である。取引価格も高額で、時価二千万クレジット（日本円で二十万円）の値がついた。

「これは、ゲームであっても遊びではない」

　 ――「ソードアート・オンライン」プログラマー・茅場晶彦

『万能論なんてものは所詮、単なる幻想なんですよ！』

　キーの高い男の声が、広い酒場いっぱいに響き渡った。

『確かにＡＧＩは重要なステータスです。と回避、このふたつの能力が突出していれば充分に足り得た。これまではね』

　得々と語る声の主は、薄暗い店内の中央に高く浮かぶ四面ホロパネルに映し出されたプレイヤーだった。

　ネット放送局《ＭＭＯストリーム》の人気コーナー、《今週の勝ち組さん》である。現実世界でもテレビやＰＣで配信動画を見ることができるが、無数のＶＲＭＭＯワールド内でも宿屋や酒場などで常時放送されており、やはりプレイヤーたちは《中》で視聴するほうを好む。

　ことに、ゲストプレイヤーが《その世界》の住人であればだ。

『しかし、それはもう過去の話です。八ヶ月かけてＡＧＩをガン上げしてしまった廃人さんたちには、こう言わせてもらいますよ――ご、と』

　嫌味たっぷりなその口調に、広い店内のそこかしこからブーイングがき起こり、幾つものやグラスが床に叩きつけられてポリゴンの小片をき散らした。

　だが《彼》は、その騒ぎには加わらず、店の一番奥のソファに体を丸めたままじっとしていた。

　に降ろしたギリースーツのフードと、顔の下半分をう厚布のから、冷ややかな視線で店内を眺める。

　画面の中で鼻高々になっている男も憎らしいが、それ以上に、でテレビを眺めるプレイヤーたちが不快だった。皆ブーブーとやっかみの声を上げながらも、それをお祭り騒ぎとして楽しんでいる。

　そこまで能天気になれるのか、《彼》にはまったく理解できなかった。テレビの中の男は、単なる偶然の結果として世界最強の地位を手に入れ、同時に最大の搾取者となったのだ。全プレイヤーが支払う接続料のをはね、プロゲーマーを気取っている。

　腹の中では、《彼》と同じように全プレイヤーは男をみ、しているはずだ。その感情がだと言うなら、それを隠し、上辺の笑いにらわせるのはいうえにではないか。

《彼》はスーツの下で全身をらせ、みめた歯のあいだから細く息を吐き出す。まだ時間ではない。トリガーを引くのはもうすこし後だ。

　視線をホロパネルに戻すと、カメラがズームアウトし、男の右に座る番組の司会と、みぎりに座るもうひとりのゲストをフレームに入れたところだった。

　司会進行役の、テクノポップな衣装に全身を包んだ少女が甘い声で言った。

『さすが、全ＶＲＭＭＯ中最もハードと言われる《ガンゲイル・オンライン》のトッププレイヤーだけあって、おっしゃることがカゲキですネ』

『いやあ、《Ｍスト》に呼ばれるなんてひょっとしたら一生に一度でしょうしね。言いたいことは言っちゃおうと思って』

『またまたー。今度の《バレット・オブ・バレッツ》も狙ってらっしゃるんでしょう？』

『そりゃもちろん、出るからには優勝を目指しますけどね』

　男は、派手なブルーシルバーの長髪をかきあげ、カメラ目線で不敵に宣言した。再び店内にブーイングの。

　ＭＭＯストリームは、ガンゲイル・オンライン――通称ＧＧＯ内部のコンテンツではないが、出演者はホストもゲストも生身ではなくアバターだ。《今週の勝ち組さん》は、毎週さまざまなゲームからトッププレイヤーを招くインタビュー番組で、今週のゲストは、ＧＧＯで先月行われた最強者決定バトルロワイヤル、通称・・の優勝者と準優勝者というわけだ。

『しかしねえ、ゼクシードさん』

　長々と銀髪男の自慢話を聞かされた準優勝プレイヤーが、たまりかねたように口を開いた。

『ＢｏＢはソロの遭遇戦じゃないですか。二度やって同じ結果になる保証はないわけで、ステータスタイプの勝利みたいに言うのはどうなんですかねえ』

『いやいや、今回の結果は全ＧＧＯ的傾向の表れと言えますよ。さんはＡＧＩ型だから、否定したい気持ちもわかりますがね……』

　ゼクシードと呼ばれた優勝者が即座に言い返す。

『……これまでは確かに、をガンガン上げて強力な実弾火器を速射するのが最強のスタイルでした。同時に回避ボーナスも上がるので、耐久力の不安点もえましたしね。でもＭＭＯっていうのは、スタンドアローンのゲームとは違って、刻々バランスが変っていくものなんですよ。特にレベル型は原則的にステータスの組み替えができないんだから、常に先を予測しながらポイントを振らなきゃ。そのレベルゾーンで最強のスタイルが、次でも最強とは限らない。ね、考えればわかるでしょう。今後出現する火器は、装備要求も、命中精度もどんどん上がっていきますよ。回避しまくって無傷で切り抜けようなんて甘い考えがいつまでも通用するわけないんです。ボクと闇風さんの戦闘がそれを象徴してますよ。あなたの銃はボクの耐弾アーマーでかなり威力をされたし、逆にボクの射撃は七割近く命中した。はっきり言えばね、これからはＳＴＲ―型の時代ですよ』

　立て続けにし立てられ、闇風という男はいかつい顔をしそうにめた。

『……しかし、それはゼクシードさんは大会直前に要求ＳＴＲぎりぎりのレア銃を入手した結果でしょう。幾ら払ったんです、あれ？』

『いやだなあ、自力ドロップですよもちろん。そういう意味では、最重要ステータスはリアルラックということになるかもですね、ははは』

　ホロパネルの中で笑う銀髪の男を、を込めた視線でみながら、《彼》はスーツに包まれた右腕を動かした。腰のホルスターから突き出たグリップを探り当て、ひやりと硬い金属をきつく握り締める。もうすぐ――もうすぐ、その時がくる。視界の端の時刻表示を確認。あと一分二十秒。

《彼》の隣のテーブルに座る二人組が、ジョッキをりながらぼやいた。

「けっ、調子いいこと言いやがって。昔、ＡＧＩ型最強って言いまくってたのはゼクシードのヤツ自身じゃねえかよ」

「今にして思えば、ありゃ流行をミスリードするだったんだろうなあ……。やられたぜまったく……」

「てことは、あのＳＴＲ―ＶＩＴ最強ってのもブラフか？」

「じゃあほんとは何が来るんだろうな。ガン上げかな？」

「お前やれよ」

「やだよ」

　二人組はひゃっひゃっと笑う。その声が、《彼》の怒りを更に熱していく。されたと気付いているなら、なぜそんなふうに笑っていられるのだ。理解できない。

　――しかし、その愚鈍な笑いもすぐに凍りつくことになる。真の力、真の最強者をその目で見れば。

　時間だ。

《彼》は音もなく立ち上がった。テーブルの間を、一歩一歩進んでいく。誰も、《彼》には目も留めない。

　愚か者たちよ……恐怖するがいい。

《彼》はくと、酒場の中央、ホロパネルの真下で立ち止まった。ギリースーツの腰に装備したホルスターから、なハンドガンを抜き出す。

　闇そのものを凝縮したかのような、冷ややかなブラック・メタリックの輝き。グリップまで金属製で、縦にセレーションが入ったその中央には星形の刻印が打ってある。見た目には、大した威力もなさそうな、どこにでもある自動だ。

　しかしこの銃には《本物の力》がある。

《彼》はじゃきっと音を立ててスライドを引き、初弾をすると、ゆるやかな動作で銃口をぴたりと上空――巨大なホロパネルに向けた。その中で笑う、最強プレイヤー・ゼクシードのに。

《彼》がしばらくそのままの格好でいると、やがて周囲からしげなざわめきが沸き起こった。無制限のＧＧＯでも、さすがに街中だけはアタック不可能となっている。弾丸の発射はできても、プレイヤーにダメージを与えるどころかオブジェクトの破壊すら望めない。

《彼》の無意味な行動に、幾つかの失笑が響いた。しかし《彼》は微動だにせず、黒い銃をアイソセレス・スタンスで構え続ける。

　パネルモニタの中のゼクシードは、相変わらず嫌味なを吐き散らしている。

　ゼクシードの生身は現実世界のどこかに横たわり、頭に装着した《アミュスフィア》を経由してＭＭＯストリームのバーチャル・スタジオに接続している。ゆえに、ガンゲイル・オンライン世界の首都《ＳＢＣグロッケン》商業街のとある酒場で、テレビに映る自分に銃口が向けられているなどとは気付くはずもない。

　しかし《彼》は口を開き、出せる限りの大声で叫んだ。

「ゼクシード！　りの勝利者よ！　今こそ、真なる力による裁きを受けるがいい!!」

　に取られるプレイヤーたちの視線を浴びながら、《彼》は左腕を持ち上げ、指先で額から胸、左肩から右肩に触れて十字を切った。

　手を下ろすと同時に、右手でトリガーを絞る。

　スライドがブローバックし、発射炎が黄色く輝いた。く乾いた音。

　照明が絞られた酒場の薄闇を、金属の弾丸が一直線に貫き――ホロパネルの表面に命中して、小さなライトエフェクトを散らした。

　それだけだった。画面内では相変わらず、ゼクシードが盛んに口を動かしている。

　今度こそ、店内にが沸き起こった。「あいたたた」「やっちゃった」などという声が漏れ聞こえる。それらにさって、ゼクシードの台詞が流れる。

『……ですからね、ステータス・スキル選択も含めて、最終的にはプレイヤー本人の能力というものが…………』

　不意に、声が途絶えた。

　客たちの視線がパネルに戻った。

　ゼクシードは、口を開けたまま、眼を丸くして凍りついていた。その手がのろのろと持ち上がり、胸の中央を摑むような仕草を見せた。

　直後、その姿はふっと消失し、ポリゴンの椅子だけが残された。司会が慌てたように言った。

『あらら、回線が切断されてしまったようですね。すぐ復帰すると思うので、皆さんチャンネルはそのまま……』

　しかし、店中の誰もがもうそれを聞いていなかった。しんとした静寂の中で、全ての視線が再び《彼》に集まっていた。

《彼》はモニタに向けたままだった銃を戻し、水平に構えた。そのまま、ゆっくりと体を回転させ、店内のプレイヤーたちを射線でなぞっていく。

　一回りすると、《彼》はもう一度黒い銃を高々とかざし、叫んだ。

「……これが本当の力、本当の強さだ！　愚か者どもよ、この名を恐怖とともに刻め！」

　大きく息を吸い――。

「俺と、この銃の名は《死銃》…………《デス・ガン》だ!!」

《彼》は銃をホルスターに戻し、左手を振ってメニューウインドウを出した。

　ログアウトボタンを押しながら、《彼》は、勝利感と、それに倍する焼け付くようなえを味わっていた。

　　　１

「いらっしゃいませ。お一人様でしょうか？」

　とに頭を下げるウェイターさんに、待ち合わせです、と答えて俺は広い喫茶店を見渡した。

　すぐに、奥まった窓際の席からな大声が俺を呼んだ。

「おーいキリトくん、こっちこっち！」

　上品なクラシック音楽の流れる空間に低くさざめいていた談笑が一瞬静止し、非難めいた視線が集中する。俺は首を縮め、足早に声の主へと近づく。古ぼけたレザーブルゾンにダメージジーンズという出で立ちの俺は、買い物帰りの上流階級マダムたちが八割をめる店内ではいかにも場違いで、こんな所に呼び出した相手への怒りが今更のように沸き起こる。

　これで、先方がの美女というならまだ我慢するが、手を振っているのはスーツ姿の男だった。俺は不機嫌さを隠しもせず、どすんと椅子に腰を下ろした。

　即座に横合いからウェイターさんがお冷やとおり、メニューを差し出す。本革張りと見えるそれを手に取ると、テーブルの向かいから陽気な声が飛ぶ。

「ここは僕が持つから、何でも好きに頼んでよ」

「言われなくてもそのつもりだ」

　つっけんどんに答えてメニューに目を走らせると、恐ろしいことに最もなのが《シュー・ア・ラ・クレーム》千二百円也で、反射的にブレンドひとつと答えそうになるが、よくよく考えれば男は超高給取りのであり、それ以前に支払いは交際費、つまり国民の血税によって行われるのだ。らしくなった俺は、平静を装った声で次々にオーダーした。

「ええと……パルフェ・オ・ショコラ……と、フランボワズのミルフィーユ……に、ヘーゼルナッツ・カフェ」

　どうにかかまずに言えばメニューの合計額は実に三千九百円だ。ハンバーガーにシェイクで済ませて差額を現金でよこせと言いたくなる。ちなみに、頼んだモノの実体はまるで見当もつかない。

「かしこまりました」

　ウェイター氏が滑らかに退場し、俺はようやく一息ついて顔を上げた。

　どっさりと生クリームのった巨大プリンをパクつく男の名は、。太い黒縁のにしゃれっ気の無い髪型、国語の教師然としたキマジメそうな線の細い顔立ちは、とてもそうは見えないがこれで国家公務員のキャリア組なのだ。所属するのは総務省総合通信基盤局高度通信網振興課第二別室、省内での名称は通信ネットワーク内仮想空間管理課、通称《仮想課》。

　つまりこの男は、現在無秩序な状態にあるＶＲワールドを監視する、国側のエージェント……もしくはスケープゴートというわけだ。本人はことあるごとにトバされたと我が身を嘆いているが、それはまあ、事実であろうと俺も思う。

　その不遇な菊岡氏は、プリンの最後の一片を幸せそうに口に運ぶと、ようやく顔を上げて無邪気な笑みを見せた。

「やあキリト君、ご願って悪かったね」

「そう思うなら銀座なんぞに呼び出すなよ」

「この店の生クリーム、絶品なんだよねえ。シュークリームも頼もうかな……」

　俺は系の漂うお絞りで手をいながら、ため息混じりに言った。

「……それと、あんたにキリトって呼ばれる理由ない気がするんだけど」

「つれないなぁ。一年前、病院のベッドで目覚めた君のもとに、真っ先に駆けつけたのは僕じゃないかい」

　――残念ながら、それは事実だ。《あのデスゲーム》から脱出し、した俺の病室を最初に訪れたのは、対策チームの国側エージェントを務めていた菊岡だった。

　当初はもちろんこちらは敬語を使っていたが、そのうちにこの男がただの善意で俺に接触しているわけではないと気付くに及んで、自然とぞんざいな口のき方になってしまっている。あるいは、そうなるように仕向けられている――とまではさすがに考えすぎだろうが。

　追加注文をするか否か真剣に悩んでいるらしき菊岡をちらりと見やり、この男のペースに乗せられてはならぬと胸中で自戒してから、俺は口を開いた。

「……ニュースで、沖になんかのレアメタルの巨大が見つかって、関係省庁の偉い人全員でオクラホマミキサー踊ってるって言ってたぞ。シュークリーム一個くらいでそんなに悩むなよ」

　すると菊岡は顔を上げ、何度か瞬きしてからにやりと笑った。

「いやあ、どんなに利益が出ても、無関係なには当分回ってこないんじゃないかなあ。ううん、ここは我慢するとしよう、国家予算のために」

　ぱたり、とメニューを閉じる官僚に、俺は再びこれ見よがしなため息をついていやる。

「なら、そろそろ本題に入ってえませんかね。……つっても、どうせまたバーチャル犯罪がらみのリサーチなんだろ？」

「おお、キリト君は話が早くて助かるね」

　まったく悪びれることなくそう応じると、菊岡は隣の椅子に置いたアタッシュケースから極薄のタブレット型端末を取り出した。

　――そう、この男はつまるところ、日本のネットワーク史上最大の犯罪である《ソードアート・オンライン事件》の生還者としての俺を、情報提供者として利用しているのだ。

　ものの本によれば、公安警察などでは情報源を《協力者》や《モニター》と呼び、代価を与えつつ継続的に情報を提供させることを《運営する》と称するらしい。それにえば、こうやってケーキをダシにたびたび呼び出される俺は《菊岡に運営されている》ということになるのだろう。

　そう考えるといい気はしないが、この男には、規則を破ってアスナが収容されている病院を教えてもらったという借りがある。

　その情報がなければ、俺は現実世界にいてをあれほど早く見つけ出すことはできなかった。必然的にの悪魔的計画に気付くこともなく、奴がアスナを手に入れるのを阻止することも不可能だったはずだ。

　ゆえに俺は、当分のあいだは菊岡の《モニター》に甘んじようと考えている。もっとも敬語は使ってやらないし、高いケーキも容赦なく頼むが。

　いっぽうの運営者様は、そんな俺の心境を知ってか知らずか、タブレット端末を指先でつつきながらのんびりした口調で言った。

「いやあ、それがねえ。ここに来て、バーチャルスペース関連犯罪の件数がまた増え気味でねえ……」

「へえ。具体的には？」

「ええと……仮想財産の盗難やらの被害額が、十一月だけで百件以上。それに、ＶＲゲーム内のトラブル等が原因で起きた現実の傷害事件が十三件。うち一件は傷害致死……こいつは大きく報道されたからキリト君も知ってるだろうけど、模造の西洋剣を自分でいで、新宿駅で振り回して二人殺したって事件ね。うひゃー、刃渡り百二十センチ重さ三・五キロだって。よくこんなの振れたね」

「ヘビープレイのためにドラッグ使ってて錯乱したらしいな……。その一件だけ見ればまったく救われない話だけど、こう言っちゃなんだが全体でその程度の件数なら……」

「そう、その通り。全国で起きる傷害事件の中ではたる数だし、これをってＶＲＭＭＯゲームが社会不安をしている、なんて短絡的な結論は出しゃしないよ。でもね、君も前に言っていたけど……」

「――ＶＲＭＭＯゲームは、現実世界で他人を物理的に傷つけることへの心理的障壁を低くする。それは俺も認める」

　その時、ウェイターが再び歩行音なしに現れ、俺の前に皿を二つとカップを一つ並べた。

「以上でおいでしょうか」

　くと、恐ろしい金額が記されているはずの伝票をテーブルの端に裏向きに置いて消える。俺はとりあえずナッツの香りが漂うコーヒーを一口含み、話を続けた。

「……一部のゲームではＰＫ行為が日常化しているし、あれはある意味では、現実的殺人の予行演習だからな。したタイトルじゃ、腕を切れば血が噴き出すし、腹を切ればハラワタがぶちまけられる。それに取りかれたマニアはログアウトの代わりに自殺したりするらしいからな」

　こほん、という払いの音に隣を見ると、上流階級マダム二人がい目つきで俺をんでいた。首を縮め、小声で続ける。

「毎日あんなことを繰り返してれば、一丁現実でやってやろうって奴が出てくるのも不思議はないな。何らかの対策が必要だろうとは俺も思うよ。法規則は無理だろうけど」

「無理かね？」

「無理だね」

　金色のスプーンで、極薄のと桃色のクリームが何層にも重なったケーキを慎重にすくい取り、口に運ぶ。一百円はするだろうな、などとつい考えてしまう。生地がはらりと溶けていく食感を楽しみながら、とした話題を続ける。

「……ネット的に鎖国でもしないとな。ＶＲＭＭＯは、回線にかかる負荷だけ見れば軽いコンテンツだから、国内でいくら取り締まったところでユーザーも業者も海外に脱出するだけだろうな」

「フム……」

　菊岡は、真剣な視線をテーブルに落とし、数秒黙考したあと口を開いた。

「……そのミルフィーユおいしそうだね。一口くれないか」

「………………」

　俺は三度目のため息をとともに、皿を菊岡の前に押しやった。キャリア官僚はとしながらおよそ二百八十円をざっくり奪い去り、る。

「しかしねえ、キリト君。僕は思うんだけどね……なんでＰＫなんてするんだろうね。殺し合うよりも仲良くする方が楽しいだろう？」

「……アンタだってをプレイしているんだから、少しは解るだろう。フルダイブ技術が出てくるずっと以前から、ＭＭＯＲＰＧってのは奪い合いなんだよ。更に言えば、エンディングのないネットゲームにユーザーを向かわせるは突き詰めれば……優越感を求める本能的な衝動なんだと、俺は思う」

「ほう？」

　口をもぐもぐさせながら、菊岡は説明を求めるようにを持ち上げる。まったく、なんでこんな話をしなきゃならなんだと内心で毒づき、半ば仕返しのつもりで言葉を続ける。

「……ゲームに限った話じゃないさ。認められたい、人より上に行きたいってのは、この社会の基本的構造そのものだろ？　アンタだってえがあるんじゃないのか。同じ総務省の官僚でも、自分よりいい大学を出て、パワーで早く出世していく奴はましいし、逆にノンキャリア組にられりゃあ気持ちいい。その劣等感と優越感のバランスが取れてるから、そんな平和な顔してケーキ食ってられるんだろ」

　菊岡はミルフィーユを呑み込み、苦笑した。

「言い難いことをハッキリ言うね、君は。そういうキリト君はどうなんだい。バランス取れてるのかい？」

「…………」

　もちろん俺とて劣等感は山ほど抱えているが、この男にそこまで教えてやる気はさらさらない。素知らぬ顔で言い返す。

「……まあ、一応彼女もいることだしね」

「なるほど、その一点にいては僕はキリト君が死ぬほどましい。今度ＡＬＯで女の子を紹介してくれないか。あのシルフの領主さんなんか、好みだねえ」

「言っとくけど、口説くときに、僕高級官僚なんだ、何て言ったら斬られるぞ」

「彼女になら一度斬られてみたいね。――で？」

「で、その優越感て奴だけど、現実世界で手に入れるのは意外に難しいよな。努力しないとなかなか手に入るもんじゃない。いい成績を取る努力、スポーツが上達する努力、かっこよく、あるいはくなる努力……どれもえらく時間と気力が必要な上に、おいそれと実を結ぶもんでもないしさ」

「なるほど。僕も受験では死ぬほど勉強したが、東大には落ちた」

　何故か嬉しそうに笑いながら言う菊岡を見やり、もう突っ込んでやらずに早口でまくし立てる。

「そこで、だ。これは、現実を犠牲にして時間をつぎ込めば必ず強くなる。レアアイテムも手に入る。もちろんそれも努力だけど、なんせゲームだ。勉強したり筋トレしたりするよりも格段に楽しいよ。高価な装備を着けて、ハイレベル表示をぶらさげて街の大通りを歩けば、自分より弱いキャラクターからのの視線が集まる……というか、集まると錯覚できる。狩場に行けば、圧倒的攻撃力でモンスターを蹴散らし、ピンチのパーティーを救ったりもできる。感謝され、尊敬されると――」

「錯覚できる？」

「……もちろん、これは一方的な見方だよ。ＭＭＯゲームには他の要素もある。でも、コミュニケーション自体を主眼としたネットワークゲームは昔からあったけど、どれもＭＭＯＲＰＧほどには成功しなかった」

「……なるほどね、そういうゲームでは、優越感を満足させにくかった？」

「そう。――そして、ＶＲＭＭＯが出てきた。こいつはなんせ、街を歩けば実際に他人の視線を感じられるんだからな。モニタ越しに想像なんてしなくてもいい」

「フムン。確かに、イグシティで君がアスナちゃんと並んで歩いてるとみんな見とれるからねえ」

「……言いいことをはっきり言うな、アンタ。ともかく、ＶＲＭＭＯゲームに時間をつぎ込めば、誰でもそれなりに優越感を手に入れることができる。そしてそれは、勉強ができるとか、サッカーがうまいとか、金があるとかいうソレよりも、もっとシンプルで、プリミティブで、人間の本能に訴える種類のものだ」

「……つまり……？」

「つまり、《強さ》さ。物理的、肉体的な強さ。自分の手で、相手を破壊できる力。これはもう麻薬みたいなもんだ」

「…………《強さ》……すなわち最大の《力》、か」

　菊岡は、どこか懐かしむような口調で呟いた。

「……男の子は、誰しも一度は強さにれるものだからね……。格闘マンガを読んで、同じ修行をしてみたり、さ。でもまあ、大抵はすぐにそううまく行くもんじゃないと悟って、もっと他の現実的な夢に切り替えていくわけだけど……。――そうか、だがならば、その夢の続きをもう一度見られる、ということかい？」

　俺は頷き、珍しく喋りすぎたせいでいた喉をコーヒーで湿らせた。

「ああ。一部の格闘系タイトルは、リアリティを追及して、実在する格闘技の流派と提携したりしてるからな」

「ほう？　と言うと？」

「つまり……ゲームの中でキャラを育てると、ナントカ流空手やドコソコ流の達人になれるんだよ。舞台も新宿とか渋谷をリアルに再現してて、アウトローなお兄さんたちの敵キャラを片っ端から制裁できるわけだ。……つっても、もちろん闘技者の心構えとかは教えてくれないからな。その手のゲームにどっぷりまり切った人間が、アバターで形だけ覚えた技を現実世界で使ってみたくなる……一歩進んで使ってしまう、そういう可能性が皆無だとは、残念ながら言えないと俺は思う」

「なるほどね……。ＶＲＭＭＯ世界での《強さ》が、現実を侵食するわけか。ねえ、キリト君」

　菊岡は、再び真剣な顔になり、俺を見た。

「それは、本当に心理的なものだけなのだろうかね？」

「……どういう意味だ？」

「暴力に対する心理的ハードルを低くしたり、知識や技術を手に入れたりするだけでなく……実際に、何らかのフィジカルな影響を現実のプレイヤーの肉体に及ぼす……ということはないだろうか？」

　今度は俺が考え込む番だった。

「……それは、例えばさっきの、新宿で重さ三キロ半の剣を振り回した男の筋力が、ゲーム世界からの影響によって上昇したものだったりするか……ということか？」

「うん、そう」

「うーん……。フルダイブ機器が神経系に及ぼす影響ってのは、まだ研究が始まったばっかりらしいからなあ。基本的に寝たきりなんだから、基礎体力は確実に落ちるだろうけど、火事場の馬鹿力的な瞬間出力になるとどうかなあ……。――でも、そんなこと、俺よりアンタの方が詳しいだろ？」

「大脳生理学のセンセイに話は聞きに行ったがね、チンプンカンプンさ。……ずいぶん遠回りしたが、今日の本題はそこなんだ。これを見てくれ」

　菊岡は、タブレットを操り、俺に差し出した。

　受け取り、き込むと、液晶画面に見知らぬ男の顔写真と、住所等のプロフィールが並んでいた。伸ばしっぱなしの感のある長髪、銀縁の眼鏡、頬や首にかなり脂肪がついている。

「……誰だ？」

　俺から端末を取り返し、菊岡は指先を走らせた。

「ええと、先月……十一月の十四日だな。東京都中野区某のアパートで、掃除をしていた大屋が異臭に気付いた。発生源と思われる部屋のインターホンを鳴らしたが返事がない。電話にも出ない。しかし部屋の中の電気はいている。これはということで電子ロックをして踏み込んで、この男……二十六歳が死んでいるのを発見した。死後五日半だったらしい。部屋は散らかっていたが荒らされた様子はなく、遺体はベッドに横になっていた。そして頭に……」

「アミュスフィア、か」

　俺の部屋にも一台転がっている、金属リングを二つ重ねた形のヘッドギア型フルダイブ機器の姿を思い浮かべながらそう言うと、菊岡は軽く頷いた。

「その通り。――すぐに家族に連絡が行き、変死ということで司法解剖が行われた。死因は急性心不全となっている」

「心不全？　ってのは心臓が止まったってことだろう？　何で止まったんだ？」

「解らない」

「…………」

「死亡してから時間が経ちすぎていたし、犯罪性が薄かったこともあってあまり精密な解剖は行われなかった。ただ、彼はほぼ二日に渡って何も食べないで、ログインしっぱなしだったらしい」

　俺は再びを寄せる。

　正直、その手の話は珍しくない。何せ、現実世界で何も食わなくても、向こうで仮想の食べ物を詰め込むと偽りの満腹感が発生し、それは数時間持続するからだ。廃人級、と呼ばれ超コアなゲーマーにとっては、飯代は浮くしプレイ時間は増やせるしで、一日どころか二日に一食という人間も珍しくない。

　しかし当然そんなことを続けていれば、体に悪影響を及ぼさないわけがない。栄養失調なんてのはザラで、を起こして倒れ、一人暮らしゆえにそのまま……ということも珍しいことではないのだ。

　一瞬眼をつぶり、茂村氏のを祈ってから、俺は口を開いた。

「……確かに悲惨な話だけど……」

「そう、悲惨だが今やよくある話だ。こういう変死はニュースにならないし、家族もゲーム中に急死なんて話は隠そうとするので統計も取れないしね。ある意味ではこれもＶＲＭＭＯによる死の浸食だが……」

「……一般論を聞かせるために呼んだわけじゃないんだろう？　何があるんだ、そのケースに？」

　俺の問いに、菊岡はちらりと端末をして答えた。

「この茂村君のアミュスフィアにインストールされていたＶＲゲームは一タイトルだけだった。《ガンゲイル・オンライン》……知ってるかい？」

「そりゃ……もちろん。日本では唯一《プロ》がいるＭＭＯゲームだからな。プレイしたことはないけど」

「彼は、ガンゲイル・オンライン……略称ＧＧＯ中ではトップに位置するプレイヤーだったらしい。十月に行われた、最強者決定イベントで優勝したそうだ。キャラクター名は《ゼクシード》」

「……じゃあ、死んだときもＧＧＯにログインしてたのか？」

「いや、どうもそうではなかった。《ＭＭＯストリーム》というネット放送局の番組に、《ゼクシード》の再現アバターで出演中だったようだ」

「ああ……Ｍストの《今週の勝ち組さん》か。そういや、一度ゲストが落ちて番組中断したって話を聞いたような気もするな……」

「多分それだ。出演中に心臓発作を起こしたんだな。ログで、秒に至るまで時間が判っている。で、ここからは未確認情報なんだが……ちょうど彼が発作した時刻に、ＧＧＯの中で妙なことがあったってブログに書いてるユーザーがいるんだ」

「妙？」

「ＭＭＯストリームはＧＧＯの内部でも中継されてるんだろう？」

「ああ。酒場とかで見られる」

「ＧＧＯ世界の主都、《ＳＢＣグロッケン）という街のとある酒場でも放送されていた。で、問題の時刻ちょうどに、一人のプレイヤーがおかしな行動をしたらしい》

「…………」

「なんでも、テレビに映っているゼクシード氏の映像に向かって、裁きを受けろ、死ね、等と叫んで銃を発射したということだ。それを見ていたプレイヤーの一人が、偶然音声ログを取っていて、それを動画サイトにアップした。ファイルにはのカウンターも記憶されていてね……。ええと……テレビへの銃撃があったのが、十一月九日午後十一時三十分二秒。重森君が番組出演中に突如消滅したのが、十一時三十分十五秒」

「……偶然だろう」

　もう一つの皿をに引き寄せながら、俺は言った。

　茶色の円筒形物体をスプーンでり、口に運ぶ。途端、その冷たさに驚く。ケーキかと思っていたらアイスクリームのだったらしい。甘みをぎりぎりまで抑えた濃密なチョコレートの風味がいっぱいに広がり、菊岡の話がもたらした口中の苦味を上書きしていく。

　立て続けに三分の一ほどを胃に送り込んでから、言葉を続ける。

「ＧＧＯのトッププレイヤーともなれば、まれたり恨まれたりは他のＭＭＯの比じゃあないぞ。本人を直接銃撃するのは度胸が要るだろうが、テレビの映像を撃つくらいのことはあってもおかしくない」

「うん、だが、もう一件あるんだ」

「…………なに？」

　俺はスプーンを動かす手を止め、相変わらずポーカーフェイスの菊岡を見上げた。

「今度のは約十日前、十一月二十八日だな。埼玉県さいたま市大宮区某所、やはり二階建てアパートの一室で死体が発見された。新聞の勧誘員が、電気はいているのに応答がないんで居留守を使われたと思って腹を立て、ドアノブを回したら鍵が掛かってなかった。中を覗くと、布団の上にアミュスフィアを被った人間が横たわっていて、同じく異臭が……」

　ごほん！　というわざとらしいの音に、俺と菊岡が会話を中断して隣を見ると、先ほどの二人組のマダムが、ゲイザーの邪眼もかくやという視線をこちらに向けていた。だが菊岡は意外な豪胆さを発揮し、ぺこりとしただけで話を続けた。

「……まあ、詳しい死体の状況は省くとして、今度もやはり死因は心不全。名前は……これも省いていいか。男性、三十一歳だ。彼もＧＧＯの有力プレイヤーだった。キャラネームは……《薄塩たらこ》？　正しいのかなこれ？」

「昔、ＳＡＯに《北海いくら》ってやつがいたからそいつの親戚かもな。――そのたらこ氏も、テレビに出てたのか？」

「いや、今度はゲームの中だね。アミュスフィアのログから、通信が途絶えたのは死体発見の三日前、十一月二十五日午後十時零分四秒と判明している。死亡推定時刻もそのあたりだね。彼はその時刻、グロッケン市の中央広場でスコードロン――ギルドのことらしいんだけど――の集会に出ていたらしい。壇上でを飛ばしているところを、集会に乱入したプレイヤーに銃撃された。街の中だったからダメージは入らなかったようだが、怒って銃撃者に詰め寄ろうとしたところでいきなり落ちたそうだ。この情報も、ネットの掲示板からのものだから正確さには欠けるが……」

「銃撃した奴ってのは、《ゼクシード》の時と同じプレイヤーなのか？」

「そう考えていいだろう。やはり裁き、力、といった言葉の後に、前回と同じキャラクターネームを名乗っている」

「……どんな……？」

　菊岡はダブレットを眺め、眉をひそめた。

「《シジュウ》……それに、《デス・ガン》」

「デス……ガン……」

　――すなわち《》か。

　空になった皿にスプーンを置き、俺はその名前を何度か口中で呟いた。キャラネームというのは、例えどのような冗談めいた名前であっても、確実にキャラクターの印象の一部を形作る。死銃、という名の響きが想起させたのは、黒い金属の冷やかさだった。

「……ゼクシードと薄塩たらこの死因が心不全ってのは確かなんだろうな？」

「と、言うと？」

「脳には……損傷は無かったのか？」

　訊いた途端、菊岡は意を得たりという不意にニッと笑った。

「僕もそれが気になってね。司法解剖を担当した医師に問い合わせたが、脳には出血や血栓といった異常は見つからなかったそうだ」

「…………」

「それにね、ナーヴギアの場合は……あ、いいかい。この話して」

「いいよ」

「……ナーヴギアは、使用者に死をもたらすとき、信号素子を焼き切るほどの高出力マイクロウェーブを発して脳の一部を破壊したわけだけれど、アミュスフィアはそもそもそんなパワーの電磁波は出せない設計なんだよね。あの機械に出来るのは、視界や聴覚といった五感の情報を、ごく穏やかなレヴェルで送り込むことだけだと、開発者は断言したよ」

「もうメーカーにまで問い合わせてるのか。……随分と手回しがいいな、菊岡さん？　こんな偶然と噂だけで出来上がってるようなネタに？」

　じっと眼鏡の奥の細い眼を見ると、菊岡は一瞬表情を消し、すぐにフッと唇をばせた。

「飛ばされた身としては、毎日が実にヒマでね」

「じゃあ、今度アインクラッドの最前線攻略に付き合えよ。メイジとしてはなかなか筋がいいってユージーンのがめてたぞ」

　実のところ、俺はこの男を外見や物腰どおりのトボけた役人とは思っていない。ＡＬＯにキャラを作っているのも、ゲームに興味があるからではなく、そうするのがＶＲワールドの情報を収集する上で都合がいいからなのだろう。以前にった名刺には確かに総務省と肩書が付いていたが、それすらもどこか疑わしいフシがある。本当の所属はもっと、国の治安に密接に関わる部署なのではないかと思えてならない。

　しかしそれはそれとして、現在の《仮想課》が《ＳＡＯ事件被害者救出対策本部》だった時代に、この男がしたことで全プレイヤーを病院に収容する体制が整ったのは確からしい。それゆえに、アスナの一件の借りも含めて、今のところは好意と警戒心が六対四くらいの接し方をすることにしている。

　そんな俺の内心を知ってか知らずか、菊岡は後頭部をきながら照れくさそうに笑った。

「いやあ、スペルワードの暗記はともかく、詠唱がねえ。早口言葉、苦手なんだ昔から。……で、まあ、この件だけど九割方偶然かデマだろうとは僕も思うよ。だから、ここからは仮定の話さ。――キリト君は、可能だと思うかい？　ゲーム内の銃撃によって、プレイヤー本人の心臓を止めることが？」

　菊岡のその台詞で、あるイメージが喚起され、俺は軽く眉を寄せた。

　全身黒ずくめの……顔の見えない狙撃者が、虚空に向かって銃のトリガーを引く。発射されるのは黒い幻影の弾丸だ。それは、仮想空間の壁を貫き、パケットが飛び交うネットワークの世界に侵入する。ルータからルータ、サーバからサーバへと弾丸は何度も直角に曲がりながら突進する。やがてそれは、あるアパートの一室、壁に掛けられたＬＡＮコネクタで実体化し、横たわる男の心臓へと……

　頭を軽く振ってその妄想を払い落とし、俺は指を一本立てた。

「有り得ない話だと思うけど……じゃあ仮に、その……《死銃》なる銃撃者によって、《ゼクシード》と《薄塩たらこ》のアミュスフィアに何らかの信号が送られたとして……」

「おっと、まずはそこからだ。できるのかい、そんなことだ」

「うーん……。送られたのが、謎の致命的パワーじゃなくて正常な感覚信号だと仮定しての話になるけど……。少し前にあった、《イマジェネレイター・ウイルス》の騒ぎはえてるか？」

「ああ、あのびっくりメール事件ね」

　イマジェネレイター、というのは個人によって開発されたアミュスフィア専用のメールソフトだ。ソフトが生成する仮想空間にダイブし、カメラに向かってメッセージを吹き込むと、それをメール形式のファイルに圧縮してくれる。メールを受け取った側が再生すると、目の前に送り主のバーチャル体が現れ、メッセージをる、という仕組みだ。やがて、いろいろな映像、音楽を添付したり、触感までもメールで伝えることができるようになって大流行した。

　しかしやがてソフトにセキュリティホールが発見され、それを利用したウイルスメールが横行する騒ぎが起こった。メールを受信した時点で仮想空間にダイブしていると、どこに居ようと強制的にメールがプレビューされ、眼前にショッキングな映像やら音声やら――たいていエロいかグロいかどちらかだった――がぶちまけられるのだ。

　もちろん即座に修正ファイルがアップされ、事件は収束したのだが……。

「――《イマジェン》はもう、ほとんどのアミュスフィアユーザーがインストールしている。もし未知のセキュリティホールが存在し、対象のメールアドレスもしくはＩＰアドレスが解っていれば……」

「……なるほど、前もって送信タイマーを仕掛けておき、銃撃と同時に任意の信号を送り込む――ということは可能か」

　菊岡は骨ばった指を組み合わせ、その上にを乗せて頷いた。

「では、そこはクリアしたとしよう。――しかし、送信できるのは致命的ないの銃弾じゃない。あくまで正常な感覚刺激だ」

「つまり、心臓を止めるほどの感触……もしくは味、い……光景、音……か。順番に考えていこう。まずは触覚、皮膚感覚だ」

　俺は言葉を切り、右手の人差し指で左のをなぞった。先ほど、チョコケーキかと思って食べたものがアイスクリームだったときの驚きを思い出す。

「……全身に、限界いっぱいの冷感を送り込んだらどうだ？　氷水の風呂に飛び込んだような。心臓を起こさないか？」

「うーん……。冷水に飛び込んで心臓が止まるっていうあれは確か、温度差によるショックで全身の血管が収縮して、心臓に負担がかかるから……じゃなかったかな？」

「――じゃあ、この線はダメか。脳が仮想の冷感を認識しても、手足の毛細血管にまでは影響しないだろうしな……」

「なら、こういうのはどうかね」

「ちっちゃい虫……甲虫よりも、ナガムシ系がいいね。毛虫とかムカデだのがぎっしり詰まった穴に放り込まれる感触だ。もちろん映像も併用する。うはっ、想像しただけでさぶいぼが出るね」

「…………」

　したくはなかったがつい俺も想像してしまった。

　のんびりフィールドを歩いているとき、いきなり足元の地面が消え去り、深い穴に落ち込む。そこには細くて長い生き物がうじゃうじゃいており、全身をもぞもぞいまわった挙句、やから服の中へと……

「……確かに鳥肌は立つけどなあ」

　俺は両腕を擦りながら首を振った。

「でも、その程度のドッキリなら、例の《イマジェン・ウイルス》でもやってたぜ。いきなり頭上から巨大芋虫やらエチゼンクラゲが降ってきたりしたんだ。でも心臓が止まった奴はいなかった……と思う。そもそも、ＶＲＭＭＯに入ってる時ってのは、無意識のうちに突発事態に備えてるものなんだ。フィールドによっては、いきなり真横にボスモンスターがしたりするんだぞ。いちいち心臓が止まってたらゲームなんてやってられない」

「それもそうか」

　菊岡は肩をすくめ、カップを持ち上げると軽く回した。

「……では、次は味覚とだ。どうかな、いきなり口の中に、恐ろしく臭い……キビャックかなんかの味を再生する。やられた人間は、当然吐き出そうとする。その反射が、生身の身体にまで及ぶ……」

「それなら、心停止じゃなくて物で窒息するんじゃないか？　だいたい、そのキビャックってのは何なんだ」

　その途端、菊岡の眼が嬉しそうに輝いたので激しく後悔する。この男は悪趣味な話をするのが大好きなのだ。エリートのくせに彼女ができないのもそのあたりに原因があるのでないか。

「おや、知らない？　キビャック。エスキモーの食べ物でね、初夏あたりにアパリアスという小さな渡り鳥を捕まえて、肉を抜いたアザラシで作った袋に詰め込むんだ。それを冷暗所に数ヶ月放置すると、やがてアザラシの脂肪がアパリアスに染み込んで、いい感じに熟成、というより腐敗する。そうなったところで鳥を取り出して、チョコレート状にどろどろに溶けた内蔵を賞味するという食べ物だ。臭さについてはかのシュールトレミングをも上回るらしいが、これが癖になるとたまらないとか……」

　ガタン！　という大きな音に視線を向けると、隣席のマダム二人が口元を押さえ、足早に立ち去っていくところだった。俺は深くため息をつき、菊岡の言葉を遮った。

「グリーンランドに行く機会があったら試してみるよ。あと、そのシュールなんとかってのは説明しなくていいからな」

「おや、そうかね」

「残念そうな顔をするな。――いくらなんでも、臭いものを食ったくらいで心臓は止まらないだろう。次に行くぞ。……映像、だが……」

　コーヒーのしい香りで菊岡の臭い話をしてから、言葉を続ける。

「さっきの虫の話と一緒で、やはり意味のある映像で心臓を止めるというのは無理があると思う。たとえどんな恐ろしい、残酷な映像でもな。標的の、ものすごいトラウマを突くようなものならあるいは、と思うが、そんなの調べるのは不可能だろう」

「フム。――意味のある、と言ったね？」

「ああ。……俺は産まれるずっと前の話らしいから詳しいことは知らないが、テレビやアニメを見ていた子供が、全国で同時に何人も倒れる、という事件があったはずだ」

「――あれか。僕は当時幼稚園児だったから、リアルタイムで見ていたよ」

　菊岡は懐かしそうに口を綻ばせた。

「ええと、確か赤と青の光が連続してフラッシュする演出で、発作を起こしたんだったかな」

「多分それだ。同じように、猛烈な光がスパークするような映像を送り込んだとする。普通人間は、そういう時は反射的に目を閉じるが、直接脳に流し込まれればそうもいかない。何らかのショック症状を起こしても不思議はない」

「うん、たしかに、そうだ」

　菊岡は頷き、しかるのちに首を振った。

「――だがね、その問題は、アミュスフィア開発当時にも論議されたんだそうだ。結果、安全装置というか、リミッターが設けられることになった。一定以上のレベル振幅がある映像信号は、アミュスフィアでは生成できないんだ」

「――おい、アンタ」

　俺は今度こそ、疑念純度百パーセントの視線で菊岡の顔をんだ。

「やっぱり、実はもう一通りこのへんのことは検討済みなんじゃないのか？　総務省のエリート様連中が頭を絞ったあとなら、今更俺なんかの出番はないはずだぞ。どういうつもりなんだ一体」

「いやいやそんなことはない。キリト君の思考は実の刺激的で、大いに参考になるよ。それに僕、君と話するの好きなんだ」

「僕は好きじゃない。――聴覚についてだが、そういうことなら当然そっちにもリミッターがあるはずだな。じゃあこれで話は終わりだ。結論――ゲーム内からの干渉でプレイヤーの心臓を止めるのは不可能。《死銃》氏の銃撃と二人の心臓発作は偶然の一致。じゃあ、俺は帰る。ご」

　これ以上この話に付き合うとロクなことにならない予感がして、俺は早口に礼を言って席を立とうとした。

　だが、やはり菊岡が慌てたように呼び止めた。

「わあ、待った待った。ここからが本題の本題なんだよ。ケーキもうひとつ頼んでいいからさ、あと少し付き合ってくれ」

「…………」

「いやあ、キリト君がその結論に達してくれて、ホッとしたよ。僕も同じ考えなんだ。この二つの死は、ゲーム内の銃撃によるものではない。ということで、改めて頼むんだが――」

　来るんじゃなかった、としみじみ思いながら、おれは続く言葉を聞いた。

「ガンゲイル・オンラインにログインして、この《死銃》なる男と接触してくれないかな」

　にっこり、

　と実に無邪気な笑顔を見せる公務員に、最大限冷ややかな声をぶつける。

「接触、ねえ？　ハッキリ言ったらどうだ、菊岡サン。撃たれてこい、ってことだろう、その《死銃》に」

「いや、まあ、ハハハ」

「やだよ！　何かあったらどうするんだよ、アンタが撃たれろ。心臓トマレ」

　再び立ち上がろうとした俺の袖を、菊岡がはっしと摑んだ。

「さっき、その可能性はないって合意に達したじゃないか、僕らは。それに、この《死銃》氏はターゲットにかなり厳密なこだわりがあるようだ」

「……こだわり？」

　やむなく腰を下ろし、問い返す。

「イエス。ゲーム内で《死銃》が撃った二人、《ゼクシード》と《薄塩たらこ》はどちらも名の通ったトッププレイヤーだった。つまり、強くないと撃ってくれないんだよ、多分。僕じゃあ何年たってもそんなに強くなれないよ。でも、かの氏が最強と認めた君なら……」

「俺でも無理だよ！　ＧＧＯってのはそんな甘いゲームじゃないんだ。プロがうようよしてるんだぞ」

「それだ、そのプロってのはどういうことなんだい？　さっきもそう言ったが」

　結局菊岡のペースに巻き込まれていることを自覚しつつ、俺はしぶしぶ解説する。

「……文字通りだよ。ゲームで稼いでる連中だ。ガンゲイル・オンラインは、全ＶＲＭＭＯ中で唯一、《ゲームコイン現実還元システム》を採用しているんだ」

「……ほう？」

　さすがのエージェント菊岡も、ゲームのことに関してはまだまだ知識が追いつかないと見え、今度の疑問符は本物のようだった。

「つまり、簡単に言えば、ゲームの中で稼いだ金を、現実の金としてペイバックすることが可能なんだよ。正しくは、日本円ではなく電子マネーだが、今はあれで払えないものはないからな。同じことだ」

「……しかし、そんな事をしてビジネスが成り立つのかい？　運営業者だってボランティアじゃないんだろう？」

「勿論、全てのプレイヤーが稼げるわけじゃない。パチスロや競馬と一緒さ。月の接続料が、確か三千円だ。これはＶＲＭＭＯとしてはかなり高いほうだ。で、平均的にプレイヤーが一ヶ月で還元できる金額は、せいぜいその十分の一……数百円という所らしい。だが、ギャンブル性が高いとでも言うのかな……、ごくまれに、ドカンとでかいレアアイテムをゲットする奴が出る。それをゲーム内のオークションで処分して、売り上げを電子マネーに両替すれば、数万、数十万円というカネになる。そんな話を聞けば、俺もいつかは……、という気にもなるだろ。ゲーム内に巨大カジノまであるってんだからな」

「ふうむ、なるほどねえ……」

「で、プロってのはそのＧＧＯで毎月コンスタントに稼ぐ連中さ。トッププレイヤーで、月に二十万から三十万ってとこらしいから、現実世界の基準で見れば大したことはないんだろうが……まあ、をしなければじゅうぶん暮らせるよな。つまりそいつらは、ボリュームゾーンのプレイヤーが払う接続料から収入を得ているということになる。さっき俺が、ＧＧＯのトッププレイヤーは他のゲーム以上にまれる、って言ったのはそういう意味だ。国民の血税で馬鹿高いケーキを食う公務員みたいなもんだ」

「ふふふ、相変わらずキリト君は言う事がキビシイね。君のそういうところが好きさ」

　菊岡のトボけた台詞には取り合わず、俺は話を打ち切ろうとした。

「――そういった理由で、ＧＧＯのハイレベル連中は他のＭＭＯプレイヤーなんか比較にならないほどの時間と情熱をゲームにつぎ込んでいるのさ。何の知識もない俺なんぞがのこのこ出ていっても相手になるものか。だいたい、あれは名前通り銃メインのゲームだからな……苦手なんだよ、飛び道具。悪いが他を当たってくれ」

「待った待った、アテなんて無いってば。僕にとっては、君がほとんど唯一、現実で連絡の取れるＶＲＭＭＯプレイヤーなんだから。それに……プロの相手は荷が重いというなら、君も仕事ということにすればいいじゃないか」

「……はあ？」

「調査協力費という名目で報酬を支払おう。その……ＧＧＯトッププレイヤーが月に稼ぐという額と同じだけ出そうじゃないか。――これだけ」

　指三本立てる菊岡の仕草に――

　正直、ぐらっときた。それだけあれば、最新の24コア級ＣＰＵでニューマシンを組んでお釣りが来る。しかし、同時に改めての疑問も湧き起こる。

「……引っかかるな、菊岡サン。なんでこの件にそこまでるんだ？　これはまず間違いなく後付けの噂というか、ネットにありがちなオカルト話だと思うぞ。心臓を起した二人が、ゲームに姿を見せないから、そんな伝説めいた話がでっち上げられたんだ」

　ストレートにねると、菊岡は細い指で眼鏡を直しながら、俺から表情を隠した。どこまで真実を話し、どこまでをすか思案しているに違いない。まったく食えない男だ。

「――実はね、上のほうが気にしてるんだよね」

　話し始めた高級官僚は、いつもどおりの笑顔に戻っていた。

「フルダイブ技術が現実に及ぼす影響というのは、いまや各分野でもっとも注目されるところだ。社会的、文化的影響はもちろんだが、生物的なソレも大いに議論されている。仮想世界が、はたして人間の有り方をどのように変えてくのか、とね。もし仮に、なんらかの危険がある、という結論が出れば、再び法規制をかけようと動きが出てくるだろう。実は、ＳＡＯ事件当時にも法案が提出される直前まで行ったんだよ。だが僕は――というか仮想課は、ここで流れを後退させるべきではないと考えている。ＶＲＭＭＯゲームを楽しむ、君たち新時代の若者のためにもね。そんなわけで、この一件が妙な場所に着陸して、規制推進派に利用される前に事実を把握したいのさ。単なるデマであればそれが一番いい。その確信が欲しいんだ。――こんなところで、どうかね」

「……ＶＲゲーム世代の若者に理解のある、アンタの理念は善意に解釈しておこう。だがそこまで本気で気にしているなら、直接運営企業に当たったらどうなんだ？　ログを解析すれば、《ゼクシード》と《たらこ》を銃撃したプレイヤーが誰か判明するはずだ。たとえゲーム内の登録データがでたらめでも、ＩＰアドレスからプロバイダに問い合わせれば、本名と住所は判るだろう」

「――いくら僕の腕が長くても、太平洋の向こうまでは届かないんだよね」

　菊岡の渋い顔は、今度こそは偽りのないもどかしさをませているようだった。

「ガンゲイル・オンラインを開発・運営している《ザスカー》なる企業……なのかどうかすらも不明の団体は、アメリカにサーバーを置いているんだ。ゲーム内でのプレイヤーサポートはかなりしっかりしてるらしいわりに、現実の会社の所在地はおろか、電話番号やメールアドレスすら未公開。まったく、例の《ザ・シード》公開以来、怪しげなあＶＲワールドはのように増える一方だよ」

「……へえ、そうなのか」

　俺は、肩をすくめるにめた。ＶＲＭＭＯ開発支援パッケージ《ザ・シード》の由来を知っているのは俺とエギルだけだ。同様に、新生アルヴヘイム・オンラインに突如出現した浮遊城アインクラッドは、世間一般には、今は無きレクトプログレスが管理していた旧ＳＡＯサーバー内部に残されていた、ということになっている。

「とまあそんな理由で、真実のシッポを摑もうと思ったら、ゲーム内で直接の接触を試みるしかないわけなんだよ。もちろん万が一のことを考えて、最大限の安全措置はとる。キリト君には、こちらが用意する部屋からダイブしてもらって、モニターしているアミュスフィアの出力に何らかの異常があった場合はすぐに切断する。銃撃されろとは言わない、君の眼から見た印象で判断してくれればそれでいい。――行ってくれるね？」

　気付いたときには、嫌だとは言えない状況に首までまり込んでいた。

　本当に、来るんじゃなかった……としみじみと後悔しながら、俺は同時にわずかな興味も覚えはじめていた。

　仮想世界内から現実世界に干渉する能力……、もしそんなものが実在するのなら、それは、が目指そうとした世界変容のなのだろうか？　三年前の冬に始まったあの事件は、まだ終わっていないのか……？

　もしそうだとすれば、その流れ行く先を見届ける義務が、俺にはあるのかもしれない。

　ぎゅっと両眼をつぶり、深く息を吐いてから、俺は言った。

「……分かったよ。まんまと乗せられるのはシャクだが、行くだけは行ってやる。でも、うまくその《死銃》と出くわすかどうかは判らないぞ。そもそも、実在さえ疑わしいんだからな」

「ああ……それだけどね」

　菊岡は、邪気のない顔でにっこり笑った。

「言わなかったっけ？　最初の銃撃事件の時、居合わせたプレイヤーが音声ログを取ってたって。データを圧縮して持ってきている。《死銃》氏の声だよ。どうぞ、聴いてくれたまえ」

　ワイヤレス型イヤホンをこちらに差す出す菊岡を、俺は今度こそ本気でアンタの心臓も止まりやがれ、と思いながらんだ。

「……わざわざ、どーも」

　受け取ったイヤホンを耳に突っ込むと、菊岡が画面を指でつつく。たちまち、頭のなかに低いが再生される。

　と、いきなりざわめきが消失。張り詰めた沈黙を、鋭い宣言が切り裂いた。

『これが本当の力、本当の強さだ！　愚か者どもよ、この名を恐怖とともに刻め！』

『俺と、この銃の名は《死銃》…………《デス・ガン》だ！』

　どこか非人間的な、金属質の響きを帯びた声だった。

　それでいて、その叫びの向こうにいる生身のプレイヤーの存在を、俺は強く感じていた。声の主は、ロールプレイではなく、を欲する本物の衝動を放射しているように思えた。

　　　２

　千代田線大手町駅のＣ10番口から地上に出る。左手首の時計を。

　約束の午後三時まではまだ五分以上ある。は手を下ろそうとして、ふと文字盤に小さく切られたカレンダーの窓に眼を留めた。

　二〇二五年十二月七日、日曜日。

　特に何の記念日でもない。しかし明日奈の胸には、ある種の感慨めいたものがかに広がった。顔を上げ、通りを皇居のに向けて歩き始めながら、声に出さずにく。

　――もうすぐ、一年経つんだ……。

　その言葉の前には、『この世界に戻ってきてから』というフレーズが省略されている。

　アスナがからを経て現実世界へと解放されたのは、今年の一月中旬のことだ。仮想世界での記憶は徐々に思い出へと変わりつつあるが、それでもたまに、自分がこうして現実を生きていることが不思議に感じられる。

　広い歩道に整然と敷き詰められた石材。冷たい風に揺れる街路樹の。コートの襟やマフラーに顔をめて行き交う人々。そして、その流れのなかをゆっくり歩く明日奈自身。

　それらすべては、デジタルコードにとって記述される３Ｄオブジェクトではなく、本物の鉱物であり植物であり生物なのだ。

　だが、《本物》であるとはどういうことだろう？　原子や分子の集合、という意味ならばそれは仮想のポリゴンだって同じた。あれらの実存は、サーバーマシン内のメモリ素子にまる電子なのだから。素粒子の種類が違うにすぎない。

　ならば、可逆性の問題だろうか。現実世界に存在するものは、生物非生物を問わず、いちど破壊されれば決して元に戻せない。でも仮想世界のオブジェクトなら、構成する情報の一バイトに至るまで完全に同じものをく再生できる。

　…………いや。

　そうとは限らない。あの世界――アインクラッドには、取り返しのつかない喪失というものが確かに存在した。浮遊城での二年間に明日奈が触れ、感じ、得て、そして失った全てはれもなく《本物》だった。

　であるならば。

「……現実世界と、仮想世界の違い……って何なのかな……」

　無意識のうちに呟いた、その問いに――。

「情報量のだけさ」

　と、すぐ隣から答えが返って、明日奈は軽く跳び上がった。

「わ、わっ!?」

　慌てて視線を向けると、そこにはぱちくりと瞬きする少年の顔があった。

　少し長めの前髪。線の細い、それでどこか鋭さを感じさせる。黒無地のカットソーに黒いレザーブルゾンを重ね、色落ちしたブラックジーンズをいている。

　その姿は、かつて彼が用いていたアバターにあまりにも近似していて、背中に長剣のがないことはむしろ不自然なほどだった。明日奈は胸の奥深くに込み上げてくる甘く切ない痛みを深い呼吸に溶かし、唇をほころばせて言った。

「……びっくりしたよー。いきなり現れるんだもん、転移結晶でも使った？」

　すると少年――も、大きな苦笑を浮かべた。

「いきなりってことはないだろ。待ち合わせの場所と時間ジャストじゃないか」

「え……」

　言われて、改めて周囲を見回す。

　午後の柔らかい日差しを浴びる歩道と、きらきら揺れるおの水面。少し先に架かる橋は、厳重に警備された大きな門へとがっている。確かに、和人に指定された皇居の大手門前だ。考え事をしながら歩いているうちに、いつの間にか目的地に到着していたらしい。

　みを照れ笑いへと変え、明日奈は小さく肩をすくめた。

「あはは、わたしもオートパイロット状態だったみたい。えっと……、とりあえず、こんにちは、キリトくん」

「危ないなあ、にはナビ機能とかないんだからな。……おっす、アスナ」

　挨拶を交わしたところで、和人は不意に黒い瞳を細め、じっとアスナを見つめた。

「な……何よ、どうしたの急に」

　何かヘンだったかなと思い、両腕を体の前で重ねながらねる。すると和人は慌てたように首を振り、しばしった。

「あ、いや、その……。ええと……その服、に、似合ってるっていうかその、思い出すなーって……」

「え…………？」

　思わず自分の格好を見下ろし、二秒ほどして明日奈は和人の言わんとすることを理解した。

　今日は、この冬初めてコートを着てきている。白のツイード。その下にアイボリーのニットと、赤いアーガイル・チェックのスカート。

　つまり、全体の色彩が、今は無きギルド《血盟騎士団》カラーなのだ。思い返せばアインクラッドでは、ほとんど毎日白と赤の騎士装に身を固めていた。和人はその記憶を呼び覚ましているのだろう。

　そっと左腰のあたりに指先を触れさせ、明日奈は改めて微笑んだ。

「……そうだね。はないけど……。――そういうキリトくんも、今日はすいぶん黒いね」

　言うと、和人も照れたように笑う。

「二刀はないけどな。……いやあ、いつもはなんとなく上下黒は回避してるんだけど、今朝スグのやつが俺の服まとめて洗濯してさー、これしかなかったんだ」

「洗い物めるからそういうことになるんだよー」

　ほんの少しだけ高い位置にある和人の眼をき込んでそう言うと、軽い払いとともにの無い答えが返った。

「いやあ、一年間もこうやって会ってれば、いつかそういう時も来ると思うなあ」

「もう、そこは『そうだね』って言っとけばいいの！」

　小さく唇をらせてから、明日奈はレザーブルゾンの腕を引いた。

「ほら、いつまでも立ち話してないで歩こ。もうすぐ暗くなっちゃうよ」

「お、おう」

　頷く和人にぴったり寄り添って、お濠に架かる橋を渡り始める。

　古式ゆかしい白壁の大手門は、早くも朱色が混じり始めた西日に照らされ、黒々とした影を橋に投げ掛けている。日曜だが、季節のせいか観光客の姿はほとんどない。

　分厚いコートを着込んだ警察官の横を通過し、門をくぐって、小さなでプラスチックの入場票を受け取る。銀色のを抜けた向こうには、ここが東京都心の更に中央だということが信じられないほどの、な木立が広がっている。

　日曜にどこかへ行こうと誘ってのは明日奈だが、待ち合わせ場所を《大手門前》と指定したのは和人だった。

　皇居そのものはもちろん非公開だが、おの内側でも《》と呼ばれる北東の一角だけは、曜日を選んで一般公開されている――ということすら、明日奈は今日まで知らなかった。もちろん、実際に足を踏み入れるのはこれが始めただ。広くな遊歩道を歩いているうちに改めて不思議に感じられて、右隣に立つ少年にねる。

「……そういえば、なんでデートの場所を皇居にしたの？　キリトくんって歴史好きなんだっけ？」

「や、そういうわけじゃないよ。主な理由としては……ちょっと前まで、ヤボ用で近くに呼び出されてたからなんだけどさ……」

　和人は一瞬、何かを思い出すような表情でふんと鼻を鳴らしてから、すぐにいつもの穏やかな笑顔に戻って言った。

「そっちはあとで説明するけど、それはそれとして、皇居ってちょっと面白い場所だと思わないか？」

「……面白い？　どのへんが？」

　きょとんと瞬きすると、ブルゾンの右腕が動き、周囲のとしたを示す。

「南北に約二キロ、東西に一・五キロ。北の丸公園やを合わせると面積は二百三十万平方メートル、千代田区の実に二十パーセントを占める。バチカンやバッキンガム宮殿と比べても圧倒的にデカい。ベルサイユ宮殿には負けるけどな……。平面だけじゃないぜ、下には地下鉄やトンネルが一本も通ってないし、上はどんな航空機も飛行禁止。つまりこの場所は、東京のど真ん中を垂直に貫く、巨大な侵入不可エリアってわけだ」

　そう言われ、明日奈は脳裏に東京の地図を思い描いてみた。左手の指先を宙にくるくると回しながら、なるほどと頷く。

「そう言えば、都心の幹線道路ってたいてい、環状何号線とか放射何号線って言うもんね。その中心って、ぜんぶこの場所なんだよね……」

「そうそう、つまり東京は京都みたいな型じゃなくて、同心円状の放射型都市なのさ。しかもその中心は、物理的にだけじゃなく、情報的にもに遮断されてる。いわば、旧ＡＬＯの《世界樹》みたいなもんだ……っと、悪い。嫌なこと思い出させたか」

「ううん、大丈夫」

　かつて、その旧世界樹の上に長いこと幽閉された経験を持つアスナは、和人の気遣いにすぐ首を振ってから再度訊ねた。

「物理的に侵入禁止なのは解るけど……情報的に、ってどういうこと？」

「ああ、それは……」

　和人は不意に、周囲の木立に素早く視線を走らせてから、小さな動きで幾つかの場所を指差した。

「ほら、あそこや、あそこにも監視カメラがあるだろ？　あのセキュリティシステムは、いまどき完全にスタンドアローンなんだってさ。ここには独自のクローズドネットが構築されてて、外部からは一切接続できないんだ」

「へえ……。そういえば、なんか不思議な形のカメラだね」

　和人の指の延長線上には、上端に黒い球体が固定されたポールがひっそりと立っている。言わなければカメラではなく照明灯としか思わなかっただろう。

「次世代のセキュリティ技術の実験中、なんて噂も聞いたけどな……。――ともかく、この場所は、東京の中心であると同時に隔離された《異界》でもある……なんて、大げさな言い方かもだけどさ」

「あはは、ちょっとね」

　そんな会話を交わす間に、遊歩道は巨大な石垣を回り込み、急な上り坂へと変わった。しばし無言で足を動かすと、視界が一気に開けた。

　向こう側がむほどの、広大なだ。真冬ゆえに薄茶色に枯れ、周囲の木立もほとんど葉を落としているが、春に来ればさぞ気持ちいい眺めだろう。

「ここが江戸城の本丸跡。よく歴史ドラマの舞台になる大奥は、芝生のちょっと北側だったらしいよ」

「行ってみよー」

　和人の手を握り直し、明日奈は足を速めた。人影は相変わらず少ないが、そのほとんどが外国からの観光客のようだった。途中で、らしい金髪の姉妹を連れた夫婦とすれ違い、カメラのシャッター押しを頼まれる。和人が気さくに応じると、奥さんのほうが笑顔で『あなたたちも撮ってあげるわ』と言うので、照れつつも並んで一枚スナップしてもらう。

　画像データを携帯端末で受け取り、幼い姉妹と手を振り合って別れた。オレンジ色の光の中を遠ざかる家族連れを見送るうち、明日奈は我知らずほうっと息をついていた。

「……疲れた？」

　と和人が訊くので、つい軽くんでしまう。

「ちーがーいーまーす！　わたしたちも、将来あんな…………って、ええと……もう！」

　思わず口走った台詞を頬が熱くなり、小走りに駆け出した。

「お、おい、待てよ」

　追ってくる和人と短い競走をすると、すぐに芝生を南北に分ける小道へと達した。分岐路近くにベンチを見つけ、すとんと腰を下ろす。

　それでもなおプイと顔を横にけていると、隣に座った和人がおずおずと言った。

「うん、まあ、その……妹ができたら、きっとユイも喜ぶよな、うん」

　そのあまりにも直球な物言いに、再び顔に血が上りつつもアスナは小さく吹き出してしまった。

「そ、そうだね」

「なんだよ、ここで笑うとかそっちもヒドイよ……」

「あはは、ごめんごめん。でもほんと、ユイちゃんとも、こっち側で一緒に過ごせればいいのにね……」

　ユイというのは、旧ＳＡＯサーバーで二人が出会った少女の名前だ。その実体はプレイヤーのメンタルケア用自律プログラム、つまりＡＩであり、明日奈のことを母親、和人を父親と認識している。アインクラッド崩壊に際しても、和人のナーヴギアにコアプログラムを退避させることで消滅をれ、現在は和人の自室に用意された、彼女専用の据え置き型マシン内で《生活》している。

　だが、ユイと直接触れ合えるのは、基本的にフルダイブ環境下――つまりＡＬＯの内部だけだ。現実世界でも携帯端末を使えば彼女と通信はできるが、主にバッテリー容量の問題で《いつも一緒》というわけにはいかない。

　そう、いかにアスナが娘としてユイを愛し、ユイがアスナを母親として慕っても、二人の間には常に仮想世界と現実世界を隔てる壁が存在するのだ……。

　と、不意に、和人の左手をそっと握った。

「大丈夫、いつか一緒に暮らせるようになるさ。フルダイブ技術がもっと進化して、環境が常用できるようになれば、きっと」

「うん……。そう……そうよね」

「ああ。現実と仮想の境界は、今後どんどん曖昧になっていくはずだ。今はまだ、情報量の差が壁を作ってるけど……」

　和人の言葉に、深く頷くとともに手をしっかり握り返してから、明日奈はふと顔を上げた。

「そういえば、キリト君さっきもそんなこと言ってたね。仮想世界と現実世界の違いは、情報量のでしかない、って。それってどういうこと？」

「うーんと……」

　一瞬視線をわせてから、和人はベンチの上で重なる二人の手に眼を落した。

「たとえば、ＡＬＯの中で同じように手を握るのと、現実でこうするのとでは、やっぱり違いはあるだろ？」

　言われて、明日奈は左手に意識を集中した。

　触れ合うの弾力。冬の冷気を遠ざける温度。そこまでは、ＡＬＯの妖精アバター同士でも感じることはできる。しかし、皮膚が吸い付くような密着感やの摩擦感、そして二人の血流が同期して作り出すかすかな脈動までは、いかに最先端のフルダイブ技術でも再現できない。

「うん……そうね。本物の手のほうが、いろいろ感じられる……そっか、これが《情報量が多い》ってことね？」

「そう。でも、今後アミュスフィアがどんどん進化して、皮膚感覚やも再現できるようになったらどうだろ？　感触だけで、本物の手とアバターの手を判別出来るかな？」

「できるよ」

　というアスナの即答が予想外だったようで、和人はぱちくりと瞬きした。その顔をじっと見つめながら補足する。

「キリト君の手なら、ね。他の人のは、たぶんムリ」

　その途端、和人の手の温度がわずかに上昇し、鼓動も早まる。してやったり、笑みを作ってから、言葉を繫げる。

「手触りだけじゃなくて、見た目とか、音とか、味やいも今はまだ現実世界のほうが情報量が多いよね。だから……仮に、今のアミュスフィアでＡＲ機能が実装されても……」

「ああ。見たり触ったりした瞬間に、それが本物なのかそうでないのか判ってしまう」

　ＡＲ機能、とはつまり、アミュスフィアを状態で使用することで、現実の視覚や聴覚にデジタル情報を重ね合わせようということだ。それが可能になれば、現行の据え置きＰＣや携帯端末はまったく不要となる。視界に仮想デスクトップを表示してブラウジングしたりメールを打ったり、あるいは道路ナビゲーションしたり人や物の情報タグを表示したりと、用途は無限に考えられる。

　現在、レクトを始めとする大手情報機器メーカーが盛んに研究しているものの、体の動きによって電子パルスのフォーカスがずれたり、大容量バッテリを外付けする必要があったりと問題が多く、実用化のめどは立っていないらしい。

「……残念だけど、現行のヘッドギア型じゃあ、常用ＡＲは実現できないって意見もある。でも、いつか技術のブレイクスルーがあって、俺たちが現実世界でいつでも大容量の五感データを受け取れるようになれば……あるいは、ベッドと電源タップなしに、いつでも即座にフルダイブできるようになれば」

　和人の呟きに頷き返し、明日奈はその続きを口にした。

「私たちは、世界の壁を越えて、いつもユイちゃんと一緒にいられる。……そんな日が、きっと来るよね」

「ああ、きっと」

　二人の言葉は、図らずも、かつてアインクラッド第二十二層でいっとき別れたユイのことを思って交わした会話とほとんど同じだった。そう気づいた明日奈は、心に温かいものが広がるのを感じ、頭をそっと隣に座る和人の右肩に預けた。

　あの再会の誓いは、数ヶ月後に果された。

　だから絶対に、いまの言葉も現実となるだろう。

　当時も間近い夕日は、まるで落ちるようなスピードで西の木立へと隠れつつある、真っ赤に染まった空を、ねぐらに戻る鳥たちが群れながら舞う。

　数百年前、目の前の広大な芝生上に存在したという城で暮らした人々も、同じ夕焼けを見上げたのだろうか。そして数百年後、時間の流れから隔離されたこの異界で、同じように誰かが赤い空を眺めるのだろうか……。

「…………ああ……」

　明日奈は、不意に胸を締め付けられるような郷愁を感じて、小さく声を漏らした。隣で和人がちらりと視線を向けてくる。眼を合わせ、そっと微笑む。

「なんとなく、解ったよ。君がわたしをここに連れてきてくれた理由」

「え……、そ、そう？」

「うん。――世界が、《時間》という軸と《空間》という面で構成されているなら、東京……つまりわたしたちの現実世界における中心は、間違いなくこの場所。そして……いま《ザ・シード》によってどこまでも広がりつつある仮想世界の中心軸は、もう存在しない、あの《城》なんだね。だから夕焼けの色が、こんなにも懐かしいんだ……」

　アスナの言葉に、和人は二、三度瞬きしてから、大きく唇をほころばせた。

「そうか……そうだな。本当は俺も、そこまで具体的に考えてたわけじゃなかった。でも……今のアスナの言葉で、ひとつ解ったことがあるよ」

「え、なあに？」

「アインクラッドのかたちさ。あの積層構造はもしかしたら、《時間軸と空間面》を象徴してたのかもしれないな」

　明日奈はしばし考え込み、やがてゆっくりと頷いた。

「そうね……。そうなのかもしれないね。でも、だとしたら、団長が創造しようとした世界は、先細りになっていずれ収束、消滅する予定だったってことになるわ。それを、どこかの誰かさんが途中で大爆発させちゃったわけね」

「わ、悪かったよ……副団長どの」

　二人は同時に、声を出さずに笑い合った。数秒後、和人は大きく息を吸い込み、明日奈の手を握ったままベンチから立ち上がった。

「さて、そろそろ帰ろうぜ。ここ、五時で閉まっちゃうんだ」

「うん。今度、リズやリーファちゃんたちも連れてまた来よ。あの芝生でお弁当食べたら楽しいよ、きっと」

「そうだな。春になったら、な」

　手を借りて立つと、明日奈は最後にもう一度、四方に広がる夕空を仰ぎ見た。

　家に帰りたい、と思った。世田谷区宮坂にある、現実の結城家ではない。旧アインクラッド二十二層にほんのいっとき存在した、二人の《森の家》だ。

　あの小さなログハウスは、浮遊城の崩壊とともに消滅してしまったけれど――いま明日奈には、胸に温めたひとつの計画がある。それが実現するまでは、アルヴヘイム世界樹上の《イグドラシル・シティ》に借りた部屋が、アスナとキリト、そしてユイの家ということになる。

　北側の平川門出口に向かって歩きながら、明日奈は和人に訊ねた。

「ね、今夜はログインできる？　ユイちゃんに、今日の話をしてあげたいから」

「ああ、いいよ。二十二時ごろでいいかな」

　と笑顔で頷いてから、和人は突然難しい表情になった。

「あれ、何か用事あったの？」

「いや、そうじゃないんだ。今夜は大丈夫なんだけど……その、アスナ、俺……」

　珍しく言いよどんだ和人は、数秒間あーうーとってから、いきなり明日奈の心胆を寒からしむる台詞を発した。

「……俺、近いうち、ＡＬＯの《キリト》を他のゲームにコンバートさせるかも……」

「……え、えええ!?」

　アスナの叫び声に驚いたか、近くのから鳥が数羽飛び立った。

*［＃挿絵img0508.png］*

　　　３

　。

　低く垂れ込める雲を、傾き始めた太陽が薄い黄色に染めている。

　岩と砂ばかりの荒野に点在する、旧時代の遺物である高層建築のが描く影は徐々に長くなっていく。あと一時間も待機が続くようなら、夜間戦闘装備への切り替えを考えなければならない。

　暗視ゴーグルを用いた戦闘は、殺し殺されることの緊張感をぐため、シノンの好むところではなかった。陽光が消える前に、早く標的のパーティーが現れないものか、とコンクリートの陰にうずくまりながら嘆息する。もっとも、シノンと一緒になを続ける五人の仲間も、まったく同じことを考えているに違いないのだが。

　と、全員の内心を代弁するかのように、パーティーメンバーの一人、小口径の短機関銃を腰に下げたの男が小声でぼやいた。

「ったく、いつまで待たせんだよ……。おいダインよう、ほんとに来るのかあ？　ガセネタなんじゃねえのかよ？」

　ダインと呼ばれた、ごつごつと大柄なとな顔を持つこののリーダーは、肩から下げた大ぶりのアサルトライフルを鳴らしながら首を振った。

「奴らはこの三週間、ほとんど毎日のように同じ時間、同じルートで狩りに出てるんだ。俺が自分でチェックしたんだぞ。確かに今日はちょっと帰りが遅いけど、どうせの湧きがよくて粘ってるんだろ。そのぶん分け前が増えるんだ、文句言うなよ」

「でもよぉ」

　前衛の男は、なおも不満そうに口をらせる。

「今日の獲物は、確か先週襲ったのと同じ連中なんだろ？　警戒してルートを変えたってことも……」

「前に待ち伏せてからもう六日も経ってんだぜ。それからも、あいつらはずっと同じ狩場に通ってるんだ。奴らはＭｏｂ狩り特化スコードロンだからな……」

　ダインの口元に、るような笑みが浮かんだ。

「何度襲われて、けを根こそぎにされても、それ以上に狩りで稼げればいいと思ってるのさ。俺たちみたいな対人スコードロンには絶好のカモだ。あと二、三回はこの手でいけるさ」

「でもなあ、信じられねえなあ。普通、一度やられれば何か対策するだろう」

「翌日くらいは警戒したかもしれないが、すぐ忘れたんだろうさ。フィールドＭｏｂのアルゴリズムは毎日一緒だからな。そんな狩りばっかしてるとそいつらもＭｏｂみたいになっちまうのさ。プライドの無え連中だ」

　だんだん聞いているのが不愉快になり、シノンは一層深くマフラーに顔をめた。感情の起伏は、トリガーを引く指を鈍らせる。そう分かっていても、しらに語るダインへのちが心の中に湧き起こる。

　ルーティーンなＭｏｂ狩りに特化したパーティーをい、自らをと誇るわりには、そのパーティーを何度も待ち伏せて襲うことにプライドは傷つかないらしい。こんなニュートラル・フィールドで何時間も費やすくらいなら、地下の遺跡ダンジョンに潜ってハイレベルのスコードロンと一戦交えたほうが、実入りは格段に増す。

　無論、一敗地にれ、装備をドロップして街に《死に戻り》する可能性も高まる。しかしそれが戦闘というものだ。その緊張感の中でのみ、魂は鍛えられる。

　ダインの率いるこのスコードロンに誘われたのは二週間前だった。参加してすぐに後悔した。対人メインとうそぶいている割には、確実に戦力で優位に立てる相手だけを狙い、危機らしい危機でもないのにすぐに撤退する。安全第一な集団だったからだ。

　しかしシノンはこれまで、スコードロンの方針には一切口を出さず、黙々とダインの指示に従ってトリガーを引いてきた。別に忠誠心を売り物にしているわけではない。いつか敵としてダインと戦場でまみえたときに、蓄積したデータから思考・行動を読み、必殺の一弾をしてやるためだ。

　性格的にはまるで好きになれないが、前回のバレット・オブ・バレッツで十八位に入ったこの男のステータス値と、肩に下げたレアな《ＳＩＧ・ＳＧ５５０》アサルトライフルが吐き散らす五・五ミリ弾の威力は本物だ。だから今はひたすら口をつぐみ、眼を光らせ、ダインが無警戒に振りく情報を収集する。

　ダインのお喋りは続いている。

「……大体、Ｍｏｂ狩りのために光学銃ばっかり揃えてるあいつらが、そうすぐに対人用の実弾銃を員数ぶん用意できるわけないだろう。せいぜい、支援火器を一丁手に入れるくらいが関の山さ。そいつをすために、今日はシノンに狙撃ライフルを持ってきてもらってるんだ。作戦に死角はねえよ。なあ、シノン？」

　いきなり話を振られ、シノンはマフラーにめた顔をわずかに動かして頷いた。だが口はつぐんだままで、会話に加わる意思のないことを表す。

　ダインはつまらなそうに鼻を鳴らしたが、アタッカーのほうはシノンに向かってニッと笑いかけ、言った。

「まあ、そりゃそうか。シノンの遠距離狙撃がありゃあ優位は変わらねえや。――そういや、シノっちさぁ」

　顔にんだ笑みを浮かべたまま、それでも物の陰から出ることのないよう四つん這いで、アタッカーはシノンの隣に近寄ってきた。

「今日、このあと時間ある？　俺も狙撃スキル上げたいんで相談に乗ってほしいなーなんて。どっかでお茶でもどう？」

　シノンは男の腰に下がる武器に素早く視線を送った。実弾短機関銃、《Ｈ＆Ｋ・ＵＭＰ》が男のメインアームだ。ＡＧＩ型らしく、正面戦闘での回避力は中々なものだったが、レベル的にも装備的にも情報を記憶しておくほどの相手ではない。相手の名前を少々苦労して思い出しながら、シノンは小さく頭を下げた。

「……ごめんなさい、ギンロウさん。今日は、リアルでちょっと用事があるから……」

　現実の自分の声とは似ても似つかない、高く澄んだ可愛らしい声が流れ、シノンは内心でうんざりする。これだから喋るのは好きではない。ギンロウという男は、すげなく断られたにも関わらず、うっとりとした笑いを消そうとしない。一部の男性プレイヤーは、シノンの声を聞くだけである種の喜びを得るらしい。そう考えると、背筋に寒いものが走る。

　このＶＲＭＭＯ-ＲＰＧ《ガンゲイル・オンライン》に初めて身を投じた時は、無骨で無個性な男の姿を分身にと望んだ。すぐにこのタイトルではプレイヤー・キャラクター間の性別逆転が不可能だと知らされ、それならばできるだけ筋肉質で背の高い、兵士然とした女になりたいと思った。

　しかし、ランダム・パラメータによって生成されたのは、小柄でな、お人形めいた少女の姿で、即座にアカウントを破棄してキャラクターを作り直そうと考えたのだが、シノンをこの世界に誘った友人が『ない！』と強硬に主張したため、なし崩し的に後戻りできないところまでレベルを上げてしまった。

　お陰で、時折このように厄介な申し出を受けることがある。戦うことだけがプレイ動機のシノンにとってはただしいだけだ。

「そっかぁー、シノっちはリアルじゃ学生さんだっけ？　大学生？　レポートかなんかかな？」

「……ええ、まあ……」

　おまけに、いちど落ちるときに、学校が、と口を滑らせてしまってからは誘いがになってきた気がする。本当は高校生だなどとは、口が裂けても言えない。

　と、今までしゃがみこんでステータスウインドウを操作していた残り二人の前衛プレイヤーが、ギンロウをするかのようににじり寄ってきた。その片方、スモーク処理されたゴーグルの上に緑色の前髪を垂らした男が口を開く。

「ギンロウさん、シノンさんが困ってるでしょう。リアルの話を持ち出すもんじゃないですよ」

「そうそう。向こうでもこっちでも寂しいだからってさぁ」

　もう一方、迷彩のヘルメットを斜めに被った男がにやにや笑うと、ギンロウは二人の頭をでぐりぐりと押しながら言い返した。

「ンだよ、お前らだって何年も春が来ないくせに」

　ひゃひゃひゃと笑う三人の隣で一層体を縮めながら、シノンは不思議でならなかった。

　プレイヤー相手の戦闘を目的としてプレイするなら、待機中は精神集中なり装備点検なり幾らでも有意義な過ごし方があるし、電子マネー還元を利用して稼ぐつもりならＭｏｂハント専門のスコードロンに入った方がいい。そして出会いを求めるなら、同じ性別固定タイトルでも、こんな殺風景で殺伐とした世界でなくもっとメルヘンチックで女の子プレイヤーが多いゲームを選ぶべきだ。いったい彼らは何を求めてこの世界にやってきているのだろう。

　再びマフラーの奥に深く顔を埋めて、シノンは左手の指先でそっと、傍らに二脚を立てて設置してある大型ライフルの銃身をなぞった。

　――いつかこの銃で、あなたたちの仮想の体を吹き飛ばす時がくる。その後でも、同じように笑って私に声を掛けられる？

　胸の奥でそう呟くと、ささくれた気分がバレルの冷たさに吸い取られるように、徐々にまっていった。

「――来たぞ」

　崩れかけたコンクリート壁の穴から双眼鏡で索敵を続けていた、残る一人のパーティーメンバーがそう囁いた時には、更に二十分が経過していた。

　前衛三人とダインのお喋りがぴたりと止まり、場の空気が一気に緊張する。

　シノンはちらりと空を見上げた。黄色い雲はわずかに赤みを増しつつあるが、まだ光量は充分だ。

「ようやくお出ましかい」

　小声で唸りながら、ダインは中腰で移動すると、壁際の偵察役から双眼鏡を受け取った。同じように穴越しに覗き込み、敵の戦力の確認を始める。

「……確かにあいつらだ。七人……先週より一人増えてるな。光学系ブラスターの前衛が４人。大口径レーザーライフルが１人、それに……おっと、《ミニミ》持ちが一人。こいつは先週は光学銃だったから、慌てて実弾系に持ち替えたんだろうな。狙撃するならこいつだな。最後の一人は……マント被ってて、武装が見えないな……」

　それを聞いて、シノンは姿勢になり、自分のライフルの高倍率スコープに顔を寄せた。

　シノンたちの六人パーティーが潜伏しているのは、少し高台になった場所に建つ、前文明の遺構のなかだ。ぼろぼろのコンクリート壁や鉄骨が物となり、前方に広がる荒野を監視するには絶好の地形である。

　もう一度空を見上げ、仮想の太陽がレンズに反射してしまう位置にないことを確認してから、スコープの前後フリップアップ・カバーを上げる。

　右眼を接眼レンズに当てると、最少倍率に設定した視野を動く小さな点が見えた。指先で倍率ダイヤルを調節する。かすかなクリック音がするたびに、粒のような黒点はみるみる拡大され、やがて七人のプレイヤーへと変わった。

　ダインの言葉どおり、四人が光学系突撃銃をえており、そのうち二人が頻繁に双眼鏡を顔に当て、周囲を警戒している。しかし、向こうから潜伏中のシノンたちを発見するのは、索敵スキルをめでもしていないかぎり不可能だ。

　集団の中ほどを、大型の銃を肩に掛けた二人が歩いている。片方はセミオートの光学レーザーライフルで、もう一方は、実弾系の軽機関銃、《ＦＮ・》だ。現実世界では日本の自衛隊にも採用されている優秀な分隊支援火器である。光学銃による攻撃はダメージの半分以上を防護フィールドによってできるため、ミニミのほうが圧倒的に脅威度は高い。

　この《ガンゲイル・オンライン》に登場する武器は、実弾銃、光学銃の二つに大別される。

　実弾銃のメリットは、一発あたりのダメージが大きく、また防護フィールド貫通能力を持つこと。しかしデメリットとして重くかさばる弾倉を幾つも携行せねばならず、また弾道が風や湿度の影響を強く受ける。

　対して光学銃のメリットとしては、銃自体が軽量であり、射程が長く命中精度も高い。また弾倉に当たるエネルギーパックもコンパクトだが、《防護フィールド》なるプレイヤー用防具で威力を散らされてしまうというデメリットがある。

　よって、対モンスターには光学銃、対プレイヤーには実弾銃がセオリーとなるのだが、この二人のカテゴリーには、性能面以外にも大きな特徴がある。

　それは、光学銃がすべて架空の名称と姿を持っているのに対し、実弾銃は現実世界に本当に存在する銃器をそのまま登場させているということだ。

　よって、ダインやギンロウのような、ＧＧＯプレイヤーのうちかなりのパーセンテージを占めるガンマニアたちは好んで実弾銃を常時携行し、Ｍｏｂ狩りの時だけ光学銃に持ち替えている。

　いま、シノンが頬を付けているライフルも実弾系だ。だが、シノンはこの世界に来るまで銃器のメーカーなど一つとして知らなかった。ゲームプレイする上で必要となるのでアイテムとしての銃の名前は憶えたが、それで現実の銃に興味が出たかというとまったくそんなことはない。この世界に無限に存在する銃器のほとんど全ては単なる３Ｄオブジェクトと思っているし、現実世界の銃に至っては見るのも嫌だ。

　ただひたすら、このの世界で、仮想の敵を仮想の銃弾で破壊し続ける。心が石のように硬くなり、流れる血が凍るまで。

　そのために、シノンは今日もトリガーを引く。

　余計な思考を振り払い、シノンはライフルをわずかに動かした。敵の隊列の最後尾を、巨大なゴーグルで顔を覆い、迷彩マントをすっぽりと羽織ったプレイヤーが歩いている。ダインの言葉どおり、装備は見えない。

　かなりの巨漢だ。背中に大型のバックパックを背負っているらしく、マントが派手にらんでいる。からのぞく両手は空だ。腰にあるであろう武装は、最大でも短機関銃クラスだと思われた。

「マントで顔が見えねえって？」

　背後から、ギンロウの声がした。かすかに緊張の響きを帯びた口調で続ける。

「アレじゃねえのか？　ウワサの……《デス・ガン》」

「ハッ、まさか。実在するものか」

　すぐにダインが笑い飛ばす。

「それに、死銃ってのはギリースーツの小男なんだろ？　あいつはかなりでかいぞ。二メートルはありそうだ。多分……極ＳＴＲ型の運び屋だな。稼いだアイテムやら、弾薬やエネルギーパックを背負ってるんだ。武装は大したことないだろ、戦闘では無視していい」

　その言葉を聞きながら、シノンはじっとスコープの中の男を見つめた。

　ごつい装甲ゴーグルのせいで表情は見えない。露出しているのは口元だけだ。その唇は固く引き結ばれ、微動だにしない。他のメンバーは、警戒しながらも雑談中と見えて時折白く歯が光るが、最後尾の大男だけは完全に無言を貫いている。黙々と歩くその足取りには、一切の乱れがない。

　半年のＧＧＯプレイ経験でったシノンのは、ミニミ持ちよりも、この男のほうにより強い脅威を告げていた。しかし、背中のバックパック以外は、マントに目立つ膨らみはない。小型でハイパワーのレア銃を隠し持っているのだろうか。だがそのの銃は光学系にしか存在せず、対人戦闘では決定力とはなり得ないはずだ。ならばこの男に感じるプレッシャーは気のせいなのだろうか……。

　迷った末、シノンは小声で言った。

「あの男、嫌な感じがする。最初に狙撃するのはマントの男にしたい」

　ダインは双眼鏡を顔から離すと、眉を上げてシノンを見た。

「だ？　大した武装もないのに」

「……根拠はないけど。不確定要素だから気に入らないだけ」

「それを言うなら、あのミニミは明らかに不安要素だろう。あれに手間取ってる間にブラスターに接近されたら厄介だぞ」

　光学銃に防護フィールドが有効、と言っても、その効果はの距離が縮まるにつれ減少する。至近での撃ちあいになれば、マガジン一つあたりの弾数が多いレーザーブラスターに圧倒される可能性がある。シノンはやむなく主張を引っ込め、頷いた。

「……わかった。第一目標はミニミにする。可能だったら次弾でマントの男を狙う」

　そうは言ったものの、狙撃な有効なのは、敵に射手が発見されない状態での初弾に限る。発射点を認識されてからの狙撃は、敵に《》を与えてしまうため容易に回避されるからだ。

「おい、喋ってる時間はそろそろないぞ。距離二千五百だ」

　索敵担当の男が、ダインから取り返した双眼鏡を覗いて言った。ダインは頷き、背後のアタッカー三人に振り向いた。

「よし。俺たちは作戦どおり。正面のビルの陰まで進んで敵を待つ。――シノン、動き始めたら俺たちには奴らが見えなくなるかな、状況に変化があったら知らせろ。狙撃タイミングは指示する」

「了解」

　短く答え、シノンは再びライフルのスコープに右眼を当てた。標的パーティーに変化はない。相変わらず、やや遅いペースで荒野を移動している。

　彼らとシノンたちの間には二・五キロメートルの荒野が広がっており、その中央少しこちら寄りに、ひときわ巨大なビルディングの遺構がそびえていた。ダインら五人は、それを利用して標的の死角に入り、一気に強襲する作戦である。

「――よし、行くぞ」

　短いダインの声に、シノンを除くメンバーが短く答えた。ブーツが砂利混じりの砂を踏む音を残して、高台の後方から滑り降りていく。夕暮れの風鳴りが彼らの足音をかき消すまで待って、シノンは首元のマフラーの下から小さなヘッドセットを取り出し、左耳に装着した。

　ここからの数分間、シノンはスナイパーとして、プレッシャーと孤独な戦いを続けなければならない。自分の放つ一発の銃弾で、その後の戦闘のが大きく動くのだ。頼るのは自分の指と、物言わぬ銃だけだ。左手を、二脚に支えられた巨大な銃身に滑らせる。黒い金属は、冷たい沈黙をシノンに帰す。

　シノンを、この世界では珍しいとしてそれなりに有名プレイヤー足らしめているのは、何よりもまずこの実弾銃の存在ゆえだった。

　名を、《ＰＧＭ・ウルティマラティオ・ヘカートⅡ》と言う。全長百三十八センチ、重量十三・八キロという図体を持ち、五十口径、つまり直径十二・七ミリもの巨大な弾丸を使用する。

　現実世界では、、というカテゴリーに属すると聞いた。つまり、車両や建築物を貫くことを目的とする銃だ。そのあまりの威力から、何とかいう長い名前の条約で、対人狙撃に使用するのは禁止されているらしい。しかしもちろん、この世界にそんな法律はない。

　手に入れたのは三ヶ月前、ＧＧＯプレイヤーとしてそれなりにベテランの域に達した頃だった。

　気まぐれで、首都ＳＢＣグロッケンの地下に広がる巨大な遺跡ダンジョンにソロで潜っていたシノンは、不注意からシュート・トラップに落ちてしまったのだ。

　ガンゲイル・オンラインは、遥か過去の大戦で文明の滅びた地球に、移民宇宙船団に乗って帰ってきた人々が暮らすという設定の世界を舞台にしている。グロッケンの街はもとの宇宙船であり、その地下に、大戦で崩壊したかつての巨大都市が眠っているのだ。都市の遺跡には、無数の自動戦闘機械やら、遺伝子改造されたクリーチャーがき、一獲千金を夢見て潜り込む冒険者たちを待ち受けている。シノンが落っこちたのは、そんな最高レベルの危険度を持つダンジョンの奥底だったのだ。

　当然、ソロでどうにかなる場所とは思えなかった。きっと最初のエンカウントであっさり敗北し、街のセーブポイントに《死に戻り》するだろうと覚悟しつつ歩いていたシノンの前に、広大なスタジアムめいた円形の空間と、そこにうずくまるのクリーチャーが現れた。

　サイズと名前から、ボスクラスのモンスターだと思われたが、いまだかつてどの情報サイトでも見たことのない姿だった。どうせ死ぬならこいつと戦ってやろう、そう思ったシノンはスタジアム上部の排気口に身を潜め、ライフルを構えた。

　戦闘は意外な展開となった。ボスモンスターは、熱線、、有毒ガス他という他種の攻撃パターンを持っていたが、そのどれもが、シノンの伏せている場所までわずかに届かなかったのだ。とはいえ、シノンのライフルも有効射程ぎりぎりで、与えるダメージは微々たるものだった。携行していた弾薬数から考えて、ほぼ一発のミスもなく、全ての弾をボスの弱点らしきの小さな眼に命中させなければ撃破は不可能と思われた。

　シノンは氷のような冷静さと集中力で、それをやり遂げた。ついにボスが倒れ、ポリゴンのを爆散させた時には、戦闘開始から三時間が経過していた。

　そのボスモンスターがドロップしたのは、見たこともない巨大なライフルだった。設定として、ＮＰＣやプレイヤーの工房では強力な実弾銃を製造することができず、街で売られているのは一部の低威力品だけであり、中級品以上を欲するなら遺跡から発掘するしかない。シノンが手に入れたライフル――《ウルティマラティオ・ヘカートⅡ》は、そんな発掘武器の中でも最もレアリティの高い一群に属するものだった。

　現在、アンチマテリアル・ライフルというを持つ銃は、シノンのヘカートⅡを含めてサーバーにわずか十丁ほどしか存在しないと言われている。当然、取引価格も恐ろしい高額で、前回オークションに出た銃にはゲーム内通貨で二十クレジット、つまり二千万の値がついたそうだ。電子マネー還元システムのレートは百対一なので、両替すれば日本円で二十万円という金額が手に入ることになる。

　シノンは現実世界では高校生にして一人暮らしで、毎月ぎりぎりの仕送りを四苦八苦してやりくりしている身なので、それを知った時は正直迷った。最近ではようやく毎月の接続料金の半額、千五百円ほどを還元できるようになってきたものの、それでも小遣いの半分が消えてしまう。かと言って、これ以上ダイブする時間を増やせば、成績のキープすら怪しくなる。しかし二十万あれば、今までの接続料を取り返してなお大部分が残る。

　だが、シノンは銃を売らなかった。ＧＧＯに潜る目的は、お金を稼ぐことではなく、ただ敵――自分より強い全てのプレイヤーを倒し、己の弱さを克服するというその一点だけだったし、なにより初めて、単なるアイテムであるはずの銃に《心》を感じたからだった。

　ヘカートⅡは、その巨体と重量ゆえに恐ろしいほどの要求ＳＴＲ値が設定されていたが、スナイパーとしてＡＧＩよりもＳＴＲを上げていたシノンにはギリギリ装備することが可能だった。初めて戦場に持ち出し、敵をスコープに収めた時、シノンは手の中の重く冷たいに、力と、そして意思を感じた。殺戮を欲し、死を求める冷酷な魂。シノンがそうありたいと思う、何ものにも屈せず、揺るがず、流す涙など一滴も持たない姿がそこにあった。

　それからしばらくして、シノンは《》という名前が、ギリシャ神話に出てくる、をる女神から取られていると知った。この銃を最初で最後の相棒にしようと、その時思った。

　スコープの中では、標的のパーティーが移動を続けている。

　顔を上げ、直接荒野を見下ろすと、標的との間に崩れかけたビルをはさんで、ダインたち五人が接近していくのが見えた。二つの集団の距離は、すでに七百メートルほどに縮まっている。再び右眼をスコープに当て、ダインからの指示を待つ。

　数十秒後、ヘッドセットから雑音混じりの声がした。

『――位置に着いた』

「了解。敵はコース、速度とも変化なし。そちらとの距離四百。こちらからは千五百」

『まだ遠いな。いけるか？』

　ダインの問いに、素っ気なく「問題ない」と応じる。

『……よし。狙撃開始』

「了解」

　短いやり取りの後、シノンは口をつぐみ、右手の人差し指をそっと大きなトリガーガードに添えた。

　スコープの視野では、ミニミを肩に掛けた第一標的の男が、何事か喋りながら歩いている。

　先週の戦闘では、シノンは狙撃でなくアサルトライフルを装備してを担当したため、この男はかなりの近距離で顔を見ているはずだが、記憶になかった。しかし、支援火器を装備できるからにはかなりのレベルに達しているはずだ。

　どくん、どくん、と急に激しくなる心臓のを抑え込みながらの十字を動かす。距離と風向き、標的の移動速度を考慮して左上に一メートル以上外して固定、人差し指を動かしてトリガー本体に触れさせる。

　その途端、シノンの視野に、ライトグリーンに光る半透明の円が表示された。

　ゆら、ゆらと周期的にその直径を変化させる円は、男の胸を中心に、膝のあたりまで広がっている。シノンの視界にだけ表示される攻撃的システム・アシスト、《》だ。発射される弾丸は、この円の内側のどこかにランダムに命中する。現在の大きさでは、男の体が含まれているのは円の面積の三割程度、つまり命中率三十パーセント。更に、いくらヘカートⅡの威力を以ってしても、腕や脚の末端部に当たった場合は即死させるのは不可能なので、一撃で仕留められる確率は一層下がる。

　この着弾予測円の大きさは、標的との距離、銃の性能、天候、光量、スキル。ステータス値といった要素によって変動するが、中でも最重要なパラメータは、射手の心臓の鼓動だ。

　アミュスフィアは、現実世界に横たわる生身のプレイヤーの心拍をモニターし、データをゲームシステムに送っている。

　心臓がドクンと脈打った瞬間、サークルは最大にまで広がる。そして徐々に縮小し、次の脈でまた広がる。つまり、命中率を上げようと思ったら、狙撃は鼓動と鼓動の谷間で行わなくてはならない。

　しかし、リラックスしていれば毎分六十回――つまり一秒毎程度に落ち着いている心拍も、いざ狙撃となれば緊張によってその二倍以上にまで急上昇し、サークルは激しく拡縮を振り返してしまう。とても脈の谷間など狙えない。

　ＧＧＯに於いてスナイパーがごく少ないのは、これが最大の理由だ。

　当たらないのだ。狙撃に際して緊張するのは止めようがない。もちろん接近戦でも心拍上昇によって予測円は脈動するが、距離が近ければそれでも当たる。フルオートのサブマシンガンやアサルトライフルなら尚更だ。しかし距離千メートルを超えるロングレンジの狙撃では通常予測円は人間の身長の数倍にも広がる。現在シノンの視野に表示される、命中率三割のサイズがすでに奇跡的なのだ。

　――だが。

　シノンは心の中で呟く。

　こんなプレッシャー、こんな不安、こんな恐怖が何ほどのものだというのか。距離千五百？　そんなの、丸めた紙をに投げ込むようなものだ。そう――

　アノトキニ、クラベレバ。

　すっ、と頭の芯が冷えていく。心臓の動悸が嘘のように治まる。

　――氷。私は、冷たい氷でできた機械。

　着弾円の変動サークルが一気にスローダウン。同時に時間感覚も引き延ばされ、円が最小サイズになる瞬間がはっきりと認識できる。

　一……。二……。三回目に収縮したサークルが、ミニミを担ぐ男の心臓のみをポイントした瞬間、シノンはトリガーを引いた。

　雷鳴にも似たが世界を震わせた。

　ヘカートⅡのあぎとに設けられたから巨大な炎がり、放たれた弾丸は銃声すらも振り切って突進する。によってシノンの体はライフルごと後退しようとするが、しっかり踏ん張った両足でえる。

　の向こうで、に気付いたのか、男がふっと顔をけた。スコープを覗くシノンと視線が交錯――

　した瞬間、男の胸から肩、頭部までもが、極小のオブジェクト片となって粉砕・消滅した。わずかに遅れて、残された体もガラスの像を叩き落とすようにく砕け散る。不運なことに、肩に掛けていた恐ろしく高価なはランダム・ドロップの対象になったらしく、その場に残って砂地に転がった。男はきっと、街に帰還・蘇生したあとも、しばらくは一撃死と武装ドロップによる二倍のショックと戦わねばならないだろう。

*［＃挿絵img0509.png］*

　以上のことを無感動に確認しながら、シノンの右手は自動的に動き、ヘカートⅡのボルトハンドルを引いていた。金属音とともに巨大なが排出され、傍らの岩に当たってから消滅する。

　次弾がされると同時に、シノンはライフルをわずかに右に振り、第二目標であるマントの巨漢をスコープ内に収めていた。男は、ゴーグルに覆われた顔をまっすぐこちらに向けている。その体のやや上側に照準を合わせ、トリガーをわずかに絞る。再びグリーンの着弾予測円が表示され、即座に一点へとする。

　初弾を放ってからここまでで、三秒が経過していた。のライフルなら連射が可能だが、のヘカートⅡではそうもいかない。それでも、一般的なプレイヤーであれば、目の前でいきなり仲間の体が粉砕されたことに驚愕・硬直し、そこから精神状態を立て直してを認識、回避準備に入るまで五秒はかかる。その混乱を突ければ、第二射も成功する可能性はあると踏んだのだが――。

　しかし、マントの男は慌てるりひとつ見せずに、大型ゴーグルの奥からまっすぐシノンを凝視していた。やはりこいつは相当なベテラン、きっと名のあるプレイヤーに違いない、と思いながらシノンはトリガーを引いた。

　この時点で男の視界には、自分を襲うであろう弾丸が描く《》が薄赤い半透明の光の筋となって表示されている。銃撃による戦闘に、ゲームならではのハッタリ的面白さを盛り込むために採用されている守備的システム・アシストだ。反射神経に優れ、高いＡＧＩを持ち、度胸の据わったプレイヤーであれば、五十メートルの距離から撃ち込まれる突撃銃の連射でさえ五割以上を回避してのける。

　スナイパーというの最大の利点は、最初の一撃に限ってこのを相手に与えないことだ。しかし、シノンはすでに一発撃って位置が露見しているため、その有利を得ることはできない。

　再びの。ヘカートⅡがその無慈悲な指先から放った《死》そのものの結晶たる弾丸が、薄い黄色に染まる大気を切り裂いて飛翔していく。

　だがシノンの予想どおり、男は落ち着いた動作で大きく一歩右に動いた。直後、その巨体から一メートル離れた空間を十二・七ミリ弾が貫いた。はるか後方の荒野に突き出ていたコンクリート壁が、ごっそりと円形に削り取られる。

　シノンの右手は無意識のうちに動き、さらに次の弾丸をしていたが、グリップに戻した指先をトリガーに掛けようとはしなかった。

　これ以上の狙撃は無駄だろう。どうしても狙いたければ現在の位置を移動し、男の視界から姿を隠して、認識情報がリセットされる六十秒が経過するのを待つしかない。しかしその頃には戦闘のは決しているはずだ。スコープを覗いたまま、のレシーバーに囁く。

「第一目標。第二目標」

　すぐにダインの応答があった。

『了解。アタック開始。……ゴーゴーゴー!!』

　ザッ！　と地面を蹴って駆け出していく音がかすかに届いた。シノンは詰めていた息を細く吐き出した。

　課せられた任務はこれで終わりだ。ヘカートⅡは超の付くレアガンなので、それを背負ったまま正面戦闘に参加して、もし死亡・武器ドロップということになれば一大事では済まない。ダインには、狙撃が終われば後は待機でいいと言われていた。第二射を外したのは心残りだが、あとは《嫌な感じ》がであったことを祈るだけだ。

　そう思いながら、シノンは再びライフルを動かし、スコープの倍率を下げて敵パーティー全体を視野にえた。四人の前衛が慌ただしく付近の岩やコンクリート壁などの物の陰に飛び込み、更に後方には大型レーザーライフルを構える後衛と、例のマントの大男が――

「あっ……!!」

　シノンは思わず声を漏らした。ちょうど大男が両腕を跳ね上げ、迷彩マントを体からぎ取ったところだった。

　男の両手に、武器はなかった。腰にもなかった。

　その広い背中にがれた、アイテム運搬用のバックパックだとばかり思っていた物体がわになった。

　しい肩から肩へと、金属のレールが湾曲して伸びている。そこに吊り下げるように装着されているのは、無骨かつな金属オブジェクトだった。

　Ｙ字型の支持フレームに包まれた、円筒形の機関部。上部には太いキャリアハンドルが突き出し、その下に伸びるのは、束ねられた六本もの銃身。長さは軽く一メートルを超える。

　機関部にはが装着され、それは同じくレールにされた大容量の弾倉へ繫がっているようだ。

　その、銃と言うにはあまりに巨大かつな姿を、シノンはかつて一度だけＧＧＯ情報サイトの武器名鑑で目にしていた。

　たしか名を、《ＧＥ・Ｍ１３４ミニガン》。武器カテゴリは重機関銃。ガンゲイル・オンラインに登場する銃器の中で最大のもののひとつだ。六連の銃身が高速回転しながら装塡・発射・を行うことで、七・六二ミリ弾を秒間百発という狂気じみた速度でバラく、悪夢の代名詞とでも言うべき銃――いや、もはや兵器か。

　当然ながら、重量もまじい。確か本体だけで十八キロ、あれだけの弾薬と一緒なら四十キロを超えるだろう。どんなＳＴＲ一極型のプレイヤーでも、重量制限内に収めるのは不可能だ。当然、果汁状態で移動ペナルティを受けているはずだ。

　あのパーティーの移動がのんびりとしていたのは、狩りが長引いたためではない。あれが、男に出せる最大の歩行速度だったのだ。

　としながらスコープを覗くシノンの視界の中央で、大男は右手を背に回すと、ミニガンのハンドルを握った。巨大な機関銃が滑らかにレールをスライドし、男の体の右側で前方に九十度回転する。両足を大きく開き、六連の砲身を正面に突き出した姿勢で――男は初めてゴーグルの下の口を動かし、獰猛な笑みを浮かべた。

　シノンは慌ててダイヤルを操作し、スコープの倍率を最小まで下げた。

　視界左側から、ギンロウたち三人のアタッカーが、サブマシンガンを構えて突っ込んでくる。敵パーティーの前衛が構えるレーザーブラスターの光弾が青白い尾を引いて迎え撃つが、それらはすべてギンロウたちの直前一メートルほどの空間で、水面のような波紋を残して減衰する。高性能な《対光弾防護フィールド》の効果だ。

　お返しとばかりに実弾系の短機関銃が火を噴き、岩から身を乗り出していた敵ブラスター使いの一人が、パ、パッと深紅の着弾エフェクトを散らして倒れた。ギンロウたちは更に突出し、敵集団から最も近いコンクリート壁の陰へと――

　その時、大男がぐっと腰を下ろした。

　ミニガンの砲身が高速回転し、きらきらと輝く光の帯が、わずかコンマ三秒ほどった。

　それだけで、コンクリートのごと、ギンロウのアバターが分解・消滅した。水流にされた砂の人形のようななさだった。

「っ…………」

　シノンは、唇をんで立ち上がっていた。地面からヘカートⅡを抱き上げると、二脚を畳んでベルトを体に回し、背負う。

　全長百三十八センチに及ぶヘカートⅡは、百五十五センチほどしか身長のないシノンの肩にずしりと食い込んだが、それでも重量制限内だ。サイドアームの超小型短機関銃《Ｈ＆Ｋ・ＭＰ７》を入れてもどうにか制限をオーバーしないのは、シノンのＳＴＲ値が高い上にヘカートⅡの弾薬をマガジン内の七発しか携行していないからだ。

　肉眼でも、ほぼ一キロ半離れた戦場に花咲く幾つものマズル・フラッシュが視認できた。シノンは無言のまま、全速で駆け出していた。

　こうなった以上、戦況はダインたちに圧倒的に不利だった。ミニガン使いの男一人が相手であれば、中距離以上を保って常に高速で移動しながら攻撃することで、倒すこともあるいは可能だろう。しかしミニガンの援護を受けたレーザーブラスター使いたちに、防護フィールドが効力を失う近距離まで肉薄されれば、そちらの相手をせざるを得ない。

　スコードロンのメンバーとはいえ、シノンがここで撤退しても文句は言われないはずだった。命じられた目標の狙撃と言う任務は立派に果たしたのだ。

　それでも、シノンは一直線に戦場目指して走った。仲間を助けたいと思ったわけではない。ただ、あのミニガンの男が浮かべた笑みが、シノンの脚を前に動かした。

　男には戦場で笑えるだけの強さがある。ミニガンなどという、ヘカートと同じかそれ以上のレア銃を入手できるだけのプレイ時間。恐ろしいまでの装備要求ＳＴＲを積み重ねる忍耐力。更には、シノンの狙撃にも冷静に対処するだけのをもあの男は身につけている。

　そういう相手と戦い、殺すことで、あまりに弱いもうひとりの自分――シノンの中でいつまでも泣きじゃくっている、幼い《》を消滅させる。

　それだけのために、この狂気の世界に身を投じているのだ。ここで逃げては、今まで積み重ねてきたものが全て無駄になる。

　パラメータが許すかぎりの全速で乾いた地面を蹴り、っぽい空気を切り裂いて、シノンはした。

　の混じる砂地に転々と突き出す岩や崩れかけた壁をけ、飛び越え、わずか数十秒の移動で交戦エリアに突入する。

　ＡＧＩパラメータ支援を全開にした、一直線の猛ダッシュだ。身を隠すことはわずかにも考えなかった。敵集団も、接近するシノンの姿をすでに捕捉しているだろう。

　両パーティーの交戦域は、開始時と比べて大幅に移動していた。当然、後退しているのはダインたちだ。ミニガンの有無を言わせぬにバックアップされて、敵集団の前衛は着実に距離を詰めてくる。光学銃の有効射程から逃れるために、ダインを含む四人は物から掩蔽物へと下がり続けるしかない。

　荒野に飛び出しての一直線の逃走も、もはや不可能。姿をせば、即座に滝のようなミニガンの銃撃を浴びての巣だ。しかも、いまダインたちが背中を預けているコンクリート壁は、彼らの退路上にはもうほとんど見当たらない。残るのは、最初の接近に利用した、半分以上崩壊したビルディングの遺構だけだった。あそこに逃げ込んだところで、袋のネズミになるしかない。

　以上のことを瞬時に認識したシノンは、ダインらがうずくまる壁の陰に一息に飛び込もうとした。その瞬間、三本の薄赤い光のラインが、シノンのすぐ前方にぱぱっと表示された。

「く……」

　歯を食い縛り、回避体勢に入る。これは、敵のアタッカーが持つレーザーブラスターの弾道予測線だ。

　シノンはまず、体を限界まで低くし、最初の予測線をかいくぐった。直後、頭上のラインを正確にトレースして、青白い熱線が空間をいた。目の前には二本目の予測線が伸びている。すぐさま右足に全身の力を込めて地面を蹴り飛ばし、空に身をらせる。腹のすぐそばを次のレーザーが通過し、一瞬視界を白く染める。

　三本目の予測線は、飛翔するシノンの軌道と、少し高い位置で交差していた。精一杯首を縮め、飛来した熱線を回避したが、薄いブルーのショートヘアーのがわずかに接触して、ぱちぱちと光の粒が散った。

　どうにかレーザーブラスターの連射をかわして、地面に着地したシノンの眼前を――

　恐ろしく太い、直径五十センチはあろうかという血の色のラインが染め上げた。

　間違いなく、ミニガンの弾道予測線だった。コンマ何秒後に、あの嵐のような連射が襲い掛かってくる。

　恐怖ですくむ体に打って、シノンは地面に触れたばかりの右足をぐっとたわめ、再び思い切り跳び上がった。空中でくるりと体をり、ハイジャンプの背面跳びの要領で全身を反らせる。

　直後、暴風のようなエネルギーの奔流が、背中ぎりぎりの場所で荒れ狂うのを感じた。白く輝く実体弾の群が視界の端を通過し、少し離れたビルディングのぼろぼろの壁を、さらに一部丸く吹き飛ばした。

　背中から砂地に落下する寸前シノンは再び体を捻り、両手両足で着地。同時に思い切り体を前方に投げ出した。数回ごろごろと転がると、そこはもうダインらの伏せるコンクリート壁の陰だった。

　いきなり目の前に出現したシノンを、スコードロンのリーダーは驚愕の視線で眺めた。どう好意的に見ても、その眼にあったのは感謝の輝きではなく、わざわざ死地に首を突っ込む物好きへの疑念に過ぎなかったが。

　ダインはすぐに顔を逸らし、手のなかのアサルトライフルに視線を落とした。呟いた声は、低くしわがれていた。

「……奴ら、を呼んでやがった」

「用心棒？」

「知らねえのか、あのミニガン使いだよ。あいつは《ベヒモス》っていう、北大陸をにしてる野郎だ。カネはあるが根性のねえスコードロンに雇われて、護衛の真似事なんかしてやがんだ」

　あなたよりはよほど尊敬できるプレイスタイルだ、とシノンは思ったが、もちろん口には出さない。代わりに、ダインの向こうで時折掩蔽物から顔を出しては、敵集団に向かってしい反撃を試みているアタッカーたち三人を見やり、ギリギリ全員に聞こえるだけのボリュームで言った。

「このまま隠れていたらすぐに全滅する。――ミニガンはそろそろ残弾が怪しいはず、全員でアタックすれば派手な掃射はためらうかもしれない。そこを突いてどうにか排除するしかない。二人は左から、ダインと私は右から回り込んで、Ｍ４はここからバックアップ……」

　そこまで言ったとき、ダインがれた声でった。

「……ムリだ、ブラスターだって三人残ってるんだぞ。突っ込んだら防護フィールドの効果が……」

「ブラスターの連射は実弾銃ほどのスピードじゃない、半分はけられる」

「ムリだ！」

　ダインはなに繰り返し、首を振った。

「突っ込んでもミニガンにズタズタにされるだけだ。……残念だが、諦めよう。連中に勝ち誇られるくらいなら、ここでログアウトして……」

　ニュートラル・フィールドでログアウトしても、すぐに消滅できるわけではない。魂の抜けたアバターは数分間その場に残り、依然として攻撃の対象になり得る。低確率だが武器や防具のランダムドロップも発生する。

　今までも、リーダーとしては後退を指示するタイミングが早すぎるとは思っていたが、まさかこのような自暴自棄、いや子供のとでも言うべき提案を持ち出すとは思わなかった。シノンは半ばとしてダインの、それだけ見れば歴戦の兵士然とした顔を凝視した。

　途端、ダインは歯を剝き出し、いた。

「なんだよ、ゲームでマジになんなよ！　どっちでも一緒だろうが、どうせ突っ込んでも無駄死にするだけ……」

「なら死ね！」

　反射的に、シノンは叫び返していた。

「せめてゲームの中でくらい、銃口に向かって死んでみせろ！」

　やれやれ、ただの標的としか思ってないはずの男に何でこんなこと言ってるんだろう。それ以前に、これでもうこのスコードロンとも縁切れかな。

　心の隅でそんなことを思いながら、ダインの迷彩ジャケットの襟首を摑んで無理やり引っ張り上げた。同時に、眼を丸くしている残り三人に向かって早口で囁く。

「三秒でいい、ミニガンの注意を引き付けてくれれば、私がヘカートで始末する」

「……わ、わかった」

　緑の髪をゴーグルに垂らしたアタッカーが、つっかえながらもどうにかえ、残り二人も頷いた。

「よし、二手に分かれて、左右から一斉に出る」

　シノンは、れた顔のダインの腰を押し、掩蔽物の端まで移動した。左腰からサイドアームのＭＰ７を抜き、ハンドサインでカウントする。

　三、二、一、

「ゴウ!!」

　同時に思い切り地を蹴り、一秒先の死が連続して待ち受けるバトルフィールドに突撃。

　途端、すぐ目の前を複数の弾道予測線が横切った。体を倒し、スライディングで回避しながら、敵集団を視界に収める。

　右斜め前方、二十メートルほど先の壁の向こうにレーザーブラスター　持ちが二人。左に離れた場所にもう一人。ミニガンの男《ベヒモス》は中央さらに十メートル後方、左に飛び出した味方二人を射線に収めようとしている。

　シノンは右方向に走りながら、左手のＭＰ７をブラスター使いに向けた。トリガーに力を込めると着弾予測円が表示されたが、さすがに心拍を抑え切れず、男たちの体をはみ出すほどに脈動している。

　それでも構わず射撃。へカートⅡに比べると無いに等しいリコイル・ショックをに感じながら、四・六ミリ弾の二十連マガジンを一気ににする。

　無謀とも言える反撃に慌てたように、二人のブラスター使いは壁の向こうに引っ込もうとしたが、数発の弾丸がそれぞれの体を捉えた。ＨＰを削り切るまでには至らなかったが、数秒の時間は稼いだだろう。

「ダイン！　援護！」

　シノンは叫んで地面に身を投げ、同時に背中からへカートⅡを外して両腕でホールドした。二脚を展開している暇はない。恐ろしい重みに耐えながら、スコープを覗く。

　低倍率にセットしたままの視野に、ベヒモスの上半身がいっぱいに映し出された。その顔がまっすぐこちらを向くのを見て、予測円が収縮するのを待たずにシノンはトリガーを引き絞った。

　轟音と共に必殺の閃光が空間を貫き――ベヒモスの頭のすぐ隣を通過した。衝撃でよろけたベヒモスの頭からゴーグルが吹き飛び、こなごなになって消滅した。

　外した――！

　唇を嚙んで立ち上がろうとしたシノンと、スコープのベヒモスの視線が交錯した。素顔をしたベヒモスは、灰色の両眼をと光らせ、なおも唇に不敵な笑みを浮かべていた。

　シノンの全身を巨大な赤い光が包んだ。

　回避不可能、と一瞬で判断した。伏射姿勢から立ち上がり、左右どちらかにジャンプするだけの余裕はない。

　せめて、銃口に向かって――。

　自分の言葉を守るべく、シノンは体を起こしながらまっすぐにベヒモスの姿を見た。と、その巨体の数箇所に、ぱぱっ！　と光が弾けた。

　ダインだった。地面に片膝立ちになってアサルトライフルを構え、命中精度を稼いで狙い撃ったのだ。この状況、この距離で数発にせよ命中させるとは、人格はともかくさすがの腕だ。そう思いながらシノンは右方向に思い切り跳んだ。直後、今まで身体のあったところを数十発に及ぶ弾丸の嵐が引き裂いた。

「ダイン！　もっと右に移動して……」

　そこまで叫んだ時。

　再び掩蔽物から姿を現した二人のレーザーブラスター使いが、立ち上がりかけたダインに向かって容赦ない光の矢を射かけた。

　あまりに距離が近すぎた。ダインの防護フィールドを熱線が貫通し、その体に次々と突き立った。

　ダインは一瞬シノンを見た。すぐに顔を正面に向け――

「うおおっ!!」

　一声叫んでまっすぐ走り始めた。

　たちまち光弾の雨がダインを迎え撃つ。それをかわし、いり、ダインは猛然とダッシュする。だがもちろん、全弾回避は不可能だ。

　最後の数秒で、腰からお守り代わりの大型プラズマグレネードを引き抜き、ダインは掩蔽物の向こうに投げ込んだ。同時にＨＰが全損し、アバターはシノンに背中を向けたまま、無数のポリゴン片となって砕け散った。

　直後、閃光が世界を白く染めた。

　巨神のハンマーが大地を叩くが如き衝撃。青白いエネルギー流が荒れ狂い、盛大に土砂を巻き上げた。それらに混じって、ブラスター使いの体がひとつ宙に舞い、地面にり着く前に粉砕・消滅した。

　――ナイスガッツ！

　退場したダインに向かって短くエールを送り、押し寄せる土煙に眼を細めながら、シノンは素早く戦場を見渡した。

　左翼から突撃した味方二人のうち一人はミニガンにやられたらしいが、そちらにいたはずの敵ブラスター使い一人も姿を消している。

　はダインが自爆にも等しい特攻で散り、敵前衛一人を道連れにして、もう一人もしばらくはスタン状態だろう。

　そして――もうもうと立ち込めるの奥にうっすらと、一直線に接近しつつある大柄なシルエット。

　こうなれば、あとはほぼベヒモスとシノンの一騎打ちだ。しかしながらこの距離で、重機関銃に対して狙撃銃では勝負にもならない。

　どうにかしてミニガンの死角に入り、射撃体勢を取らなくてはならない。だが一対一の正面戦闘では死角もも……

　――いや。

　シノンは一瞬息を詰めた。ダインのが巻き上げた土煙が色濃く周囲を覆っている今なら、ベヒモスはこちらの位置を正確には認識できない。むろんこちらからもはっきりとは見えないゆえ狙撃は不可能だが、このエリアに唯一存在する、あの銃弾の暴風が届かない地点に移動することはできるかもしれない。

　そう思考した瞬間、振り向きざま猛然と駆け出していた。戦場のすぐ後方には、ぼろぼろに崩れたビルディングの遺構がそびえている。

　エントランスに飛び込むと、ビルの後ろ半分は全て崩壊して黄色い空が覗いていたが、すぐ右手の壁際に目指すもの――上階へと続く階段があった。床に積もったを崩して音を立てないよう慎重に走り寄る。

　金属製の階段も、そこかしこでステップが抜け落ちている有様だったが、気にせず駆け上る。踊り場の壁を蹴るように方向転換し、更に上へ。

　二十秒足らずで五階まで上り詰めると、そこで階段は終わっていた。すぐ左側に大きな窓があった。

　ここからなら、狙撃姿勢を取るための数秒を、ベヒモスに気付かれずに稼げるはず。

　そう思いながら、シノンはヘカートⅡのを肩に当て、窓からフィールドを見下ろした。

　途端、視界が真っ赤に染まった。

　十数メートル下の地面では、すでにベヒモスがミニガンを限界まで上向けて、ぴたりとシノンを照準していた。読んでいたのだ。シノンの思考と作戦を、全て。

　後退する時間も、身を伏せる時間も無かった。

　強い。彼は本物のＧＧＯプレイヤー、いただ。

　だが、そういう相手、敵をこそシノンは求めてきたのだ。殺す。絶対に殺す。

　はしなかった。狙撃体勢は取らずに窓枠に右足を掛け、一気に身を躍らせる。

　同時に、燃えるように輝くエネルギーの激流が地上から襲い掛かってきた。バシッ!!　と凄まじい衝撃がシノンの左膝から下を叩いた。アバターの脚が吹き飛び、ＨＰバーが急激に減少した。

　だが、まだ生きている。ミニガンの射線を飛び越え、シノンは宙を舞った。仁王立ちになったベヒモスの、まっすぐ上空へと。

　弾倉が空になるまで撃ち尽くすつもりか、ベヒモスは体を後退させ、射線でシノンを追った。しかし届かない。背中のレールに懸架されたミニガンでは、真上までは射角が取れない。

　落下が始まると同時に、シノンはヘカートⅡの銃床を肩に当て、スコープを覗いた。

　視野いっぱいに、ベヒモスのしい容貌が映し出された。その顔から、ついに笑みが消えた。歯を剝き出し、驚きと怒りの混合燃料による炎を両眼にしている。

*［＃挿絵img0510.png］*

　シノンは、自分の口元が動くのを思考の片隅で意識した。

　入れ替わるように、笑う。で、残虐で、冷酷な微笑。

　落下しながらの、安定姿勢とは程遠い射撃だったが、距離があまりにも近かった。銃口がベヒモスの頭部から一メートルほどまで肉薄した時点で、グリーンの着弾予測円がぐうっと収縮し、男の顔の中央に固定された。

「」

　呟くと同時に、シノンはトリガーを絞った。

　の女神の指先から、この世界に於ける。一弾あたりでの最大エネルギーを秘めた光の槍が放たれた。

　それは、ベヒモスの顔から胴体へと一瞬でをち、交じりの地面の奥深くまでを貫いた。

　直後、爆発じみた衝撃音がき渡り、ベヒモスの巨体は円筒状に分解・拡散した。

　　　４

　校門から出た途端、冷たく乾いた風が頬を叩いた。

　は立ち止まると、白いマフラーをきっちりと巻き直した。

　セルフレームの眼鏡をかけた顔を半分以上も布に隠し、再び歩き始める。枯葉の積もった歩道を足早に進みながら、胸の中で小さく呟く。

　……これで、高校三年間の総授業日数六百八日のうち、百五十六日が終わった。

　ようやく四分の一。そう思うと、課せられた苦行のあまりの長さにとする。しかしながら、中学時代を計算に入れれば、すでに六割近くの日付が過去へと消えていったことになる。いつかは終わる……いつかは、終わる。呪文のように、そう繰り返す。

　もっとも、高校を卒業する日が来たとして、何かしたいこと、あるいはなりたいものがあるという訳ではない。ただ、今の自分が半ば強制的に所属させられている、この《高校生》という集団から解き放れたい。

　毎日毎日あの収容所めいた場所に通い、無気力な教師たちの講義を聞かされ、幼児期から何一つ内的に変化していないのではと疑いたくなる連中と並んで体操だの何だのすることにどのような意味があるのか、詩乃にはまるで理解できない。ごく例外的に、有意義と思える授業をする教師もいるし、尊敬すべきところのある生徒もいるが、彼らの存在が詩乃にとって必要不可欠というわけでは全くない。

　現在の実質的保護者である祖父母に、かつて詩乃は、高校には行かずにすぐ働くか、あるいは専門学校で就職のための訓練をしたいと言った。昔の祖父は真っ赤になって怒り、祖母は、詩乃にはいい学校に行ってちゃんとした家にいで欲しい、そうでなければあんたのお父さんに申し訳が立たない、と泣いた。それでやむなく必死に勉強し、東京の、そこそこ名の通った都立高に合格したのだが、入ってみて驚いた。郷里の公立中学と、本質的には何ら変わるところが無かったからだ。

　結局詩乃は、中学時代と同じように、毎日校門から出るたびに儀式の如く残る日々を数えている。

　詩乃がひとりで暮らすアパートは、学校とＪＲの駅の中間あたりに位置している。六畳に小さなキッチンだけの狭い部屋だが、商店街の端と接する場所にあり、買い物には都合がいい。

　午後三時半のアーケード街には、まだそれほど人の姿はなかった。

　詩乃はまず本屋の平台を覗き、好きな作家の新刊が出ているのを見つけたが、ハードカバーだったので我慢して店を出た。オンライン予約すれば、一ヶ月ほど待つが都立図書館で借りることができる。

　次に文具店で消しゴムと方眼のノートを買い求め、財布の残金を確認してから、夕食のを考えつつアーケードの中央にあるスーパーマーケットに向かう。もっとも、詩乃のは一汁一菜が基本で、栄養、カロリー、原価のバランスさえ満たせば味や見てくれは二の次となる。

　にんじんとセロリのスープに、豆腐ハンバーグにしよう、と思いながら、ゲームセンターの前を通過してその隣のスーパーに入ろうとした時。

「朝田ぁー」

　二つの建物の隙間、細い路地から、詩乃を呼ぶ声がした。

　反射的に体をすくませてから、詩乃はゆっくりと九十度右に向き直った。

　路地には、詩乃と同じ制服――ただしスカートのに多大な差がある――に身を包んだ、三人の女子生徒の姿があった。一人はしゃがみこんで携帯端末を操作し、二人がスーパーの壁に体をもたれさせて、笑みを浮かべて詩乃を見ていた。

　無言のままでいると、立っているうちの一人が、横柄な仕草で顔を一振りした。

「こっち来いよ」

　だが詩乃は動かず、小さい声でいた。

「……なに？」

　途端、もう一人がつかつかと歩み寄ってきて、詩乃の右手首を摑む。

「いいから来いよ」

　そのまま、有無を言わせず引っ張る。

　商店街からは見通せない路地の奥方向に押しやられた詩乃を、しゃがんでいた生徒が見上げた。三人のリーダー格の、と言う女だ。黒々とアイラインを入れた吊り目とったが、ある種の捕食昆虫めいた印象を与える。

　大粒のラメが光る唇をめるように笑いながら遠藤は言った。

「わり、朝田。あたしらカラオケで歌いまくってたらさぁ、電車代なくなっちゃったぁ。明日返すからさ、こんだけ貸して」

　指を一本立てる。百円でも千円でもなく一万円と言う意味だ。

　歌いまくったも何も授業が終わってからまだ二十分と経っておらず、電車代も何も三人ともに定期カードを持っていて、更に電車に乗るだけでなぜ一万円もかかるのか。と、詩乃は心の中で立て続けに論理的矛盾点を列挙したが、それを指摘してどうなるものでもない。

　この三人に、あからさまに金銭を要求されるのは二回目だった。前回は、持ち合わせが無いと言って断った。

　同じ手が通用する確率は低い、と思いながら、詩乃は答えた。

「そんなに持ってるわけない」

　すると遠藤は一瞬笑みを消し、再びにこっとんだ。

「じゃ、下ろしてきて」

「…………」

　詩乃は無言でアーケード街に向かって歩き出そうとした。人目のある銀行まではついてこないだろうし、この場から離脱できればバカ正直に戻ってくるものか――と思ったその時、遠藤が言葉を続けた。

「、置いてって。財布も。カードだけあればＯＫっしょ」

　詩乃は立ち止まり、振り返った。遠藤の唇は変わらず笑みを形作っているが、細めた両眼には、獲物をることに興奮する猫のような光が浮かんでいる。

　この三人を、いっときは友達と信じたのだ。そう思うと、詩乃は己の愚かしさが許せなくなる。

　高校入学直後、地方から出てきたばかりで当然知り合いもおらず、共通の話題もなく毎日黙っているだけだった詩乃に、最初に声を掛けてきたのが遠藤たちだった。

　一緒に昼食をと誘われ、やがて学校の帰りに四人でファーストフード店に寄ったりするようになった。詩乃は主に話を聞くだけで、ひそかに彼女らの話題に閉口することもあったが、それでも嬉しかった。なぜなら遠藤たちは、久々に得た、《あの事件》を知らない友達だったから。この学校でなら普通の生徒になれる、そう思えたから。

　三人が、クラス名簿の住所から、詩乃が一人暮らしだと当たりをつけて近づいてきたのだということに気付いたのはずっと後になってからだった。

　遊びに行っていい？　と言われたとき、詩乃はすぐに了承した。アパートの部屋を遠藤たちはめ、ましがり、暗くなるまでお菓子を囲んで話し込んだ。

　彼女らは、翌日も、翌々日も詩乃のアパートにやって来た。

　やがて、三人は詩乃の部屋で私服に着替え、電車で遊びに行くようになった。そんなとき、詩乃の部屋には彼女らの荷物が残され、そのうちに三人の私服が小さなクローゼットを占めはじめた。

　。バック。化粧品。遠藤たちの私物はどんどん増えていった。五月に入る頃には、遊びに来た三人が酔って帰ってきて、そのまま泊まっていくようなこともあった。

　ある時、とうとう詩乃は、あまり毎日来られると、勉強が出来なくて困る、と恐る恐る苦言をした。

　遠藤の答えは、「友達っしょ」の一言だった。翌日、を要求された。

　そして、五月末の土曜日のこと。

　図書館から帰宅した詩乃がドアの前に立つと、部屋の中から盛大な笑い声が聞こえた。遠藤たちの声だけではなかった。

　詩乃は息を殺し、耳を澄ませた。自分の部屋の気配をう行為が、とてつもなくやるせなかった。

　明らかに、複数の男の声がした。

　自分の部屋に、知らない男がいる。そう思うと、詩乃は恐怖ですくんだ。次いで怒りが沸き起こった。ようやく真実を悟った。

　アパートの階段を降り、携帯端末で警察を呼んだ。やってきた警官は、双方の言い分に途惑ったようだったが、詩乃はひたすら「知らない人たちです」と繰り返した。

　とりあえず交番に行こうと警官にされた遠藤は、凄まじい眼で詩乃を見てから「ふうん、そっか」とひとこと言い残し、荷物をまとめて部屋を出て行った。

　報復はやかだった。

　遠藤は、普段の彼女からは考えられない悪魔の如き調査能力で、詩乃が一人で暮らしている理由――遠く離れた県で五年前に起こり、もうネットにもほとんど載っていない《事件》のことを調べ上げ、全校に暴露した。詩乃に話しかける生徒は一切いなくなり、教師ですら直視を避けた。

　何もかもが、中学時代に逆戻りした。

　だが詩乃は、それでいい、と思った。

　友達を欲しがるような自分の弱さが、目をらせた。己を教えるのは己しかいないのだ。自分の力だけで強くなり、事件の残した傷を乗り越えなければならない。そのためには、友達なんかいらない。むしろ敵でいい。戦うべき敵――周囲の全てが、敵。

　ぐっと息を吸い込み、詩乃はまっすぐ遠藤の顔を見た。

　細められた両眼に、な光が宿った。今度こそ完全に笑みを消し、低い声で遠藤は言った。

「んだよ。――早く行けよ」

「嫌」

「……は？」

「嫌。あなたにお金を貸す気はない」

　視線をらさず、詩乃は答えた。

　断固とした拒絶は、更なる敵意と害意を呼び起こすだろう。そう解っていても、要求に従うのはもちろん、な態度を取って逃げるべきことさえしたくなかった。遠藤らにではなく、自分に《弱い自分》を見せるのが嫌だった。強くなりたい、それだけを考えてこの五年間を過ごしてきたのだ。ここでければ、その努力が無駄になる。

「手前ェ……ナメてんじゃねえぞ」

　右の目元をぴくぴくと引きらせ、遠藤が一歩踏み出してきた。残る二人は素早く詩乃の後ろに回り、至近距離から取り囲まれる。

「――もう行くから、そこをどいて」

　詩乃は低い声で言った。たとえどれほどキレたポーズを作ろうと、遠藤たちに実際の行動に出る度胸はないと踏んでいた。彼女らも、家に帰ればそれなりに普通のいい子なのだ。警察になるのは、以前の一回でりているはずだ。

　だが。

　遠藤は、詩乃の弱点――どこを刺激すればく血が流れるのか、そのポイントを熟知していた。

　派手な色に光る唇に、るような笑みが浮かんだ。

　遠藤は、ゆっくりとした動作で右を持ち上げ、詩乃の眼鏡のブリッジに向けた。拳から、人差し指と親指が伸びて、子供がをすときの形を作る。ない、幼稚なカリカチュア。

　しかし、それだけで詩乃の全身をすうっと冷気が包んだ。

　両脚から徐々に力が抜けていく。平衡感覚が遠ざかる。路地裏の光景が色彩を失い、顔のすぐ前にされた遠藤の指、てらてらと光る長い爪の先端から眼が離せなくなる。心拍の加速に伴って、高周波のような耳鳴りがどんどん高まる……。

「ばぁん！」

　いきなり遠藤が叫んだ。途端、詩乃の喉から細く高い声が漏れた。体の奥から震えが込み上げてきて、止めることができない。

「クッフ……、なぁ、朝田ぁ」

　指先を突きつけたまま、遠藤が笑いの混じる声で言った。

「兄貴がさぁ、モデルガン何個か持ってんだよなぁ。今度、学校で見せてやろうか。お前好きだろ、ピストル」

「…………」

　舌が動かない。水気がせた口の中で、小さく縮こまってしまっている。

　詩乃は小刻みに首を振った。学校でいきなり生のモデルガンなど見せられたら、その場で卒倒してもおかしくない。想像しただけで胃が収縮し、たまらずに体を折る。

「おいおい、ゲロるなよ朝田ぁー」

　後ろから、やはり笑いにれた声がした。

「いつだか世界史の時間にアンタがゲロって倒れたとき、後すげえ大変だったんだぞぉ」

「ま、ここならよく酔っ払いのオヤジがやってるけどさぁ」

　い笑い声が沸き起こる。

　逃げたい。走って逃げ去りたい。でもそんなことできない。する二つの声が、頭の中でがんがんとこだまする。

「とりあえず、今持ってるだけで許してやるよ、朝田。具合悪いみたいだしさぁ」

　右手に持った鞄に、遠藤が手を伸ばしてきたが、とても抵抗できなかった。考えちゃいけない、思い出しちゃいけない、そう思うほどに、記憶のスクリーンに黒い輝きがってくる。ずっしりと重く、じっとりとれた鉄の感触。つんと鼻をつく火薬のい――

　その時、背後から叫び声がした。

「こっちです！　おりさん、早く!!」

　若い男の声だった。

　途端、鞄から遠藤の手が離れた。三人は素晴らしいスピードで前方に駆け出し、アーケードの人波に紛れてたちまち消え去った。

　今度こそ脚から力が抜け、詩乃は崩れるようにうずくまった。

　懸命に呼吸を整え、パニック発作の予兆を押しやろうとする。徐々に買い物客のや、スーパーの店頭から流れる焼き鳥の匂いが戻ってきて、フラッシュバックしかけた悪夢を遠ざけていく。

　何十秒そうしていただろうか。やがて背後から、おずおずとした声が掛けられた。

「……大丈夫、朝田さん？」

　最後に一度大きく呼吸をして、詩乃はえかけた脚に力を込め、立ち上がった。

　眼鏡をかけ直しながら振り向くと、せた小柄な少年の姿が眼に入った。

　ジーンズにナイロンパーカー姿、肩には深緑色のデイパック。黒いベースボールキャップを被った顔の輪郭は丸みを帯びて、私服だと中学生にしか見えないが、両眼のあたりに宿る濃い陰影だけが幼い印象を裏切っている。

　詩乃は、少年の名前を知っていた。この街で唯一気を許せる――少なくとも敵ではない存在であり、ここではないもうひとつの世界では戦友と言っていい間柄だ。

　ようやくが収まったのを感じながら、詩乃はごくわずかにみ、応えた。

「……大丈夫。ありがとう、くん。――警官は？」

　背後を覗き込むが、薄暗い路地は無人のままで、誰かが現れる様子はない。

　新川は、キャップ越しに頭を搔きながら笑った。

「せだよ。よくドラマや漫画であるじゃない。一度やってみたかったんだ、くいってよかった」

「…………」

　詩乃は少々れて、短く首を振った。

「……よくにそんなお芝居ができたね。どうしてここに？」

「ああ、そこのゲーセンにいたんだ。裏口から出てきたら……」

　恭二は背後を振り返った。路地に面したみだらけのコンクリート壁に、確かに小さな銀色のドアが見える。

「あいつらが朝田さんを取り囲んでたからさ。ほんとに一一〇番しようかとも思ったんだけど……」

「ううん、助かったよ。ありがとう」

*［＃挿絵img0511.png］*

　再び詩乃が微笑むと、恭二も一瞬顔をほころばせ、すぐに心配そうな表情に戻った。

「……朝田さん、こんなこと……よくあるの？　その……僕が言うのも何だけどさ、ちゃんと学校に報告したほうが……」

「アテにならないよ、そんなことしても。大丈夫、これ以上エスカレートするようなことがあったらほんとに警察行くから。それに、人の心配するよりも、君のほうは……大丈夫なの？」

「ああ……、僕は平気。奴らとはもう顔も合わせないしさ」

　小柄な少年は、今度はややぎみに笑った。

　は、夏休み前まで詩乃のクラスメートだった。だった、と言うのは、二学期以降学校に来ていないからだ。噂で知った程度だが、恭二は、所属したサッカー部で上級生からかなりいめにっていたらしい。体格が小さく、また家が大きい医院を経営しているということで、格好の標的と見られたのだろうか。金銭的にも、遠藤たちほどあからさまではないにせよ、飲食や遊興代の立て替え払いなどの形で馬鹿にならない額の被害があったそうだ。

　もっとも、恭二から直接その話を聞いたことはない。

　知り合ったのは六月、近所の区立図書館でのことだった。

　詩乃は二階の閲覧室で、『世界の銃器』なるタイトルの、大判のグラス誌をめくっていた。

　その頃は、写真であればどうにかパニック発作は誘発しないようになっていたものの、それでも《あの銃》が掲載されたページを十秒ほど眺めたところで限界に達し、慌てて本を閉じたその瞬間、背後から声を掛けられたのだった。

　……銃、好きなんですか？

　という言葉を発したのが、同じクラスの生徒だということにしばらく経って気付いた。

　詩乃は即座に、とんでもない、その逆だ、と答えようとした。しかし、ならばなぜそんな本を見ていたのかという疑問を当然相手は抱くだろうし、それに対する合理的回答をでっち上げるのも難しそうだったので、に言葉を濁した。

　今では恭二も、詩乃が現実世界では銃に対する極度の恐怖を抱いていることを知っているが、当時は詩乃の反応を勘違いして、嬉しそうに笑いながら隣の椅子に座った。

　グラフ誌を指差しながら彼が次々にする銃器の知識を、詩乃は内心で冷や汗を流しながら聞いたものだが、そんな中、恭二がとある《別世界》の話に言及した。

　数年前にフルダイブ型ゲームマシンなるものが発売されたことは知っていたし、ＶＲＭＭＯなる名称を聞いたこともあった。しかし、幼い頃からゲームをする習慣のなかった詩乃は、いわゆる《剣と魔法の世界》はファンタジー小説の中にあれば充分だと思い、興味を持つことはなかった。

　だが、恭二が初対面の詩乃に夢中で語って聞かせた仮想世界には、どうやら剣も魔法も存在しないようだった。代わりに――銃だけが有った。

　その世界の名は《》。現実世界に存在する、あるいは存在したの銃器が精密に再現され、それらを帯びたプレイヤーたちがひたすらに殺し合うなる荒野。

　詩乃は恭二の言葉をり、ぽつりとねた。

　――そのゲームには、……っていう銃はある？

　少年はぱちくりと瞬きしてから、当然とばかりに頷いた。

　ならば、と詩乃は考えた。その仮想世界でなら、再び《あの銃》とできるのだろうか？　五年前、十一歳の自分の心を深く深くり、消えないを刻み込んだあの黒い拳銃ともう一度向き合い、戦い、乗り越えることができるのだろうか……？

　詩乃は、冷や汗のむ両手を強く握り、れた顔で恭二に重ねて訊いた。そのゲームを始めるには、総額で幾らかかるのか、と。

　あれから半年。

　詩乃の中に生まれた《シノン》という名前の少女は、冷酷なる狙撃手としてＧＧＯの荒野に名を轟かせている。

　だが、残念ながら《あの銃》を持つ敵と巡りったことは、まだない。だから詩乃には解らない。シノンではない現実の自分、この朝田詩乃は、本当に強くなっているのだろうか……？

　その答えは、まだ見えない。

「……ね、何か飲まない？　るからさ」

　恭二の声が、詩乃を内的思考から引き戻した。顔を上げると、細い路地に差し込む陽光はすでに赤みを帯び始めていた。

「……ほんと？」

　詩乃が微笑むと、恭二は嬉しそうにこくこくと頷いた。

「このあいだの大暴れの話、聞かせてよ。ここの裏通りに、静かな喫茶店があるんだ」

　数分後、案内された店の奥まった席に体をめ、いい香りのするミルクティーのカップを両手で包むと、ようやく少し気持ちが落ち着いた。どうせまた遠藤たちはちょっかいを出してくるだろうが、その時はその時だとを心の隅に押しやる。

「聞いたよ、の話。大活躍だったんだって？」

　恭二の声に顔を上げると、痩せた少年はアイスコーヒーに浮かぶバニラアイスの半球をスプーンでつつきながら、やや上目遣いに詩乃を見ていた。

「……そんなことないよ。作戦的には失敗だったわ。こっちのスコードロンは六人中四人もやられたんだから。待ち伏せで襲ってその結果じゃあ、とても勝ったとは言えない」

　肩をすくめて答える。現実世界で本物の銃器のことを想起するのはくパニックの引き金となるが、ＧＧＯ内部の話であれば、バーチャルなリハビリの効果が出ているのか、この頃はどうにか平常心を保てるようになっている。

「でも、凄いよ。あのミニガン使いの《ベヒモス》は、今まで集団戦で死んだことがないって言われてたんだからさ」

「へえ……。そんな有名な人なんだ。《バレット・オブ・バレッツ》のランキングで見たことないから知らなかった」

「そりゃあそうだよ。いくらミニガンが強力って言っても、弾薬を五百発も持てば重量オーバーで走れないんだ。《ＢｏＢ》はソロの遭遇戦だから、遠くから狙い撃たれて終わりさ。その分、集団戦で充分な支援があれば無敵だけどね。反則だよ、あんな武器」

　子供のように口をらせる恭二の仕草に、詩乃は思わず微笑む。

「……それなら、私のヘカートⅡだって思い切り反則って言われてるよ。使うほうにしてみれば、それなりに色々苦労はあるんだけどね。きっとあのベヒモスさんだってそう思ってるよ」

「ちぇ、ゼイタクな悩みだなあ。……で、次のＢｏＢはどうするの？」

「出るよ、勿論。前回二十位までに入ったプレイヤーのデータはどったからね。今度はヘカートを持っていくつもり。次こそは、全員……」

　殺す、と言いそうになり、慌ててごまかす。

「……上位入賞を狙ってみるよ」

　詩乃／シノンは、先々月に行われた第二回ＧＧＯ最強者バトルロワイヤル大会、その名も《バレット・オブ・バレッツ》に初参加し、予選トーナメントを突破して三十人で行われる本大会に進んだものの、二十二位という不本意な結果に終わっていた。

　広大なマップに三十人がランダムに配置されてスタートするＢｏＢでは、いきなり近距離からの戦闘に巻き込まれる可能性があったので、狙撃ライフルであるヘカートⅡではなくアサルトライフルを装備していったのだが、逆に近接戦闘中を《レミントン・Ｍ40》ライフルを装備したスナイパーに遠距離から狙われてしまったのだ。

　あれから二ヶ月、じゃじゃ馬もいいところであるの扱いも大分慣れ、またレアな軽量短機関銃の《ＭＰ７》を入手したことで近接戦闘にもある程度対応できるようになったので、もうすぐ行われる第三回ＢｏＢではあの巨大なライフルを背負って参加しようと思っている。基本的には物に身を潜め、と言われようとひたすらターゲットが視界内に現れるのを待って、一人残らず吹き飛ばすつもりだ。

　強力な戦士のひしめくＧＧＯで、敵を全て撃ち倒し、己が最強であると確信できれば――その時には、きっと……

　い思考をわせる詩乃の耳に、恭二のめいた声が届き、意識が現実に引き戻された。

「そっかぁ……」

　瞬きして視線を向けると、恭二はどこかしそうに眼を細め、詩乃を見ていた。

「凄いな、朝田さんは。あんま物凄い銃を手に入れて……ステータスも、あつらえたみたいにＳＴＲ優先だったしさ。僕がＧＧＯに誘ったのに、すっかり置いていかれちゃったな」

「……そんなことないよ。新川くんだって、前の予選じゃあ準決勝まで進んだじゃない。あの勝負はもう運だけだったよ。惜しかったよね、決勝まで行けば本大会に出られたのに」

「いや……ダメさ。ＡＧＩ型じゃあ、よっぽどレア運がないともう限界だよ。ステ振り、間違ったなぁ……」

　愚痴めいた恭二の口調に、ごくごくかすかに眉をひそめる。

　恭二の分身であるキャラクター《シュピーゲル》は、ＧＧＯ初期の時流に即したＡＧＩ、つかりパラメータをひたすらに上げたタイプだ。

　この型は、サービス開始後半年くらいまでは圧倒的な回避力と速射力――この場合の《速射》は銃自体の連射速度ではなく、照準してから着弾予測円が安定するまでの時間だ――によって他タイプのキャラクターを圧倒した。しかしマップが攻略されるにつれて登場した強力な実弾銃を装備するためのＳＴＲ、つまり筋力値に事欠き、また銃自体の命中精度が向上することによって回避も思うようにいかなくなって、サービス開始から八ヶ月が経過する現在ではとても主流とは言えなくなっている。

　それでも、速射力がものを言う大口径の強力なライフル、たとえば《ＦＮ・ＦＡＬ》や《Ｈ＆Ｋ・Ｇ３》などのレア銃を入手できればまだまだ一線で通用するし、現実に前回のＢｏＢで二位になった《》というプレイヤーはＡＧＩ一極型だった。とはいえ、彼を破った優勝者《ゼクシード》はＳＴＲ―ＶＩＴのバランスタイプであったのもまた事実なのだが。

　しかし――。

　詩乃に言わせれば、ステータスタイプなどというモノはあくまで《キャラクターの強さ》であって、それよりも重要なファクターが厳然として存在する。

　ち、プレイヤー自身の強さだ。心の強さ。戦った《ベヒモス》が、常に冷静沈着に行動し、その上で片頬に笑みを浮かべるだけの余裕を備えていたように、あの男の強さの源はＭ１３４ミニガンではなく、あのな笑いそのものだった。

　だから、詩乃としては恭二の言い方には少々引っかからざるを得ない。

「うーん……。確かにレア銃は強いけどさ……。強い人の中にはレアな武器装備してる人もいる、ってだけで、レア持ってる人が全員強いわけじゃないよ。実際、前の本大会に出た三十人のうち半分くらいは、店売りのるし武器をカスタムしてたよ」

「それは……朝田さんがあんな超レア武器持ってて、その上ＳＴＲ先行のバランス型だからそう言えるんだよ。やっぱ武装の差は大きいよ……」

　ため息混じりにコーヒーフロートを搔き回す恭二を見ながら、これ以上は何を言っても無駄だと思い、詩乃は会話を収束させようとした。

「じゃあ、新川君は次のＢｏＢにはエントリーしないの？」

「……うん。出ても、無駄だからさ」

「そう……。ん……まあ、勉強もあるもんね。予備校の大検コース、行ってるんでしょ？　模試とかどう？」

　恭二は夏休み以来不登校を続けており、その件では父親と相当やりあったらしい。

　そこそこ大きな病院を経営する父親は、名前のとおり次男坊である恭二にも、昔から医学部受験を厳命していたのだそうだ。かなり緊迫した家族会議の結果、自宅学習は認められたものの、再来年には大学入学資格検定を受けて、タイムロスなしで父親の出た有名私立大学の医学部に入学すると約束させられた、と以前聞いた。

「あ……うん」

　恭二はこくんと頷き、笑った。

「大丈夫、順位は学校行ってたころを維持してるよ。問題ありません、教官どの」

「よろしい」

　冗談めかして答え、詩乃も微笑んだ。

「新川君のログイン時間、すっごいからさ。ちょっと心配だったんだよ。いつ入ってもオンラインなんだもん」

「昼間はちゃんと勉強してるよ。メリハリが大事なんだよ」

「あんだけ潜ってれば、稼いでるんじゃないのー？」

「……そんなこと、無いって。ＡＧＩ型じゃあもうソロ狩りは無理だしさ……」

　また会話の雲行きが怪しくなってきたので、詩乃は慌てて口をんだ。

「まあ、接続料さえ稼げれば充分だよね。……ごめん、私、そろそろ帰らないと」

「あ、そっか。朝田さんはご飯も自分で作ってるんだもんね。また今度、ごになりたいな」

「あ、う、うん、いいよ。そのうち……もうちょっと腕が上がったらね」

　詩乃は再び慌てる。

　一度だけ、恭二を自宅に招いて自作の夕食を振舞ったことがあった。食事そのものは楽しかったのだが、テーブルに向かい合って食後のお茶を飲んでいるうちにだんだん恭二の目つきが熱っぽくなってきて、いささか冷や汗をかいたものだ。超のつくネットゲーマーかつ銃器マニアであっても、男の子は男の子であり、一人暮らしの自宅に招待したのは少々軽率だったと反省した。

　恭二のことは嫌いではない。彼との会話は、現実世界では詩乃がほっとできるごくごくわずかな瞬間のひとつだ。しかし今は、それ以上のことは考えれない。自分の心の奥底を黒く塗りつぶす、あの記憶に打ち勝つまでは。

「ごちそうさま。それに……ほんとにありがとう、助けてくれて。かっこよかったよ」

　立ち上がりながら詩乃が言うと、恭二はを崩して頭を搔いた。

「いつでも、守ってあげられればいいんだけど。その……あのさ、学校の帰りとか、迎えに……行こうか？」

「う、ううん、大丈夫。私も、強くならないとだからさ」

　そう応じて詩乃が笑うと、恭二はもう一度、しそうに少しを伏せた。

　長年染み込んだ雨水によってまだらな色に染まるコンクリートの階段を上る。

　二つめのドアが、詩乃が独りで暮らすアパートの部屋だ。スカートのポケットから鍵を取り出し、旧式の電子に差し込む。小さなパネルから四の暗証番号を打ち込んで鍵をると、がちんという金属音が重く響いた。

　ひんやり薄暗い玄関に入り、後ろ手にドアを閉める。

　ロックノブを回し、確認のアラームを聞いてから、詩乃は無声音で「ただいま」と呟いた。もちろん、応じる人はいない。

　マットを敷いたりからは、細長いスペースが三メートルほど伸びている。右側にユニットバスのドア、左側に小さなキッチン。

　スーパーで買ってきた野菜や豆腐などをシンク横の冷蔵庫に収めてから奥の六畳間に入ると、詩乃はほっと息をついた。カーテンをかして入り込む最後の残照を頼りに壁のスイッチに触れ、照明をける。

　飾り気のある部屋ではない。フローリング風のクッションタイル張りの床、カーテンはアイボリーの無地。右手の壁に面して置かれた黒のパイプベッドと、その奥に並ぶ同じくマットブラックのライティングデスク、反対側の壁際に据えられた小振りのチェストと書棚、姿見だけが主だった調度だ。

　通学を床に置き、白のマフラーをほどく。コートを脱いでハンガーに掛け、マフラーと一緒に狭いクローゼットの中へ。黒に近い色のセーラー服から光沢のあるダークグリーンのスカーフを引き抜き、左脇のジッパーを下ろしたところで詩乃は手を止め、ライティングデスクに視線を向けた。

　今日の放課後はなかなかに波乱含みだったが、遠藤たちの脅しに正面から立ち向かえたことが、ささやかな自信を胸の奥に残していた。パニックに陥りかけたのは事実だが、それでも逃げ出さずに立っていられたのだ。

　それに二日前、ＧＧＯ内で、かつてまみえた中で最強の敵を死闘の末に撃破したことも、一際強い火力で心を鍛えてくれたような気がした。

　あのベヒモスという男は、パーティー戦では無敵と言われているのだと新川恭二が教えてくれた。その伝説も決して大げさではないと思えるだけの、凄まじいプレッシャーを男は放っていた。戦闘中、詩乃／シノンは何度となく敗北、死を覚悟させられたが――しかし最後には、勝利を力ずくでもぎ取ったのだ。

　もしかしたら……。

　もしかしたら、今ならば。あの記憶と正面から向き合い、ねじ伏せることができるかもしれない。

　詩乃は動きを止めたまま、じっとデスクのをみ続けた。

　数十秒後、右手に持ったままだったスカーフをベッドの上に放り投げて、足早にデスクへと歩み寄った。

　数回深く呼吸して、背骨のあたりをい回るえを追い払う。

　三段目の抽斗の取っ手に指をかけ、ゆっくりと引き開けた。

　中には、筆記用具などを分類して収めた小さなボックスが並んでいる。取っ手が徐々に引かれるにつれ、その奥がわになっていく。やがてボックスの列が途切れると、ついに《それ》が姿を現した。鈍いブラックに輝く、小さな――おもちゃ。

　プラスチック製のモデルガンだ。だが造りは非常にで、細かいヘアライン仕上げの施された表面などは金属にしか見えない。

　その姿を見ただけで、加速し始めたを抑え込もうとしながら、詩乃は右手を伸ばした。恐る恐る銃のグリップに触れ、握り、持ち上げる。ずしりと重い手え。部屋の冷気を吸って凍るように冷たい。

　このモデルガンは、現実世界に存在する拳銃のコピーではない。グリップはエルゴノミクス的曲線で構成され、大型のトリガーガードのすぐ上部に大径の銃口が突き出ている。ブルパップ式とでも言うのか、放熱孔の開いた無骨な機関部は、グリップのやや後方上部に位置している。

　銃の名は《プロキオンＳＬ》、ガンゲイル・オンラインに登場する光学銃だ。カテゴリー的にはハンドガンながらもフルオート射撃モードを有し、対モンスター戦闘用のサイドアームとして人気が高い。

　シノンもグロッケンの街の保管ルームに一丁所持しているが、現実の詩乃が持つこれは、自分で購入したわけではない。そもそも市販しているものではないらしい。

　二ヶ月前のバレット・オブ・バレッツ本大会に出場し、二十二位に敗れてから数日後のことだった。詩乃のゲームアカウントに、ＧＧＯの運営体である《ザスカー》なる企業から英文のメールが届いた。

　苦労して内容を読み取ったところ、どうやらＢｏＢの参加賞品として、ゲーム内で賞金もしくはアイテムを受け取るか、現実世界でプロキオンＳＬのモデルガンを受け取るか選択せよ、という内容のようだった。

　現実世界でおもちゃとはいえ銃などが送られてきてはらない、と即座にゲーム内での賞金を選ぼうと思ったのだが、そこで詩乃はふと考えた。

　ＧＧＯにおける《》の効果を確認するには、いつか現実世界で銃の模型に触ってみる必要がある。かと言って、玩具店等にいてモデルガンを購入するのは心理的ハードルが多すぎるし、恭二に頼めばとして貸してくれるだろうが、受け取ったその場で発作を起こす可能性を考えるとそれもわれた。ネット通販が一番現実的だったが、ネットショップで銃の画像をあれこれ見るのでさえ気が重く、実行に移せないでいたのだ。もちろん、金銭的な問題もあるにはあったが。

　ＧＧＯ運営企業が、無料でモデルガンを送ってくれるというなら、それはそれで好都合なのかもしれない――と、それでも期限ぎりぎりまで悩んだ挙句、詩乃は現実世界で参加賞を受け取ることを選択したのだった。

　一週間後、ずしりと重たいが届いた。

　開封する決意を固めるのに、更に二週間を要した。

　しかし、その時引き起こされた反応は、期待を大いに裏切るものだった。詩乃はそれを机にの奥深くに押し込み、記憶すらも頭の片隅に押しやってきたのだ。

　そして今――詩乃は再び、プロキオンを手に取っている。

　銃の冷気が、右のから二の腕、肩を伝わって、体の奥底まで忍び込んでくるかのようだ。樹脂製の模型なのに途方もなく重い。シノンなら指先で軽々と振り回せるはずのハンドガンが、詩乃には鎖で地面に固定されているとしか思えない。

　掌から体温が奪われていくにつれ、銃は逆に熱を帯び始める。冷や汗で湿ったその生温かさの中に、詩乃は誰か他人の気配を感じる。

　誰の？

　それは……あの……男の。

　もはや鼓動は抑えようもなく速まり、冷えた血液がごうごうと音を立てて全身を駆け巡る。見当識が薄れていく。足元の床が傾き、固さを失う。

　しかし、詩乃は銃の黒い輝きから眼を離せない。至近距離から食い入るように覗き込む。

　耳鳴りがする。それはやがて、甲高い絶叫へと変わる。幼い少女の、純粋な恐怖にれた叫び声。

　悲鳴を上げているのは、誰？

　それは…………私。

　詩乃は、父親の顔を知らない。

　現実世界における父親の記憶がないという意味だけではない。文字通り、写真や映像においてすら、父親なる人物を見たことがないのだ。

　父親が交通事故で他界したのは、詩乃がまだ二歳にもならない頃だったらしい。

　その日、父親と母親、詩乃の親子三人は、年末を母方の実家で過ごすため、自動車で東北のとある県境、山の斜面に沿って伸びる片側一車線の旧道を走っていた。東京を出るのが遅れ、時刻は夜十一時を回っていたそうだ。

　事故の原因は、現場のスリップから、カーブを曲がりきれず対向車線に膨らんできたトラックだと断定されている。

　トラックの運転手は、フロントガラスを突き破って路面へと投げ出されてほぼ即死。

　右側面を直撃された小型車は、ガードレールを越えて山の斜面に転落し、二本の樹に引っかかって停止した。その時点は、運転していた父親は意識不明の重傷ではあったものの即死には至らず、助手席の母親も左の単純骨折のみ、後部座席のチャイルドシートでしっかりとベルトを掛けられていた幼い詩乃はほぼ無傷だった。しかし、当時の記憶はひとかけらも残っていない。

　不運だったのは、その道が地元でもほとんど使用されておらず、特に深夜ともなればまったく往来が途絶え、また衝突のショックで車内の携帯端末が破損したことだった。

　翌早朝、旧道を通りがかったドライバーが事故に気付いて通報したのは六時間後だった。

　その間、詩乃の母親は、内出血によってゆっくりと冷たい死に至っていく父親を隣でただ見ていることしかできなかった。

　その時、母親の心の奥まった部分が、少しだけ壊れてしまったのだった。

　事故後、母の時間は、父と知り合う以前の十代の頃にまで巻き戻ってしまった。母と詩乃は東京の家を出て母方の実家に身を寄せたのだが、母は父の遺品、ことに写真や動画はほぼ全てを処分し、一切思い出を語ろうとはしなかった。

　母親は、ひたすらに平穏と静寂のみを欲する。の少女の如き生活を送るようになった。詩乃のことをどう認識しているのかは、事故後十五年が経つ現在でもはっきりとはわからない。あるいは妹のように思っているのかもしれないが、それでも、幸い母親は事故後も変わらず詩乃を深く愛してくれた。夜ごと絵本を読み、子守歌を歌ってくれたのを覚えている。

　だから、詩乃の記憶にある母親は常に、儚く傷つきやすい少女のような姿だ。自然、物心がつくにつれ、詩乃は自分がしっかりしなければと思うようになった。自分が、母親を守らなければ、と。

　祖父母の外出中、しつこい訪問販売の男が玄関の居座って、母親がえてしまったことがあった。代わりに九歳の詩乃が、出て行かないと警察を呼ぶ、と言って追い返した。

　詩乃にとって、外の世界は常に、母親との静かな生活をかす要素に満ちた存在だった。守らなければ、守らなければ、とそれだけを考えていた。

　だから――詩乃は思うのだ。あの事件が起きたのは、ある意味では必然だったと。詩乃がひたすらに遠ざけようとした外世界の、悪意に満ちた揺り返しではなかったか、と。

　十一歳、小学五年生になった詩乃は、あまり外で遊ばず、学校からまっすぐ帰ってきては図書館で借りた本を読むのが日課だった。成績は良かったが友達が少なかった。外部からの干渉に異様に敏感で、詩乃の上履きを隠すというない悪戯をした男子を本気で殴り、鼻血を出させたこともあった。

　二学期に入ってすぐの、ある土曜日の午後。

　詩乃と母親は、連れ立って近所の小さな郵便局に出かけた。客は、他には一人もいなかった。

　母親は窓口に書類を出している間、詩乃は局内のベンチに腰掛け、足をぶらぶらさせながら持参した本を読んでいた。タイトルは覚えていない。

　キィ、とドアが鳴る音がして顔を上げると、一人の男が入ってくるのが見えた。灰色っぽい服装で、片手にボストンバッグを下げた。せた中年男性だった。

　男は入り口で足を止め、局内をぐるりと見回した。詩乃と、一瞬眼が合った。瞳の色が妙だな、と思った。黄ばんだ白目の中央で、深い穴のように真っ黒な瞳がせわしなく動いていた。今にして思えば、あれはが異常に拡張していたのだろう。男が、郵便局に現れる直前にを注射していたのがその後判明している。

　詩乃がしむ間もなく、男は足早に窓口へと向かった。

《振替・貯蓄》の窓口で、何かの手続きをしていた詩乃の母親の右腕を、男はいきなり摑んで引っ張った。そのまま左手で激しく突き飛ばす。母親は声も出せずに倒れ込み、ショックのあまり眼を見開いて凍りついた。

　詩乃はに立ち上がっていた。愛する母親が受けた理不尽な暴力に、大声で抗議しようとした、その時。

　男はカウンターにどさっとボストンバッグを置き、中から何か黒いものを摑み出した。拳銃だと判ったのが、男がそれを右手で窓口にいた男性局員に突き付けた時だった。ピストル――おもちゃ――いや本物――強盗――!?　と、いくつもの単語が詩乃の意識を横切った。

「この鞄に、金を入れろ！」

　男が、れた声でいた。すぐさま続けて、

「両手を机に出せ！　警報ボタンを押すな！　お前らも動くな!!」

　拳銃を左右に動かし、奥にいた数人の局員をする。

　今すぐ局から走り出て、外に助けを呼ぶべきか、と詩乃は考えた。しかし床に倒れたままの母親を残していくことはできなかった。

　しているうちに、男が再び叫んだ。

「早く金を入れろ!!　あるだけ全部だ!!　早くしろ!!」

　窓口の男性局員が、顔をらせながらも、右手で五センチほどの厚さの札束を差し出した――

　その瞬間だった。

　局内の空気が、一瞬膨らんだような気がした。両耳がジンとれ、それが高い破裂音のせいだと気付くのには時間がかかった。次いで、きん、と小さな金属音が続き、何かが壁に跳ね返って詩乃の足元に転がってきた。金色の、細い金属の筒だった。

　再び顔を上げると、カウンターの向こうで、男性局員が眼を丸くして胸元を両手で押さえていた。ネクタイの下で、白いワイシャツにわずかに赤いみが見えた。と思った時には、局員が椅子ごと後方に傾き、傍らの書類キャビネットを道連れにして倒れた。

「ボタンを押すなと言ったろうがぁ!!」

　男の声は、甲高く裏返っていた。銃に握った右手がぶるぶると震えているのが見えた。花火とよく似たいが鼻をついた。

「おい、お前！　こっちに来て金を詰めろ!!」

　男が拳銃を向けた先には、女性局員が二人固まって立ち尽くしていた。

「早く来い!!」

　男の声が鋭く響いたが、女性局員たちは首を細かく振るだけで、動こうとしなかった。強盗事件に対する訓練はしていたのだろうが、実際に放たれた弾丸はどんなマニュアルも防いではくれない。

　男は、ちのままにカウンター下部を何度も蹴り飛ばしてから、更にもう一人撃とうと考えたのか、拳銃を握った右腕を再び持ち上げた。高い悲鳴を上げて、女性局員たちがしゃがみ込んだ。

　だがそこで、男は体を半回転させ、客用スペースに向き直った。

「早くしねえともう一人撃つぞ!!　撃つぞォォォ!!」

　男が拳銃で狙ったのは――床に倒れ、宙にろな視線を向ける詩乃の母親だった。

　眼前で進行中の事件による過大な負荷で、母親は身動きもできないようだった。瞬間的に、詩乃は考えた。

　――私が、お母さんを、守らなくては。

　幼児期から常にそう思い続けてきた詩乃の信念、意志の力が詩乃の体を動かした。

　本を放り捨てて飛び出した詩乃は、拳銃を握る男の右手首にしがみつき、咄嗟に嚙み付いた。子供の鋭い歯は容易に男のに食い込んだ。

「あぁぁ!?」

　男は驚愕の声を上げ、右手を詩乃ごとブンと振り回した。詩乃の体はカウンターの側面に叩きつけられ、その時同時に乳歯が二本抜けたが、まるで気付かなかった。目の前に、男の手から滑り落ちた黒い拳銃が転がってきたからだ。詩乃は無我夢中でそれを拾い上げた。

　重かった。

　ずしりと両腕に響く、金属の重み。縦にラインの入ったグリップは直前までそれを握っていた男の汗でじっとりと湿り、男の体温で生き物のように熱を持っていた。

　何をするための道具なのか、という程度の知識は当時の詩乃にもあった。これを使えば、恐ろしい男を止められる。そんな考えに導かれ、詩乃は見よう見まねで拳銃を構えると、両手の人差し指を引き金に掛けて、男へと向けた。

　その途端、奇声を上げながら男が詩乃に飛び掛かり、拳銃から詩乃の手をもぎ離そうとするかのように、自分の両手で詩乃の両手首をきつく握った。

　そのことが詩乃にとって良かったのか、あるいはそうでなかったのかは今でも判らない。だが単に事実として、男は自分に向けられた銃のホールドを自ら助ける結果となった。

　今では、詩乃はその強盗事件に用いられた拳銃――《あの銃》について、充分以上の知識を得ている。

　一九三三年、つまり九十年以上も昔に、ソビエト陸軍が《トカレフ・ＴＴ３３》という拳銃を正式採用した。やがて中国がコピー生産し、《五四式・》と称した。それが、あの銃の名前だ。

　三十口径、つまり七・六二ミリ径のを使用する。後発のハンドガンの主流である九ミリと比べて小口径だが、火薬量は多い。そのため弾の初速は音速を超え、拳銃の中でも最大級の貫通力を有する。

　ゆえに反動も大きく、ソ連では一九五〇年代に、小型化された九ミリ弾使用の《マカロフ》がトカレフに変わって正式採用された経緯がある。

　そのような拳銃を、十一歳の子供がまともに狙って撃てるはずはなかった。だが、男に強く手首を握られ、銃を奪われる、と思った瞬間、詩乃は反射的に引き金を絞っていた。

　猛烈な衝撃が両手から、肩へと伝わったが、銃口を見当違いの方に向けるはずの反動エネルギーは、ほぼ男の両手に吸収された。再び空気が熱く弾けた。

　男はしゃっくりのような声を出し、詩乃から手を離すと、そのままよろよろと数歩後退した。

　男の、柄の入ったグレーのシャツの腹部に、赤黒い円が急速に広がりつつあった。

「あぁ……ああぁぁ!!」

　高い声を漏らしながら男は両手で腹を押さえた。太い血管が傷ついたのか、その指の間から、一筋の血液がった。

　ただ男は倒れなかった。の使用する小口径フルメタル・ジャケット弾は即座に人体を貫通するために、ストッピングパワー自体は低いのだ。

　奇声を上げながら、男は血にれた両手を詩乃に向け、再び摑みかかろうとした。傷口から飛散した血液が、詩乃の両手に降りかかった。

　両手がするように震え、再びトリガーが引かれた。

　今度こそ拳銃は盛大に跳ね上がり、と両肩に激痛が走った。体ごと後ろに弾かれ、背中がカウンターに激突して息が詰まった。発射音はもうあまり感じなかった。

　二発目の弾は、男の右鎖骨の下に命中し、再び貫通して背後の壁に突き刺さった。男はよろけ、自ら流した血に足を滑らせてリノリウムの床に倒れた。

「がああああっ!!」

　だがまだ男の動きは止まらない。怒りのを上げ、再び立とうと両手を床についた。

　詩乃は恐慌に陥った。今度こそ、確実に男を《停止》させないと、自分と母親は絶対に殺されると思った。

　れるような両腕両肩の痛みを無視し、二歩前に進んだ。けの姿勢で上体を二十センチほど起こしつつあった男の体の真ん中に、詩乃は銃口を向けた。

　三度目の射撃で、右肩がした。今度は反動で吹き飛ぶ体を支えるものがなく、詩乃は床にもんどりうって倒れた。それでも拳銃から手は離さなかった。

　前と同じく暴れた拳銃から発射された弾丸は、狙いを大きくれ、数十センチ上方――

　男の顔のほぼ中央に命中していた。ごつんと音を立てて、男の頭が床に落下した。もう、動いても叫んでもいなかった。

　詩乃は必死に体を起こし、男の動きが止まっているのを確認した。

　――守った。

　何よりもまず、そう思った。自分は、母親を守ることができた。

　詩乃は顔を動かし、数メートル離れた床に倒れたままの母親に視線を向けた。そして、この世で誰よりも愛する母親の両眼に――

　明らかに自分へと向けられる、明らかな恐怖とえの色を見た。

　詩乃は自分の手に視線を落とした。いまだしっかりと拳銃のグリップを握ったままの両手は、どろりとした赤黒い液体のを浴びていた。

　詩乃は口を開き、ようやく高い悲鳴を上げはじめた。

「ぁぁぁぁ…………!!」

　喉の奥から細い叫び声を絞り出しながら、詩乃は両手で握ったプロキオンＳＬを凝視し続けた。両手の甲から指の間へとぬるりとる血が見える。何度瞬きしても消えない。ぽたり、ぽたりと粘っこいを足元に垂らしている。

　突然、両眼から液体が溢れ出した。視界がぐにゃりとみ、モデルガンの黒い輝きが全てを覆っていく。

　闇の奥に、あの男の顔が見えた。

　発射された三発目の弾丸が、その顔に向かって飛んでいく。弾が当たっても、傷は驚くほど小さく、ただののように見える。しかし直後、頭の後ろ側に、赤い霧が濃く漂う。顔から一切の表情と生気が抜け落ちる。

　だが、不意に左眼だけがぎろりと動き、底なし穴のようなが詩乃を見る。

　まっすぐに、詩乃の眼を見る。

「ぁ……ぁ…………っ」

　当然、喉の奥に舌がりつき、呼吸が出来なくなった。同時に胃が激しく収縮するのを感じた。

　詩乃は歯を食い縛り、全精神力を振り絞ってプロキオンを床に投げ落とした。すぐさまよろよろとキッチンに走り、ユニットバスのドアノブを冷や汗に濡れた右手で回す。

　便器のを跳ね上げ、み込むと同時に、熱い液体が胃の底から迸った。体をり、させ、何度も何度も、体内にあるもの全てを排出するかのようにした。

　ようやく胃の収縮が収まった時には、詩乃はすっかり力尽きていた。

　左手を伸ばして、タンクの水洗ノブを押す。苦労して立ち上がり、眼鏡を外すと、洗面台の切れるように冷たい水で両手と顔を何度も、何度も洗う。

　最後に口をすすぎ、棚から清潔なタオルを取って顔をきながらユニットバスを出た。思考能力は完全にしていた。

　ない足で、部屋に戻る。

　なるべく視線を向けないようにして、手に持ったタオルを、床に転がるモデルガンに覆い被せた。布越しに持ち上げ、すぐさま開いたままのデスクのの奥に放り込む。ばしんと音を立てて抽斗を閉め、今度こそ精根尽き果てて詩乃はベッドにうつ伏せに倒れた。

　濡れた前髪から落ちた雫が、頬を流れる涙と混ざり、布団に染み込んでいった。いつしか、小声で同じことを、繰り返し繰り返し呟いていた。

「助けて……誰か……たすけて……たすけて……誰か…………」

　事件直後から数日間の記憶は、あまり鮮明ではない。

　の制服を着た大人たちが緊張した口調で、銃をこちらに渡しなさい、と言った時、指がってどうしてもがれようとしなかったこと。

　くるくる回るたくさんの赤いランプ。風に揺れる黄色いテープ。その向こうから浴びせられた白い光に眼がんだこと。

　パトカーに乗せられてからようやく右肩の痛みに気付き、恐る恐るそれを訴えると、警官は慌てて詩乃を救急車に乗せ替えたこと――などを断片的に憶えている。

　病院のベッドでは、二人の婦人警官に、事件のことを繰り返しかれた。お母さんに会いたい、と何回も言ったのだが、その希望がえられたのはかなり後のことだった。

　詩乃は三日ほどで退院し、祖父母の待つ家に帰ったのだが、母親の入院は一ヶ月以上に及んだ。事件以前の穏やかな日常が、同じ形で戻ってくることはもうなかった。

　マスコミ各社の自主規制により、事件の詳細がそのまま報道されることは回避された。郵便局拳銃強盗事件は被疑者死亡として送検され、公判も一切行われなかった。だが、地方の小さな市でのことだ。郵便局の中で起きたことはらさず――というよりも様々なのついたとなって、の火の如く街じゅうを駆け巡った。

　小学校での残された一年半、詩乃には《殺人者》を意味するありとあらゆる派生語が浴びせられ、中学に上がってからは徹底した無視がそれに取って代わった。

　だが、詩乃には、周囲の視線それ自体は大した問題ではなかった。もとより昔から、集団に属することへの興味は非常に薄かったのだ。

　しかし、事件が詩乃の心の中に残していった――、それは何年経とうとも一向にえることもなく、詩乃を苦しめ続けた。

　あれ以来、詩乃は、銃器の類するものを見るだけで事件の鮮明な記憶を呼び起こされ、なショック症状に襲われるようになってしまったのだ。過呼吸から全身の硬直、見当識の喪失、、い場合は失神へと至るその発作は、道端で子供の持っているの拳銃を目にした時などはもちろん、テレビ画面を通してすら容易に引き起こされた。

　ゆえに、詩乃はドラマ、映画のはほとんど見ることはできなくなってしまった。社会科の授業で用いられたビデオ教材のせいで発作を起こしたことも何度かある。比較的安全なのは小説で――それも大昔の文学作品に限定されたが――、中学時代の大部分は、図書室の薄暗い片隅で大判の全集本をって過ごしたようなものだ。

　中学を出たらどこか遠くで働きたいと祖父母に訴え、強硬に反対された時、ならせめて、か昔――詩乃が赤ん坊の頃に、父親と母親と三人で暮らしていたという東京の街にある高校に進学したいと詩乃は言った。常に付きまとう噂と好奇の視線がない場所に行きたい、という気持ちも当然あったが、それ以上に、この街で暮らしているかぎり、一生心の傷が癒えることはないだろうと確信したからだった。

　もちろん、詩乃の症状は典型的なと診断され、四年間で数え切れないほどのカウンセリングを受けた。処方された薬も素直に飲んだ。だが、不思議にどこか似通った笑みを浮かべた医師たちの言葉は、詩乃の心の表層をで、引っ搔くだけで、傷のある場所にさえ届くことはなかった。清潔な診察室で、彼らの「解るよ、辛かったね、大変だったね」という言葉を聞きながら、詩乃は心の中で、何度も同じフレーズを呟いていた。

　――なら、あなたは銃で誰かを殺したことがあるの？　と。

　今では、そういう自分の態度が信頼のをげ、治療を遠ざけていたと反省している。とはいえ、それは今でも詩乃の偽らざる本音だ。自分のしたことが善なのか悪なのか――、それをはっきり断じてもらうことだけを、たぶん詩乃は望んでいたのだ。勿論、答えられる医者などいようはずもなかったが。

　しかし、どれほど記憶と発作に苦しめられようと、自ら死を選ぼうと思ったことは一度もなかった。

　あの男に向けて引き金を引いたことに対する後悔はない。母親に銃を向けられた時、ああする以外の選択肢は詩乃には有り得なかった。たとえ事件の瞬間に戻れたとしても、やはり同じことをするだろう。

　だが、詩乃が自殺という逃げ道を選べば、男も浮かばれまい、とは思う。

　だから、強くなりたかった。あの状況ではあの行動に出るのが当然、と言えるだけの強さが欲しかった。戦場で、容赦なく敵を倒していく女兵士のような。一人で暮らしてみたいと思ったのは、そのせいもある。

　中学を卒業して街を出るとき、別れの言葉を告げたのは、祖父と祖母、それに詩乃のことをいつまでも事件以前の幼い子供と認識し、抱きしめ、髪を撫でてくれる母親だけだった。

　詩乃はこの、空気はいがらっぽく、水はく、なんでも高価な街に移り住み。

　そして、と、ＶＲＭＭＯＲＰＧ――《ガンゲイル・オンライン》に出会った。

　ようやく呼吸とが落ち着き始め、詩乃は薄くを持ち上げた。

　ベッドにうつ伏せになり、左頬を枕に乗せた詩乃の視線の先に、縦長の姿見があった。

　鏡の中で、額に濡れた髪を貼り付かせた少女がこちらを見返している。少々せすぎて、眼ばかりが大きく見える。鼻は小さく、唇も厚みに欠ける。総じて、栄養の足りていない子猫のような印象だ。

　荒野の狙撃手シノンとは、体格と、顔の両脇で細く結わえたショートという髪型だけは共通しているが、それ以外は何一つ似通うところはない。彼女は、言わばな山猫だ。

　極度にえながら初めてＧＧＯにログインし、訳も解らぬまま戦場に連れて行かれた時、詩乃は思わぬ発見をした。現実世界の日本とはかけ離れた、あまりにも異世界然とした風景のおかげか――その世界でいかなる銃器に触れようと、いや、それで他のプレイヤーを撃ち倒しさえしても、多少の緊張を覚える程度であのまわしい発作は起こさなかったのだ。

　詩乃は、とうとうあの記憶を乗り越える方法を見つけた、と確信した。実際、ＧＧＯをプレイするようになってから、銃器の写真を見る程度ならば発作は起こさなくなってきたし、恭二とＧＧＯ中の武器の話もできるようになった。

　いや、それだけではない。半年前に手に入れた《ヘカートⅡ》という名の巨大かつ凶暴なライフルを、今の詩乃は愛してすらいる。同年代の女の子がペットやぬいぐるみにそうするように、滑らかなバレルを撫でていると落ち着くし、丸みを帯びたストックに頬を預ければ温もりを感じる。

　この子と一緒に仮想の荒野で戦い続ければ、いつかは傷ががり、恐怖は消え去る。そう信じて、無数のモンスター、無数のプレイヤーを必殺の銃弾で吹き飛ばしてきた。

　だが。

　――ほんとうに？　ほんとうに、それで、いいの？

　心の中で問い返す声がする。

　シノンはすでに、数万のＧＧＯプレイヤー中で上位三十人に入る存在だ。実戦レベルで使える者は他にいないとさえ言われるアンチマテリアル・ライフルを自在に操り、スコープにえた者には誰であれ確実な死を与えることができる。氷の心を持つ戦士、かつて詩乃がなりたいと願った存在そのものと言っても過言ではない。

　なのに――現実の詩乃は、相変わらずモデルガン一つ手に持つことさえできない。

　本当に……本当に、これでいいの……？

　鏡の中の少女の瞳は、眼鏡の奥で途方に暮れたように揺らいでいる。

　去年から掛けているこの眼鏡のレンズに度は入っていない。視力具ではなく《防具》だからだ。なＮＸＴポリマー製レンズは、たとえ銃弾が命中しても割れることはない――とリーフレットには書いてあった。本当かどうかは判らないが、生活費を切り詰めて作った眼鏡は、詩乃にささやかな安心感を与えてくれた。今では、外に出る時は常に掛けていないと落ち着かない。

　だが、それはつまり、ちっぽけな装身具に依存しているということでもある。

　きつく眼をつぶると、再び弱々しい問いが胸に生まれる。

　誰か……教えて……。私、どうすれば、いいの……？

　――誰も、助けてくれはしない!!

　弱気な声をねけるように心の中で叫び、詩乃は体を起こした。視線の先、ベッド脇の小テーブル上に、アミュスフィアの銀色の円環が光っている。

　まだ足りないだけ。問題はそれだけだ。

　シノンよりも強いガンナーたちが、あの世界にあと二十一人存在する。そいつらを全員打ち砕いてに送り込み、ただ一人の最強者として荒野に君臨した、その時こそ――

　詩乃はシノンと完全に一体化し、この世界に於いても本当の強さを手に入れられるはずだ。《あの男》と《あの銃》は、今までシノンがしたのターゲットの中に埋没し、二度と記憶に浮かび上がってくることはない。

　詩乃はエアコンのリモコンを拾い上げ、弱い暖房を入れると、制服の上着を一気に脱ぎ捨てた。スカートのホックも外して足から抜き、まとめて床に放り投げる。最後に淡い水色の眼鏡を外し、ライティングデスクの端にそっと置く。

　ベッドにまっすぐ横たわり、アミュスフィアを取り上げると頭に被った。

　手探りで電源を入れると、スタンバイ完了を告げるかすかな電子音が鳴るや否や、口を開く。

「リンク・スタート」

　呟いた声は、泣き疲れた子供のように、頼りなくれていた。

　　　５

　ブラウザが起動すると同時に、スタートアップＵＲＬに設定されたサイトに自動でアクセスが行われ、幾つものタブ・ウインドウが重層的に表示された。

　全てがガンゲイル・オンライン関連で、特に《死銃》についての情報を扱っている所は重点的に集められている。

《彼》は右手の指先で３Ｄマウスを操り、現在最も注目しているサイトをアクティブにした。トップページには《死銃情報まとめサイト》とあり、死銃の文字だけが赤く色づけされている。

　まず履歴に眼をやり、今夜はまだ管理人による更新がないのを確認すると、掲示板に移動。前夜にチャックした時から幾つかの書き込みがあったらしく、記事ツリーのあちこちに《New》のマークが点滅している。順に読んでいくことにする。

　――現れないね、ゼクシードとたらこ。もうじき一ヶ月？　いいかげんアカウント切れるんじゃないの？　誰かリアルで連絡とれる奴、情報あったら投下ＰＬＺ

　――だからいないって。スコードロンのメンバーも誰もリアル連絡先知らないっつってんだろ？　つかＧＧＯで個人情報漏らす奴はアホだろ

　――死銃に撃たれた日付けと時間はわかってるんですから、仮にほんとに二人が死んだとすれば、ちょうどその時間に死んだＶＲＭＭＯのプレイヤーがいなかったか調べれば判るのでは？

　――話題ループさせんな、過去ログ読め。一人暮らしだったら死んだって誰も気付かないし、警察に問い合わせても教えてくれないのは確認済み。ちなみにザスカーに英文メールで聞いても、ユーザーの個人情報に関してはなんたらっていう定型レスが来るだけ。

　――やっぱこれはアレでしょ。ゼクたんとたらこたんの引退記念ドッキリでしょ。お二人、そろそろ出てきてネタバラシしないと賞味期限切れますよ！

　――結局、誰かが自分のカラダで検証するしかないと思うんです。というわけで、明日二三三〇にグロッケン中央銀行前で赤いバラを胸に挿してお待ちしていますので、死銃さん私を撃ってください。

　――勇者登場！　でも死ぬ前に本名と住所してないと無意味でしょ

　――むしろどっかのネカフェから公開ダイブでお願いします

　――…………

《彼》はたしく舌打ちした。マウスのホイールを回し、次のウインドウをアクティブに。だが、どこの掲示板や情報サイトでも、《彼》の望む種類の記事や書き込みを見つけることはできなかった。

　当初の予定では、二人目に死を与えた時点で、《死銃》の力は本物なのではないか、という噂がネットを駆け巡り、ＧＧＯプレイヤーたちは自分が次のターゲットとされるのではないかという恐怖にえ、ゲームから引退するものが相次ぐ――ということになっていた。

　しかし現実には、愚かなネットゲーマーたちはだ《死銃》の与える真の恐怖に気付かず、冗談めかしたやり取りに終始している。ＧＧＯのユーザー・アカウント総数もほとんど減っていないようだ。

　やはり、現実世界で《ゼクシード》と《薄塩たらこ》の死がまったく報道されなかったのが計算外だった。どうやら、都内に限っても一日に相当数の変死事件があり、明らかな犯罪性が見られないものはニュースにならないようなのだ。

　もちろん、《彼》は自ら銃撃した二人の心臓が現実世界で確実に停止し、死亡に至っていることを知っている。それこそが《死銃》の持つ力なのだから。

　その情報を、まとめサイトの掲示板に書き込みたいという誘惑は強烈だった。だが具体的なソースを提示するのは《彼》にしても困難だし、そもそもそんなことをすれば《死銃》の伝説性が薄れてしまう。《死銃》はあの荒野に降臨した最初で最後の絶対的強者、運営体の力すらする、本物の死神なのだから。

　――まあ、いい。

《彼》は深く息をつき、気持ちを落ち着かせた。

　もうすぐ、第三回の《バレット・オブ・バレッツ》が開催される。《死銃》はその本大会において、更に二人、可能なら三人の命を消滅させる予定になっている。もちろん予選はあの銃の力を使わずに突破しなくてはならないが、その日のために一日二十時間に及ぶログインで鍛え上げたステータスがあれば、充分可能なはずだ。

　ＢｏＢの注目度は絶大だ。《ＭＭＯストリーム》が放送するリアルタイム中継番組は、ＧＧＯだけでなく他のＶＲＭＭＯのプレイヤーも大勢視聴する。その大舞台で名実ともに最強者として君臨するだけでなく、あの銃で撃たれた者がまたしてもネットから姿を消せば、もう《死銃》の力を疑う愚か者はいないだろう。

　それだけの注目を浴びてしまえば、現在のアカウントはさすがにもう使えなくなるだろうが、構うことはない。あの銃さえあれば、新しい《死銃》が荒野に降り立つのは容易だ。

　そして更に殺す。予定では、の数は七人にまで増えるはずだ。その頃にはもう引退するプレイヤーが続出し、やがてはガンゲイル・オンラインというタイトルそのものが死に至るだろう。

　かくて《死銃》は伝説となる。

　かのわれたデスゲーム、《ソードアード・オンライン》が生み出した死者の数には到底及ばないが、あれは単なる狂人が、電子レンジでユーザーの脳をでてまわったに過ぎない。

《死銃》の力は、そんな低次元のものではないのだ。仮想世界で放たれた銃弾が、現実の心臓を止める。その秘密を理解できるものは、《彼》とその半身以外にはいない。《死銃》こそが最強者。ＳＡＯをクリアしたと噂される《黒の剣士》など問題にならない。全ＶＲＭＭＯを通じての真のトッププレイヤーになれる時が、もうすぐ来る。

　絶対の力――伝説の魔王――最強――最強――最強――……

《彼》はいつしか、右手にマウスを握りさんばかりの力を込めていたことに気付き、息を荒げながら肩の力を抜いた。

　そうなる日が待ち遠しい。その伝説さえ手にできれば、こんな下らない世界にはもう用はない。《彼》をわせる愚鈍な連中とも永遠におさらばだ。

　ブラウザ上に開いたタブ窓を全て閉じると、《彼》は新たにひとつのローカルＨＴＭＬファイルを呼び出した。

　縦に七枚の顔写真――ＧＧＯ内で撮影したスクリーンショットを切り抜いた画像が配置され、それぞれの右側に名前や武装等の情報が記されている。一番上の《ゼクシード》と、その下の《薄塩たらこ》の写真は色調を黒く落とされ、上から血の色のＸが刻印されている。

　これは、《死銃》のターゲットリスト、言い換えれば、あの銃のマガジンにされた《死の弾丸》の数だ。七人の誰もが、ＧＧＯで名の通った強力なプレイヤーである。

《彼》はゆっくりとファイルをスクロールし、一番下に配置されている写真を中央に表示させた。七人中、唯一の女性プレイヤーだ。

　右斜めのアングルで撮影されたスクリーンショット。淡いブルーのショートヘア、顔の両脇で結わえた房が細く流れて、頬のラインを半ば隠している。深く巻いたサンドイエローのマフラーのせいで口元が見えないのが残念だが、どこか猫を思わせる深い藍色の瞳だけでも充分に魅力的な輝きを放っている。

　右側に表示された名前は《シノン》。メインアームは対物狙撃ライフルの《ウルティマラティオ・ヘカートⅡ》。

《彼》は何度も、ゲーム内で直接彼女を見たことがあった。グロッケンのマーケット街で買い物をしている姿、公園のベンチで屋台売りのホットドックをっている姿、そして戦場で巨大なライフルを背に疾走する姿――。そのどれもが、所有欲を搔き立てずに置かないコケティッシュな魅力に満ちていた。彼女が笑顔を見せることはほとんどなく、瞳には常にある種の憂いが満ちているのだが、それもまた《彼》をきつけてやまない。

　このシノンという名の少女を《死銃》のターゲットとすることに、《彼》は迷いを抱いていた。もし彼女が、ゲームの中だけにまらず、現実で身も心も《彼》のものとなってくれるなら――

　だが《彼》の半身、《死銃》のもう一方の腕は、彼女の死を望むだろう。シノンは、ＧＧＯでは冷酷なる狙撃手、冥界の女神として知らぬ者のいないほどの有名なプレイヤーだ。《死銃》伝説に捧げられる花として、彼女ほどしい存在はない。

　つるりとした光沢パネルの感触の中に、《彼》は確かに生身の少女の柔らかさと温かさを感じた。

　　　６

　ウインカーを出し、車体をリーンさせて、大きな門を通過する。

　途端、並木道の両側を歩く人たちの非難が集中した気がして、俺は慌ててバイクのスピードを落とした。

　エギルのつてで入手した一二五ＣＣ・２ストロークのタイ製おんぼろバイクは、電動スクーターが主流となりつつあるこの時代にあっては絶望的なまでの騒音を発し、直葉などは後ろに乗るたびに『うるさい・臭い・乗り心地悪い』と不満を爆発させている。その都度、このサウンドが解らないうちは風になれないぞと言ってしているのだが、俺も内心では、せめて排ガス規制後の４ストスクーターにしておくんだったかと後悔していなくもない。

　ことに、走っている場所がこのような、病院の敷地内である場合などは尚更だ。

　ロバの引く荷車のごとき速度でトロトロと並木道を進むと、前方に駐車場入り口が見えた。ほっとしながら乗り入れ、バイク置き場の端にマシンを停める。今時本物の鍵式イグニションキーを抜き、メットを脱ぐと、の寒風に乗ってかすかに消毒薬のいが感じられた。

　菊岡との高額ケーキ会談から一週間後の土曜日。

　ガンゲイル・オンラインにログインする場所の用意ができた、というメールに俺は重い腰を上げたのだが、指定された場所はどういう訳か、千代田区にある大きな都立病院だった。普段あまり東京都心には来ないが、道順に迷うことはなかった。なぜならこの病院に併設されたリハビリテーション・センターは、ＳＡＯから解放された俺が筋力回復のために入院した、まさにその場所だからだ。

　一ヶ月近くに及んだリハビリの後に退院してからも、検査だの何だので何度も通った道である。ここ半年近く訪れたことはなかったが、こうして見慣れた白い建物を見上げると、懐かしいような心細いような何とも微妙な感慨が浮かぶ。俺は軽く頭を振って感傷を振り落し、エントランス目指して歩き始めた。

　六日前の日曜、この病院からも間近い皇居の遊歩道で、に今回の一件を説明した時の会話が自然に脳裏によみがえる。

『……え、えええ!?　き……キリトくん、ＡＬＯ辞めちゃうの……!?』

　見開かれたアスナの瞳がたちまち潤み始めるのを見て、俺は慌てて首をぶんぶん左右に動かした。

『ち、違う違う！　ほんの数日だよ、すぐ再コンバートするよ！　じ、実は……ちょっと訳ありで、他のＶＲＭＭＯの様子見をしなきゃいけなくなって……』

　俺の補足に明日奈はようやく肩の力を抜き、今度はそうな色を両眼に浮かべた。

『様子見……？　それなら今までも新規アカウントで何度もやってるじゃない？　なんでコンバートまでしなきゃならないの？』

『それが、そのぉ……例の、総務省の、メガネの……』

　そして俺はたどたどしく、デートの場所が皇居だった理由の半分を占めるの呼び出しについて、一部を意図的に省きつつ説明をした。

　ちょうどゲートに着くあたりでひととおり話し終え、入場票を窓口に返しておに架かるに差し掛かったところで、アスナが実に複雑そうな顔で言った。

『菊岡さんの頼み事……なら、仕方ないのかもしれないけど……。わたし、なんだかあの人、全面的に信用していいのかなって感じが……凄くお世話になった人ではあるんだけどさ……』

『いやあ、俺もまったく同じ感想』

　そこで、二人同時に微苦笑。

　しかし明日奈はすぐに真剣な表情に戻り、きゅっと俺の手を握って、言った。

『……できるだけ、早く帰ってきてね。わたしたちの家は、たった一箇所なんだからね』

　俺は頷き、お濠の水面に視線を落として答えた。

『もちろん。すぐにＡＬＯに戻るよ。《ガンゲイル・オンライン》ってゲームの内情を、ちょっとリサーチするだけなんだからさ』

　――そう。

　俺は明日奈に、菊岡の依頼でＧＧＯにダイブする真の目的、つまり謎の力を持つ――かもしれない――プレイヤー《死銃》に接触するというミッションの核心については、一切伝えなかったのだ。言えばまず間違いなく俺を止めるか、あるいは一緒に潜ると言い出すだろうと思ったからだ。

　身勝手な言い分だが、俺はもう決して彼女を、わずかにも危険のいのする仮想世界に近づける気はない。

　もちろん、《死銃》の話は、九分九まで噂の産物だろうと俺も思っている。

　仮想世界から、現実の人間に死をもたらす。

　何度考えても、そんなことが可能とは信じられない。アミュスフィアというのは、つまるところ普通のテレビの延長線上にある機械に過ぎないのだ。《仮想世界》や《フルダイブ技術》というとまるでテクノロジーが生み出した魔法の如くと思われがちだが、その実体はあくまで単なる便利な道具であって、人間の肉体から魂を切り離して異世界に運ぶマジックアイテムなどでは決してない。

　しかし、残り一厘の可能性が、俺の足をこの場所に向けた。

　数ヶ月前、ＰＣのストレージ内にしていた古い電子雑誌を整理していたところ、ＳＡＯ稼働の直前に行われた、アーガス開発ディレクター・のショートインタビュー記事を発見した。そこで、生前のあの男はこう語っていた。

　――アインクラッドとは、、《具現化する世界》の略です。そこでプレイヤーの皆さんは、数々の夢が現実となるのを見るでしょう。剣、怪物、迷宮、そのようなゲーム的記号の具現化にまらず、プレイヤー自身をも変容させていくだけの力が、あの世界には存在します――。

　確かに俺は変わった。アスナも変わった。エギルモ、クラインも、リズやシリカたちだって、あの世界で過ごした二年間の間に、絶対に元に戻れないほどの人格変容を経験したはずだ。

　しかし、茅場の言う《変容》がそれに留まるものではなかったとしたら……？　ＶＲＭＭＯ作成パッケージ《ザ・シード）のおかげで、いまや無制限に増殖しつつあるの片隅において、仮想世界と現実世界という枠組みそれ自体を変化させ得る、何らかの因子が生まれたのだとしたら……？

　ういん、と音を立てて目の前で自動ドアが開き、押し寄せた暖かい空気と消毒薬の匂いが、俺のとりとめもない素行をった。

　どうあれ現実世界において二人の死者が出ている事実がある以上、《死銃》への接触に一切の危険が存在しないとは、俺も言い切れない。ＡＬＯに帰ったあと、明日奈にそれを打ち明ければ、きっと彼女は怒るだろう。だが、最後にはきっと解ってくれるはずだ。

　俺には――収束するはずだったアインクラッドの時間軸を断ち切り、《ザ・シード）パッケージを拡散させたキリトという人間には、こうする以外の選択肢はなかったのだ、ということを。

　まずトイレに寄ってから、プリントした菊岡のメールを頼りに、入院病棟三階の指定された病室へとり着いた。ドア脇のプレートに患者の名前はない。ノックの後、ドアを引き開けると――。

「おっす！　君、お久しぶり！」

　俺を出迎えたのは、長いリハビリ期間のあいだにお世話になった、顔見知りの女性看護師だった。

　ナースキャップの下の長い髪を一本の太い三つ編みにまとめ、その先端には小さな白いリボンが揺れる。薄いピンクのユニフォームに包まれた、女性にしてはかなりの長身は、入院患者にはいかにも目の毒だろうと思われるメリハリの効いたシルエットを備える。右胸に、《》と書かれた小さなネームプレート。

　にこにこと笑みを浮かべている小作りな顔は、まさに白衣の天使と呼ぶにふさわしいさだが、必要時応じていくらでもコワクなれることを知っている俺は硬直から一秒ほどで脱すると素早く頭を下げた。

「あ……ど、どうも、ごしてます」

　途端、安岐ナースはいきなりにゅっと両手を伸ばし、俺の肩から二の腕、わき腹あたりをぎゅうぎゅうと握った。

「わ……わぁ!?」

「おー、けっこう肉ついたねえ。でもまだまだ足りないよ、ちゃんと食べてる？」

「た、食べてます食べてます。というか、なんで安岐さんがここに……」

　部屋を見回すが、狭い個室には他の人の姿はない。

「あの眼鏡のお役人さんから話、聞いてるよー。なんでも、お役所のために仮想……ネットワーク？　の調査をするんだって？　まだ帰ってきて一年も経ってないのに、大変だねえ。それで、リハビリ中の桐ヶ谷君の担当だった私にぜひモニターのチェックをして欲しいとか言われて、今日はシフトから外れたんだ。師長とも話ついてるみたいでさ、さすが国家権力って感じだよねー。とりあえず、またしばらくよろしくね、桐ヶ谷君」

「あ……こ、こちらこそ……」

　なんだかまるで俺が美人に弱いとでも言わんがばかりの小ざかしい策だな菊岡あああァァーとこの場にいないエージェントを心中でりつつ、俺は笑顔で安岐ナースの差し出した手を握った。

「……で、その眼鏡の役人は来ていないんですか？」

「うん、外せない会議があるとか言ってた。伝言、預かってるよ」

　渡された茶封筒を開き、手書きの紙片を引っ張り出す。

『報告書はメールでいつものアドレスに頼む。諸経費は任務終了後、報酬とせて支払うので請求すること。追記――美人看護婦と個室で二人きりだからといって若い衝動を暴走させないように』

　一瞬でメモを封筒ごと握りつぶし、ライダージャケットのポケットへ放り込む。これをナースに読まれたらハラスメント行為でリアル告訴されかねない。

　しそうに瞬きする彼女に強張った笑顔を向け、俺は言った。

「あー……それじゃあ、早速ネットに接続しますんで……」

「あ、はいはい。準備できてます」

　案内されたジェルベッドの脇にはしいモニター機器が並び、ヘッドレストの上には真新しいアミュスフィアが銀色の輝きを放っている。

「じゃあ脱いで、桐ヶ谷君」

「は……はい!?」

「電極、貼るから。どうせ入院中に全部見ちゃったんだから赤くならなくてもいいよー」

「…………あの、上だけでいいですか」

　安岐ナースは一瞬考えてから、幸い首を縦に振った。観念してジャケットと長袖シャツを脱ぎ、ベッドに横になる。たちまち、心電図モニター用の電極が上半身の数箇所にぺたぺたと貼られていく。アミュスフィアにも心拍モニター機能があるにはあるのだが、万が一クラッキングによってその機能が殺されてしまったら、と菊岡はしたらしい。その一事を見ても、彼が一応は本気で俺の安全を気に掛けているのだということは解る。

「よし、これでＯＫ……っと」

　最後にモニタ機器のチェックとしたナースがこくんと頷くと、俺は手探りでアミュスフィアを取り上げ、頭に被ると電源を入れた。

「えと、それじゃあ……行ってきます。多分四、五時間くらい潜りっぱなしだと思いますが……」

「はーい。桐ヶ谷君のカラダはしっかり見てるから、安心して行ってらっしゃい」

「よ……よろしくお願いします……」

　なんでこんなことになってるのかなぁ……という疑問を今更のように抱きつつ、俺は眼を閉じた。

　同時に、耳元でチチッ、とスタンバイ完了を告げる電子音。

「リンク・スタート」

　コマンドを唱えると、見慣れた白い放射光が視界を塗りし、俺の意識を肉体から解き放っていった。

　世界に降り立った瞬間、かすかな違和感を覚えた。

　理由は、数秒後に判明した。空が一面、薄く赤味を帯びた黄色に染まっていたのだ。

《ガンゲイル・オンライン》内の時間は、現実と同期していると聞いていた。つまり、午後一時をいくらか回ったばかりの空は、先ほど病室の窓越しに見えていたのと同じ青であるはずだ。それなのにこのなの色は、どういう理由によるものなのだろう。

　しばらくあれこれ想像してから、俺は肩をすくめて思考を打ち切った。ＧＧＯの舞台であるたる大地は、最終戦争後の地球という設定だ。的を出すための演出なのかもしれない。

　改めて、眼前に広がるＧＧＯ世界の中央都市、《ＳＢＣグロッケン》の威容に眼を向ける。

　さすがにＳＦ系ＶＲＭＭＯのだけあって、そのまいは、アルヴヘイムの世界樹上に新設された首都《イグドラシル・シティ》や、かつてのアインクラッド各層主街区のファンタジックな街並みとは大きく異なっていた。

　メタリックな質感を持つ高層建築群が天をくように黒々とそびえ、それらを空中が網の目のようにいでいる。ビルの谷間をネオンカラーのホログラム広告がやかに流れ、地上に近づくにつれそれらの数は増して、色と音ののようだ。

　最後に足元を見ると、俺が立っているのは土や石ではなく、金属のプレートでされた道の上だった。

　背後には、どうやら初期キャラクター出現位置に設定してあるらしいドーム状の建物があり、目の前に街のメインストリートらしき広い通りが伸びている。道の左右にはぎっしりと怪しげな商店が並び、どこか秋葉原の裏通りに似た情景だ。

　そして行き交うプレイヤーたちも、一筋縄では行かない雰囲気を持った連中ばかりだった。

　圧倒的に男が多い。比較的女性比率が高いＡＬＯをホームとしているせいか、あるいはあの世界の住人はな妖精ばかりだからだろうか、迷彩のミリタリージャケットや黒いボディアーマーをまとったゴツい男たちが大量にしている光景は実に圧迫感がある、と言うかエネルギッシュと言うか、はっきり言えばむさ苦しい。その上どいつもこいつも目つきがで、実に話しかけづらい。

　される理由は、他にもある。大抵のプレイヤーが、肩や腰に黒光りする無骨な武器――銃をぶら下げているのだ。

　装飾的要素のある剣や槍とは違って、銃にはたった一つの目的しかない。武器であること。敵を倒すという、そのためだけにデザインされた形状であり色彩なのだ。

　なるほど、つまりそれはこの世界そのものにも言えることなのだな、と俺は内心で頷いた。

　このゲーム世界に存在するのは、《戦い、殺し、奪う》という先鋭化された目的だけだ。ＡＬＯが掲げているような、《幻想世界での生活を楽しむ》といった要素はほぼ完全にぎ落とされている。

　ゆえに、おそらく華麗だったりかったりする容姿はむしろマイナス要素なのだろう。戦場で敵をえさせるための、な兵士としての外見がすでに重要なパラメータなのだ。男たちの多くが濃いを伸ばし、あるいは顔に目立つを刻んでいるのはそれが理由だ。

　となると、俺のアバターは一体どのような外見を与えられたのだろう。

　今更のようにそう考え、俺は自分の体を見下ろした。悪目立ちして《死銃》狙ってもらうという目的のためには、ハリウッド映画ばりのマッチョ・ソルジャーな姿が望ましい――

　……嫌な予感がした。

　両手の肌は白く滑らかで、指もびっくりするほど細い。黒のミリタリー・ファティーグに包まれた体は、ことによると現実の俺以上に華奢だ。視点の感じからして、どうももそれほど高いとは思えない。

　このガンゲイル・オンラインにダイブするにあたっては、先日アスナにも説明したとおり、初期キャラクターを一から生成したわけではもちろんない。そんなことをしていては、強者のみを狙うという《死銃》といつ出会えるのか知れたものではない。

　ＶＲＭＭＯ開発支援パッケージ、《ザ・シード》を利用して生成された――より詳細に言えば《カーディナル》システム上で稼働するゲーム世界には、共通するメタ・ルールがひとつだけ存在する。すなわち《キャラクター・コンバート機能》だ。ザ・シードを使うかぎり、この機能は決してオフにすることができない。

　その機能を使えば、あのゲームで育てたキャラクター・データを、その能力を保持したまま他の会社が運営するゲームに移動させることが可能となる。携帯端末のＳＩＭカードを差し替えれば、どこのキャリアの端末だろうと自由に使用できるのとよく似ている、と言えるのだろうか。

　たとえば、Ａというゲームで育てた、筋力一〇〇、素早さ八〇というステータスのキャラクターを、ゲームＢに移動させたとする。すると、ゲームＡでの強さの度合いを《相対的に保持した》変換が行われ、ゲームＢにおいて、ＳＴＲ四〇、ＡＧＩ三〇といったキャラクターが誕生することになる。手っ取り早く言えば、ＡＬＯ内で《中の上》程度の強さを持った《肉弾戦士型》のキャラクターは、ＧＧＯでも《中の上戦士》として転生するというわけだ。

　無論これは、キャラクターのコピーを増やすという機能ではない。コンバートした瞬間、元の世界でのキャラクターデータは完全消滅し、更に移動できるのはキャラクター本体だけでアイテム類は一切持ち出せないため、便利ではあるがなかなかに度胸の要る行為なのだ。今回、ＡＬＯで使用している《スプリガン・キリト》のキャラクターをＧＧＯに移動させるにあたって、俺は手持ちのアイテムのほとんどを、新アインクラッド五十層に開店したばかりのエギルの雑貨屋の保管庫に無理やり押し込めてきた。しかし、そのように信頼できる知人がいない場合は、財産を全て失う覚悟が要求されるわけだ。

　さて、そのコンバート機能によって、俺はこの世界でもＡＬＯでのキリト程度の強さ――と言っても一度初期化して育てなおしたキャラクターなので、ＳＡＯに於ける初代キリトほどの無茶ステータスではないが――を得ているはずだが、外見もアイテムと同じく持ち出せないため、どのような姿がランダム生成されるかはまるで予想できなかった。ゆえに、どうせなら屈強な兵士の姿を、と望んだわけなのである――か。

　どうにも嫌な気配を感じつつ、俺は周囲を見回し、出てきたばかりのドーム外壁を飾るミラーガラスへと歩み寄った。

　そして、と眼を見開いた。

「な……なんだこりゃ!?」

　ガラスに映っていたのは、希望とは百光年ほどもかけ離れた姿だった。

　背丈は明らかにスプリガン時代より低く、そのうえ細い。髪の色は変わらず黒だが、頭頂部から肩甲骨あたりまでも滑らかに流れている。顔は手と同じく透き通るような白、唇は鮮やかな。

　瞳の色も、髪と同様黒を引き継いでいるものの、やたらと大きく無闇に光っている。長いにられたその眼が、鏡の中からかつな視線を投げ掛けてきて、俺は思わずそれが自分だということを忘れて視線を泳がせてしまう。改めて正面を見て、細長い息を吐く。

*［＃挿絵img0512.png］*

　ＳＡＯのキリト君はかなり女顔だったよー、とアスナはよく言っているが、この姿はもうそんなレベルではない。いったいどこに兵士の屈強さを見出せばいいのだ、と俺が呆然と立ち尽くしていると、少し離れた場所で何かを食っていた男が突然走り寄ってきて、背後からガラスに映る俺に声を掛けた。

「おおっ、お姉さん運がいいね！　そのアバター、Ｆ一三〇〇番系でしょ！　め～～～ったにでないんだよ、そのタイプ。どう、今ならまだ始めたばっかだろうしさあ、アカウントごと売らない？　二メガクレジット出すよ！」

「…………」

　俺は思考停止状態のまましばらく男の顔を眺めていたが、突然ある可能性に思い至り、慌てて両手で自分の胸部をまさぐった。だが幸い、そこには平らな胸板があるばかりで、したような感触はなかった。恐怖の性別逆転事故が起こったというわけでもないらしい。

　最近のＶＲゲームは、ほとんどすべてのタイトルで、プレイヤーとアバターの性別を変えることを禁じている。異性のアバターを長期間使用していると、精神的・肉体的に無視できない悪影響があるから、というのがその理由らしい。しかし、プレイヤーの性別判定を脳波パターンによって行うため、ごくごくに何かの弾みで異性と判定され、ダイブしてみて、という事故が起きていると聞く。

　今にして思えば、性別逆転設定が可能だった初代ＳＡＯで、開始直後に本来の性へと強制的に戻されたのは、茅場がその《悪影響》をすでに把握していたからなのかなあ……と一瞬場違いな思考を巡らせてしまってから、俺はようやく男の顔を見て、肩をすくめつつ答えた。

「あー……、悪いけど俺、男なんだ」

　その声も、やや低いが充分に女の子で通用するトーンである。げんなりしながら返事を待っていると、今度はさんがしばし絶句したのち、先刻に倍する勢いでまくし立てはじめた。

「じゃ、じゃあ……それＭ九〇〇〇番系かい!?　す、すごいな、それなら四、いや五メガ出す。う、売ってくれ、ぜひ売ってくれ!!」

　売るどころかタダで進呈しよう、いやアンタの外見と取り替えてくれ、と俺は心底思ったが、残念ながらそういう訳にもいかない。

「えーと……これ、初期キャラじゃなくて、コンバートなんだ。ちょっと金には替えられない、悪いね」

「そ……そうか……」

　男はいかにも残念と言う顔で俺を全方位から観察していたが、やがて気を取り直したように訊いてきた。

「噂じゃ、その手のレアアバターはコンバート前のアカウントを使い込んでるほど出いらしいんだよね。参考までに、前のアカのプレイ時間を教えてくれないかな？」

「へ？　ぷ、プレイ時間？」

　俺ははたと考え込む。コンバート前のアカウント、つまりＳＡＯからＡＬＯへと至る剣士キリトの総プレイ時間は、最低でも丸二年……つまり七百三十日掛ける二十四時間で……

「ええと……いちま……」

　馬鹿正直に答えそうになってから、俺は慌ててした。ＶＲＭＭＯゲームというジャンルが生まれてまだわずか三年なのに、一万時間ものダイブ経験を持つのは旧ＳＡＯプレイヤー以外には有り得ない。

「い、いや、一年くらいだよ。だからやっぱり偶然じゃないかな」

「うーん、そうか……。ま、気が変ったら連絡してくれ」

　男はそう言うと、透明なカード状のアイテムを俺に押し付けて惜しそうに立ち去っていった。キャラ名や性別、所属ギルド名等が記されたそのカードは、眺めているうちに発光・消滅してしまったが、おそらくシステムウインドウ中のアドレス帳か何かにデータが追加されているのだろう。

　俺はなおもめ悪くガラスに映る我が身を横目でみ、何とかならないものかと考えたが、何ともなりはしないという結論以外出てこなかった。

　このコンバート履歴は俺のキャラデータに埋め込まれ、ＡＬＯに戻った時に元のツンツン髪のスプリガン・キリトの姿に復帰できる代わりに、ふたたびＧＧＯ世界にコンバートしたところで、与えられるのはこの少女だか少年だか判別できないアバターなのだ。

　不運の中に幸運を捜せ、がモットーの俺は、それから数分間あれこれ考え、ようやく一つの《良かったコト》をり出した。

　この世界に来た目的は、ひとえに噂の《死銃》なるプレイヤーと接触して、銃撃されるのは願い下げだがどうにかしてその能力のを判定することだけだ。そのためには、とにかく強さをアピールし、また目立たなくてはならない。

　ＧＧＯはゲームの性格からして女性プレイヤーはごく少ないはずなので、ぱっと見美少女なこの姿は、俺の望んだ方向ではないものの間違いなく目立つ。戦場での威圧感などはカケラも望めそうにないが、そちらのほうは戦闘能力でカバーするしかない。

　強さの宣伝に関しては、とりあえず一つの作戦があるにはあった。

　通常のゲームプレイ――つまりダンジョン攻略や、あまりやりたくはないがプレイヤーキルなどで名を売るにはそれなりに時間が必要となるが、幸いこのゲームではほんの数日後に《バレット・オブ・バレッツ》なる最強プレイヤー決定イベントが開催される予定になっていた。それにエントリーし、ともかくバトルロイヤル形式の本戦に進むのだ。上位に食い込んで名を売れば《死銃》氏にも当然注目されるだろうし、あるいはことによると大会に本人が出場してくる可能性もあった。

　初めてダイブするゲームでどの程度戦えるものか大いに心ないものの、とりあえずやってみるしかない。銃相手の戦闘という奴が、ＡＬＯで弓使いや魔道師と戦うのと同じようにいくわけもないだろうが、ともかくＶＲＭＭＯである限り、そこそこの共通点はあるはずだ。頑張れるだけ頑張って――それで力が及ばなければ、その時は無茶な仕事を押し付けた菊岡の責任である。

　ともかくまずは大会へのエントリー手続き、そして装備の購入だ。

　俺は最後に我が身をし、フンと息を鳴らしてから、メインストリート目指して歩き始めた。直後、揺れて頬にかかった髪を無意識のうちに指先でかきあげているのに気付き、とした気分に襲われた。

　――数分後、あっけなく道に迷った。

　ＳＢＣグロッケンという奇妙な名前の都市は、どうやら広大なフロアが幾つも重なる多層構造を取っているらしい。立ち尽くす俺の目の前には、まるで浮遊城アインクラッドそのものを縮小したかのような階層の連なりがそびえ、遥か上空の開口部に夕焼けの色が小さく覗いている。層を貫くような巨大なビルが立ち並び、それらを繫ぐ空中回廊やらエスカレータやらエレベータがきらきらと輝いているさまは実に美しいのだが、実際的にはむしろダンジョンと言うべき複雑さだ。

　もちろんメインメニューからは詳細な立体マップを呼び出すこともできるのだが、表示される現在位置と、実際に眼前に広がる光景を照合するのも容易ではない。

　これがスタンドアローンＲＰＧであれば、ヤケになった闇雲に歩き回り、元の場所にすら戻れなくなるところだが、幸いこれはＭＭＯだ。こういう時に取るべき手段は一つである。

　俺は、眼前を行き交う人影の中からＮＰＣではなくプレイヤーのタグを見つけ出して小走りに駆け寄ると、背後から声を掛けた。

「あのー、すいません、ちょっと道を……」

　そして即座に、しまったと思った。

　振り向いたのは、どう見ても女の子だったからだ。

　さらさらと細いペールブルーの髪は無造作なショートだが、額の両側で結わえた細い房がアクセントになっている。くっきりとした眉の下に、猫科な雰囲気を漂わせる藍色の大きな瞳が輝き、小ぶりな鼻と色の薄い唇がそれに続く。

　いやいや、ひょっとしたら俺のアバター同様に少女っぽい少年君かも知れぬと思い、雷光の速さで身体に視線を走らせたが、サンドカラーのマフラーの下、ジッパーの開いたジャケットの奥では、シャツがきちんと膨らんでいる。その上、よくよく見れば相当に小柄だ。それに気付かなかったのは、俺の目線もかなり低くなっているせいなのだが。

　ＶＲＭＭＯにおいて、男性プレイヤーが女性プレイヤーに「道に迷った」等々と声を掛ける場合、その七割までナンパ目的と断じていい。

　危惧したとおり、振り向いた女性プレイヤーの顔にもあからさまな警戒の色が浮かんでいて――しかし、意外にその表情はすぐに消え去った。

「……このゲーム、初めて？　どこに行くの？」

　綺麗に澄んだ声で言うその口許には、かすかな微笑さえ浮かんでいるではないか。これは一体どうしたことだろう、と内心で首を捻ってから、俺はようやくその理由に思い至った。この女の子は、先刻声を掛けてきたアバターバイヤーの男と同様の誤解をしているのだ。俺を、自分と同じ女の子だと。まったく何ということだ。

「あー、えっと……」

　俺は反射的に己の性別を明らかにしようと思ったが、寸前で言葉を止めた。

　これはある意味、都合のいい状況かもしれない。この後、改めて男プレイヤーに声を掛け直し、そいつも俺を女性だと誤解すれば、少々面倒な事態になりかねない。利用できるものは何でも利用すべし、が俺の第二のモットーでもあることだし、この際彼女には悪いがしばらく誤解したままでいてもらうにくは無い。

「はい、初めてなんです。どこか安い武器屋さんと、あと、っていう所に行きたいんですが……」

　比べればやや低く、ハスキーな響きのある声で俺が答えると、女の子は小さく首を傾げた。

「総督府？　何しに行くの？」

「あの……もうすぐあるっていう、バトルロイヤルイベントのエントリーに……」

　それを聞いた途端、彼女の大きな眼がぱちくりと丸くなる。

「え……ええと、今日ゲームを始めたんだよね？　その、イベントに出ちゃいけないことはぜんぜんないけど、ちょっとステータスが足りないかも……」

「あ、初期キャラってわけじゃないんです。コンバートで、他のゲームから……」

「へえ、そうなんだ」

　女の子の藍色の瞳がきらりと輝き、口許に今度こそ明確な笑みが浮かんだ。

「聞いていい？　なんでこんなっぽくてオイル臭いゲームに来ようと思ったの？」

「それは……ええと、今までずっとファンタジーなゲームばっかりやってたんですけど、たまにはサイバーっぽいので遊んでみたいなあ、って思って……。銃の戦闘とかも、ちょっと興味あったし」

　まあこれはではない。剣での近接戦闘に特化した俺のＶＲＭＭＯ勘が、どの程度ＧＧＯに通用するのかということに実際に少々の興味がある。

「そっかー。それでいきなりＢｏＢに出ようだなんて、根性あるね」

　女の子はくすりと笑うと、大きく頷いた。

「いいよ、案内してあげる。私もどうせ総督府に行くところだったんだ。その前にガンショップだったね。好みの銃とか、ある？」

「え、えっと……」

　そう言われても、には出てこない。俺が答えに詰まると、女の子はもう一度微笑した。

「じゃあ、色々揃ってる大きいマーケットに行こう。こっち」

　くるりと振り向き、歩き始めた彼女のマフラーの揺れるしっぽを、俺は慌てて追いかけた。

　絶対に経路を記憶することなど不可能と思える、曲がりくねった路地やら動く歩道やら動く階段を次から次へと通り抜け、数分歩くと不意に開けた大通りに出た。正面に、大手の外資系スーパーを思わせるきらびやかな店舗が見える。

「あそこだよ」

　女の子はすいすいと人波を縫って店に向かった。

　広大な店内は、様々な色の光とに満ち、まるでアミューズメントパークのようだった。ＮＰＣ定員は揃って露出の大きい銀色のコスチュームをまとった美女たちで、な営業スマイルを振りいているのだが、ギョッとするのが彼女らの手に握られたり、四方の壁に飾られているのが全て、黒光りするゴツい拳銃やら機関銃だということだ。

「な……なんだか、すごい店ですね」

　俺が言うと、隣に立つ女の子も小さく苦笑した。

「ほんとは、こういう初心者向けの総合ショップよりも、もっとディープな専門店のほうが掘り出し物があったりするんだけどね。まあ、ここで好みの銃系統を見つけてから、そういう所に行ってもいいし」

　言われれば、店内をうろついているプレイヤーたちの服も派手めな色のコーディネートが多く、女の子の砂漠色に比べればビギナーっぽい印象である。

「さてと。あなた、ステータスはどんなタイプ？」

　そう訊かれて、俺は一瞬考えた。異世界間コンバートとは言っても、キャラの能力的傾向は引き継がれるはずだ。

「えっと、筋力優先、その次が素早さ……かな？」

「ＳＴＲ―ＡＧＩ型か。じゃあ、ちょっと重めのアサルトライフルか、もうちょっと大口径のマシンガンをメインアームにして、サブにハンドガンを持つ中距離戦闘タイプがいいかなあ……。あ……でも、あなたコンバートしたばかりだよね？　てことは、お金が……」

「あ……そ、そっか」

　俺は慌てて右手を振り、ウインドウを出した。コンバートを出した。コンバートで能力値は引き継がれても、アイテムやら所持金の移動はできない。つまりストレージ欄の下端に表示されている金額は――

「ええと……せ、千クレジット」

「……ばりばり初期金額だね」

　俺と女の子は顔を見合わせ、困ったように笑い合った。

「うーん……」

　すぐに表情を戻した女の子は、薄い唇の下に右手の指先を当て、首を傾けた。

「……その金額だと、小型のレイガンくらいしか買えないかも……。実弾系だと、中古のリボルバーが……どうかなあ……。――あのね、もし、よかったら……」

　俺は、彼女が言わんとする先を察し、急いで首を横に振った。どんなＭＭＯでも、がから過剰な援助を受けるのは決して褒められたことではない。この世界にはゲームを楽しみに来たわけではないが、それでもゲーマーとして譲れない一線というものはある。

「い、いや、いいですよ。そこまでは。えっと……どこか、どかんと手っ取り早くけられるような場所ってないですか？　確か、このゲームにはカジノがあるって聞いたんですが……」

　すると女の子は、さすがに少しばかりれたような笑みを見せた。

「ああいうのは、お金が余っているときに、スるのを前提でやったほうがいいよ。そりゃあ、あちこちに大きいのも小さいのもあるけどね。確か、この店にだって……」

　くるりと頭を巡らせ、店の奥を指差す。

「似たようなギャンブルゲームはあるよ。ほら」

　細い指先が示す先には、なにやらピカピカと電飾が瞬く巨大な装置が見えた。

　近寄ってみると、それは壁際の一面を丸ごと占領する、ゲーム機と言うにはあまりに大きな代物だった。

　幅三メートル、長さは二十メートルほどもあるだろうか。金属タイルを敷いた床を、腰の高さほどの柵が囲い、一番奥に西部劇のガンマンめいた格好のＮＰＣが立っている。手前の端には柵がなく、かわりに開閉式の金属バーと、キャッシャーらしき四角い柱が見える。

　時折腰のホルスターから巨大な拳銃を抜いては、指先でくるくる回しながら挑発的な台詞をくガンマンの後ろには、無数にの刻まれたレンガの壁と、その上部にピンクのネオンで《！》の文字。

「……これは？」

　訊ねると、女の子は指先を動かしながら解説してくれた。

「手前のゲートから入って、奥のＮＰＣガンマンの銃撃をかわしながらどこまで近づけるか、っていうゲームだね。今までの最高記録が、ほらそこ」

　伸ばされた人差し指の先、柵の内側の床面に、赤く発光する細いラインがあった。全体の三分の二をわずかに超えたところだろうか。

「へえ。……いくら貰えるんです？」

「えっと、確かプレイ料金が五百クレジットで、十メートル突破で千、十五メートルで二千クレジットの賞金かな。で、もしガンマンに触れれば、今までプレイヤーがつぎ込んだお金が全額バック」

「ぜ、全額!?」

「ほら、看板のとこにキャリーオーバーの表示があるよ。いち、じゅう……三十万ちょいか」

「す……凄い金額ですね」

「だって無理だもん」

　女の子は即答し、肩をすくめる。

「あのガンマン、八メートルを超えるとインチキな早撃ちになるんだ。リボルバーのくせに、ムチャクチャな高速リロードで三点バースト射撃するの。予測線が見えた時にはもう手遅れ」

「予測線……」

　その時、女の子がくいくいと俺の袖を引っ張り、小声で囁いた。

「ほら、またプール額を増やす人がいるよ」

　視線をガンマンから入り口に戻すと、三人連れの男が近寄っていくところだった。

　そのうちの一人、白地に薄いグレーの迷彩が入った、寒冷地仕様と思しきミリタリージャケットを着込んだ男が気合いを入れながらゲート前に立つ。右手のをキャッシャー上端のパネル部分に押し付けると、それだけで支払いが行われたのか、ひときわやかなファンファーレが響き渡った。たちまち、店内のあちこちから十人ほどのギャラリーが集まってくる。

　ＮＰＣガンマンが英語で『てめえのケツを月まですっ飛ばしてやるぜ』的なスラングを喚き、銃を収めたホルスターに右手を添えた。寒冷迷彩男の前に、グリーンのホロ表示で大きな【３】の数字が表れ、効果音とともに２、１と減少、０になると同時にゲートの金属バーががしゃんと開いた。

「ぬおおおりゃあああ！」

　寒冷男はびを上げながら数歩ダッシュし――たかと思うと、両足を上げて急制動をかけた。眼をいっぱいに見開き、いきなり上体を右に傾けて、左手、左足を上げるという妙な格好を取る。

　何の踊りだろう、と思ったその瞬間、寒冷男の頭の左側十センチのところと、左脇の下と、左膝の下を赤々と輝く弾丸が通過した。ＮＰＣガンマンがホルスターから銃を抜き、立て続けに三発ぶっぱなしたのだ。見事な回避だが――まるで、寒冷男には、銃弾が通るコースが解っていたように見えたのだ。

「……いまのが、弾道……？」

　顔を寄せて囁くと、水色の髪の女の子はこくんと頷き、同じく小声で答えた。

「そう、《弾道予測線》による攻撃回避」

　寒冷男は、火線が消えると同時に再び猛ダッシュし、またすぐに停止する。今度は両足をぐっと大きく開き、上半身を九十度める。

　直後、甲高いりとともに、二発の銃弾が男の頭上を、一発がの下を通過した。再度前進、そして停止。まるで《だるまさん転んだ》のようだ。

　寒冷男はどうして機敏な動きを見せ、たちまち七メートルほど前進した。あと三メートルで、プレイ料金の倍額をゲットできるはず――と思ったその時。

　今まで三発ずつ同じ間隔で連射していたＮＰＣガンマンが、時差をつけて二発、一発と銃弾を放った。遅れた飛来した一弾を寒冷男はジャンプで回避したが、着地でバランスを崩して片手を地面に着いた。慌てて立ち上がろうとしたものの時すでに遅く、ガンマンの右手がいて、放たれた火線が男の白いベストの上にオレンジ色の火花を散らした。

　へろへろへろ～と情けないファンファーレ。ガンマンは口汚く勝利の言葉を喚き、その背後のプール金額表示が軽やかな金属音とともに五百クレジットぶん上昇した。寒冷男は肩を落とし、すごすごとゲートから外に出た。

「……ね？」

　隣で女の子が、マフラーの奥でかすかに笑いながらもう一度肩をすくめた。

「左右に大きく動けるならともかく、ほとんど一直線に突っ込まなきゃならないんだから、どうしたってあのへんが限界なのよ」

「ふうん……なるほど。予測線が見えた時にはもう遅い……か」

　俺は呟くと、ゲートに向かって足を踏み出した。

「あ……ちょっと、あなた……」

　眼を丸くして呼び止めようとする女の子に、片頬で軽く笑みを返し、キャッシャーに右手を押し当てる。がしゃちゃりーんと旧式のレジスターのような音が聞こえ、賑やかなサウンドが鳴り響く。

　新たな馬鹿者登場のせいか、あるいは俺の容姿のせいか、ギャラリーや寒冷男を含む三人組がざわめいた。マフラーの女の子は両手を腰を当て、あっきれたーという表情で小さく首を振っている。

　ガンマンの、先ほどとは異なるり声と同時に、目の前でカウントダウンが始まった。

　腰を落とし、全力ダッシュの体勢を取る。数字が減少し、金属バーが開いた瞬間、俺は床を蹴って飛び出した。

　数歩も進まないうちに、ガンマンの右手がさっと持ち上がり、握られた銃の先端から三本の赤いラインが伸びた。俺の頭、右胸、左足をそれぞれポイントしている。

　――と感じた瞬間、思い切り右前方にんだ。直後、体の左側をめて、オレンジの火線が通過。すぐに右足でパネルを蹴り、中央に戻る。

　もちろん、ＶＲＭＭＯゲーム内で銃と相対するのは、これが初めての体験だ。

　しかし、ＡＬＯにも、そしてＳＡＯにも、弓やら毒液やら魔法やらで遠距離攻撃をするモンスターは多々存在した。それらの飛び道具を回避する方法は一つ。敵の《眼》から射線を読むのだ。恐らくは開発者であるのこだわりなのだろう。カーディナル・システム上で動作するＶＲＭＭＯのモンスターは全て、照準箇所に寸分の狂いもなく視線を向けるという特性を与えられている。――もちろん、眼に類する器官を備えている場合に限られるが。

　その原則は、いま俺に銃を向けているＮＰＣガンマンも例外としないはずだ。

　俺は赤い弾道予測線も、黒い銃口すらも見ずに、ただひたすらガンマンの眼だけを凝視した。ぴくりぴくりと動くその生命なき瞳から、弾丸が飛来する軌道の気配を感じ取る。と同時に右に左に、あるいは上に下にぎりぎりの距離だけ動き、無音で表示される予測線それ自体を回避する。実際に弾が通過したときにはもう、俺は次の前ダッシュの体勢に入っている。

　三連発の銃撃を二セット回避した時点で十メートルを越えたらしく、短いＳＥが響いた。しかしその音は、俺の意識にはほとんど届かなかった。

　ガンマンが、六発撃ってになったをリリースし、空を後方に飛ばすと同時に左手で新しい弾六発を一気にフル、ジャカッといい音をさせてフレームに戻すという一連の作業を〇・五秒で――確かにインチキなだ――やってのけ、再度俺に向けた。

　次の攻撃は、今までのように歯切れのいい三連射ではなかった。変則的なリズムを刻んで襲ってきた二発、一発、そして三発の弾を、俺は半分以上勘だけで回避し、更に五メートルを詰めた。再び短いファンファーレ。同時にガンマンは稲妻のような半秒リロード。

　残り距離五メートル、もう敵は目の前だ。ＮＰＣガンマンの、気のせいかしげにんでいるがはっきりと見える。

　テンガロンハットの下で、黒い眼が小刻みに微動し、俺の胸の高さを水平にいだ。左右へと回避は不可能と判断し、俺は体を倒して金属タイル上をスライディング。マシンガンかよと言いたくなる連射で放たれた六本の火線をくぐって、二メートル半の距離を稼ぐ。

　これで敵はまた弾切れだ。装塡し直すコンマ五秒のがあれば、充分にタッチダウンできる。

　立ち上がりながらそう考えた俺は、ガンマンの眼がにやりと笑うのを見た――気がした。

　反射的に、前ダッシュの予定を変更し、上に思い切り跳躍する。

*［＃挿絵img0513.png］*

　直前まで俺が立っていた場所を、リボルバーからノーリロードで放たれた六発のレーザーが穴だらけにした。

　なんだそりゃ！　と口中で叫びつつも、空中でくるりと一回転してガンマンの直前に着地。

　ここで決め台詞の一つも吐きたいのは山々だったが、敵が更なる奥の手――たとえば眼からビームを出したりする前に勝負を決するべく、俺は革ベストを着た敵の胸を素早く叩いた。

　店中の音が消えたような、一瞬の静寂の後。

「オーマイ、ガ――――――ッ!!」

　大げさな絶叫とともにガンマンが両手で頭を抱え、地面にがくりと膝をついた。同時に、狂ったようなファンファーレの。

　それに混ざってガラガラという音が響き、何事かと顔を上げると、ガンマンの背後のレンガ壁が内側から爆発したように崩れた。驚く暇もなく、内側から金貨の雨がざらざらと流れ出してくる。それらは俺の足元に跳ね返り、いい音を立ててから消えていく。

　ネオン看板の下では、キャリーオーバー額のデジタル数字が目まぐるしく減少し、やがてゼロになると同時に金色の滝も途絶えた。一際やかましいサウンドが店内中に響いたのちゲームはリセットされ、ガンマンも起き上って拳銃を指先でくるくる回し始める。相変わらず挑発的スラングを喚き立てているが、先刻のインチキ極まる十二連射を披露したあとでは、挑戦しようと考える者が現れるかどうかは疑わしい。

「……ふう」

　俺は息をつくと、左側の柵に開いた出口から、ゲームレーンを脱出した。

　その途端、いつのまにか倍くらいに増えていたギャラリーの壁から、どよめきのが沸き起こった。何だよさっきの、誰だあの子、という声が飛び交う。

　人垣の端から小走りに駆け寄ってきた水色の髪の少女が、猫を思わせる両眼を丸くして俺を凝視した。数秒後、その唇から掠れた声が流れた。

「……あなた、どういう反射神経してるの……？　最後、目の前……二メートルくらいのところからのレーザーをけた……あんな距離だともう、弾道予測線と実射撃のあいだにタイムラグなんてほとんどないはずなのに……」

「え、えーと……だって……」

　俺はどう答えたものかしばし迷った挙句、言った。

「だって、この弾避けゲームは、弾道予測線を予測する、っていうゲームですよね？」

「よ……予測線を予測ぅ!?」

　女の子の、らしい叫びが店内の空気を貫いた。ギャラリーたちも全員、口を開けてしーんと黙り込んだ。

　数分後、ようやく人垣が三々五々散った武器ショップの一角で、俺はショーケース内のライフルをあれこれ眺めてはを捻っていた。

「う～ん……。このアサルトライフルってのは、サブマシンガンより口径が小さいのに図体が大きいのはどういう訳なんです？」

　隣に立つ親切な女の子に素朴な疑問をぶつけてみたが、彼女はまだ驚きの余韻が冷めないらしく、見慣れぬものを見た猫のような、警戒心と好奇心の入り混じった瞳でじーっと俺を見ている。

「……そんなことも知らないのに、あんなとんでもない回避技術があるなんて……。コンバート、って言ったよね。前はどんなゲームにいたの？」

「え、えっと……よくある、ファンタジー系のやつですけど……」

「そう……。――まあ、いいわ。ＢｏＢの予選に出るなら、実戦を見せてもらう機会もあるしね。で、なんだっけ、アサルトライフルが小口径な理由？　それは、アメリカのＭ１６に始まる、小径高速弾による命中精度や貫通力重視の設計思想が……」

　そこで不意に口を閉じた少女は、まるで自分の言葉に苦さを感じたかのように顔をしかめた。しかしその奇妙な反応も一瞬で消え、すぐに控えめな笑顔が取って代わる。

「……そんなこと、どうでもいいよね。さ、早くあなたの買い物を済ませちゃおう」

「あ……はい、お願いします」

　しみつつもく俺から視線を外し、大きなショーケースの前をゆっくり歩き始める。

「も稼いだなら結構いい奴が買えると思うけど……最終的には、その人の好みとこだわりだから、まずそこが解らないと」

「こだわり……ですか」

　俺は少女の後について、黒光りする銃たちを次々に見て回るが、どうにもピンと来ない。それも当然、銃に関する知識なんて、《拳銃にはリボルバーとオートマチックがある》という段階で終了してしまう程度なのだ。

　唸っている間に、いつの間にか、店内に隙間なく並んでいる陳列棚の一番端まで来てしまったいた。こうなったらもう彼女のお任せで選んでもらう――と思ったその時、視界に妙なモノが入った。

　長いショーケースの隅に、銃とは明らかに異なる、金属の筒のようなものがいくつか並んでいる。

　直径三センチ、長さは二十五センチほどだろうか。片側には登山用のカラビナに似た金具が下がり、もう一方は少し太くなっていて、中央には何かの発射口にも見える黒い穴が開いている。この店に陳列されているからには銃の一種なのだろうが、握りも、引き金らしきものも見当たらない。筒の側面上部に、小さなスイッチが一つ見えているだけだ。

「あの……これは？」

　聞くと、女の子はちらりと視線を走らせ、それが癖なのであろう仕草で小さく肩をすくめた。

「ああ……それはコーケンよ」

「こ、こうけん？」

「光の剣、と書いて。正式名は《フォトンソード》だけど、みんなレーザーブレードとか、ライトセーバーとか、ビームサーベルとか、適当に呼んでる」

「け、剣!?　この世界にも剣があるんですか」

　俺は慌ててショーケースに顔を近づけた。言われてみれば、古いＳＦ映画で宇宙の秩序を守る騎士たちが振り回していた武器に非常によく似ている。

「あることはあるけど、実際に使う人なんていないよ」

「な……なぜ？」

「そりゃあ、だって……超近距離じゃないと当たらないし、そこまで接近する頃にはの巣に……」

　女の子はそこで言葉を切り、唇をわずかに開いたまま、じっと俺を見た。

　俺はニヤリ、になりそうな所を危うくニコリにめた笑いを浮かべ、言った。

「つまり、接近できればいいわけですね」

「で、でも、そりゃあなたの回避技術は凄いけど、フルオートの銃相手だと……あ」

　女の子が言い終わらないうちに、俺はケースに並ぶフォトンソードのうち、色合いが気に入ったマットブラック塗装のやつを指先でワンクリックしていた。出てきたポップアップメニューから【ＢＵＹ】を選択すると、物凄い速さでＮＰＣ店員がすっ飛んできて、笑顔で金属のパネルのようなものを差し出した。板の中央に、先ほどのゲームのキャッシャーについていたのと同じ緑色のスキャナ面があるのに気付き、右を押し当てる。

　軽やかなレジスター的効果音が響き、パネル上面にぶうんと黒いフォトンソードが実体化した。持ち上げると、店員は「お買い上げありがとうございましたぁ～」と笑顔で一礼し、来た時と同じ速度で定位置まで戻っていった。

「……あーあ、買っちゃった」

　女の子が右斜め四十五度の視線で俺を見て言った。

「ま、戦闘スタイルは好きずきだけど、さ」

「そうそう。売ってるってことはきっとそれなりに戦えるはずですよ、コレでも」

　答えながら、俺は右手で短い筒状武器をしっかり握り直し、体の前にかざした。親指を動かしてスイッチを入れると、ぶぅんと低い振動音とともに、紫がかった青に光るエネルギーの刃が一メートル強ほど伸長して周囲を照らした。

「おお」

　思わず短く呟く。今まで大小様々な剣を握ってきたが、刀身が実体のない光でできた奴は初めてだ。

　まじまじと眺めると、に方向性はなく、円形断面の細長い筒状のようだった。とりあえず中段に構えてから、もうシステムアシストなしでも動作が体にみ付いているＳＡＯ時代の片手直剣ソードスキル、《バーチカル・スクエア》を繰り出してみる。

　ブン、ブォン、と心地よいりを上げながら、光の剣は空中に複雑な軌跡を描き、ぴたりと停止した。当然ながら、剣の重量による慣性の抵抗はほとんど感じない。

「へえー」

　横で、女の子が短く手を叩きながら、少し驚いたような笑みを見せた。

「なんだか、けっこうサマになってるね。ファンタジー世界の技かぁ……案外あなどれないかな？」

「や、それほどでも……。しかし、軽いなぁ」

「そりゃそうよ、せいぜい軽いくらいしかメリットない武器だもん。――それはそうと、メインアームはまあソレでいいとしても、サブにＳＭＧかハンドガンくらいは持ってたほうがいいと思うよ。接近するためのも必要だろうし」

「……なるほど、それはそうかもですね」

「あと幾ら残ってる？」

　言われてウインドウを出してみると、三十万クレジット以上あったはずの所持金は、十五万そこそこに減っていた。そう言うと、女の子は瞬きしてからひょいっと肩をすくめた。

「うへ、光剣って無闇と高いんだなぁ。残り百五十Ｋだと……弾や防具にかかる代金も考えると、ハンドガンかな」

「あの、もう、お任せします」

「ＢｏＢに出るんだから実弾銃がいいよね……牽制目的なら、パワーよりもアキュラシーかな……うーん」

　呟きながら、女の子は拳銃が並んでいるケースの前をゆっくりと歩き、やがてそのうちの一つを指差した。

「残金ぎりぎりだけど、これがいいかな。《ＦＮ・ファイブセブン》」

　細い指の先には、握り部分がらかな丸みを帯びた、やや小型の自動拳銃が鎮座していた。

「ファイブ……セブン？」

「口径のこと。五・七ミリだから、普通の九ミリパラベラム弾に比べるとかなり小さいんだけど、形がライフル弾に近いから命中精度と貫通力にアドバンテージがあるの。特殊な弾だから、同じＦＮ製サブマシンガンの《Ｐ９０》としか共用できないけど、銃をこれしか持たないなら関係ないしね」

「は、はあ……」

　立て板に水の如く滑らかな解説が出てくるのを聞いて、俺は改めて、この水色の髪の少女にわずかな興味を抱いた。

　ＧＧＯは性別固定のタイトルゆえに、現実のプレイヤー本人も女性なのは間違いないが、人種や年齢は全く定かではない。それでも、俺の勘によれば、歳はそれほど離れていない気がする。

　もちろん、ＭＭＯＲＰＧをプレイしているのだから、ゲーム内のアイテムについて詳細な知識があるのは当然だ。アスナやリーファだって、ＡＬＯ内の剣やら魔法について語らせれば五分や十分では終わらない。

　しかし――、やはり《銃》はどこか別格であるように思えてならない。しかも、ＧＧＯに登場する銃の半分は、現実世界に実際に存在する武器だと聞いている。導かれるのはどうしたって血とのイメージだ。俺と同年代の女の子がそのような世界にダイブし、あらゆる銃について詳細な知識を持つベテランプレイヤーとなるまで戦い続けるほどの動機、モチベーションとはいったい、どのようなものなのだろうか……。

「ね、聞いてる？」

「あ、は、はい」

　俺は慌てて思考を中断し、頷いた。

「じゃあ、これを買います。他に買ったほうがいいものって、なんです？」

　勧められた《ファイブセブン》なるピストル、いやハンドガンの他に、女の子の言葉に従って予備弾倉やら厚手の防弾ジャケット、ベルト型の《対光学銃防護フィールド発生器》他の小物装備を買い込むと、先ほどの弾けゲームで稼いだ三十万クレジットは綺麗に消えてしまった。

　右腰にフォトンソード、左腰にファイブセブンの新たな重みを感じながら店を出ると、色の空はわずかに赤みを増していた。

「すっかりお世話になっちゃいました。どうもありがとう」

　俺が頭を下げると、女の子はマフラーの奥でかすかにみ、首を振った。

「ううん、わたしも予選が始まるまで、特に予定なかったから。……あっ」

　言葉を切り、女の子は慌てたように左手首の無骨なクロノメーターをき込んだ。

「いけない、確か三時でエントリー締め切りだよ。うわ、総督府までダッシュしても間に合わないかも……」

「えっ、あなたもこれからエントリーだったんですか？」

「うん」

　顔を青ざめる少女につられるように、俺も買ったばかりのデジタル時計を覗き込んだ。表示された時刻は――十四時五十一分。

　さっと視線を持ち上げ、き込むように訊ねる。

「あ、あの、テレポート的移動手段はないんですか!?　転移アイテムとか魔法、じゃない超能力とか！」

「走りながら説明する！」

　女の子はそう叫ぶや身をし、大通りを北に向かってダッシュし始めた。慌てて揺れるマフラーを追いかける。数秒かかって隣に並ぶと、ちらりと視線を向けつつ、張り詰めた声を投げてくる。

「……このＧＧＯには、プレイヤーが起こせる瞬間移動現象はたった一つしかないの。死んで、蘇生ポイントに戻る時だけ。グロッケン地区の蘇生ポイントは総督府の近くだけど、街中じゃＨＰは絶対に減らないから、その手は使えない……」

　歩道を行き交うＮＰＣやプレイヤーの間を縫うように全力疾走しつつ、少女は解説した。俺はと言えば、追随するのに精一杯だ。ＡＬＯよりも低くなった視点に慣れていないせいもあるが、それ以前に少女の走行スピードが凄まじい。ステータスの支援というよりも、フルダイブ環境下の動作に完全に習熟した、見事な身のこなしだ。

　少女は再び時計を見てから、道の先を指さした。

「……総督府は、あそこ。市街の北の端だから、まだ三キロはある。エントリー操作に五分はかかるから、あと三分で到着しないと……！」

　まっすぐ伸びるメインストリートの先を見ると、遥か彼方に、夕日を受けて赤く輝くひときわ巨大なタワーが見えた。直線コースではあるが、通行人を避けつつ一キロを一分で走るのは、いかに息切れしないＶＲ世界とはいえ非常に厳しい。

　仮に俺がエントリー締め切りに間に合わなくても、それは事前の下調べをった報いというものだが、隣を走る水色の髪の少女は、俺の面倒を見ていなければ楽々間に合ったはずなのだ。罪悪感を覚えながらちらりと視線を向けると、歯を食い縛り、瞳に必死の色を浮かべた横顔があった。仮想の呼吸音に混じって、細く漏れる声が聞こえた。

「……お願い……おねがい、間に合って……」

　――おそらく、この少女にとって、これから開始される《バレット・オブ・バレッツ》大会の予選は単なるゲームプレイ以上に重大な意味を持っているのだ。どうしても、何が何でも参加しなくてはならない理由が彼女にはあるのだ……。

　直感的にそう悟った俺は、残り三分弱でのタワーまでり着ける手段を求めて、懸命に周囲を見回した。

　直後、ひとつの看板が俺の眼に飛び込んだ。

　左側に伸びる広い車道の一部が駐車スペースに拡幅され、そこに派手な原色の小型車両が三台並んでいる。その奥に立つパネルには、ぴかぴかに瞬くネオンサインで、【Ｒｅｎｔ―Ａ―Ｂｕｇｇｙ！】の文字。意味は明らかだ。

「……あれだ！」

　俺はいきなり少女の左手をみ、を傾けた。「えっ!?」と驚きの声を上げる少女を宙に浮かせる勢いで路側帯を飛び越え、《レンタルバギー》コーナーに飛び込む。

　並んでいるマシンは全て、前に一つ、後ろに二人のタイヤを備えた三輪バギーだった。いちばん手前に停まる赤いバギーのリアステップに少女を半ば放り込むように乗せ、自分は前のシートにまたがる。メーターパネル下部に、買い物に使ったのと同じスキャン装置を見つけて右手を叩き付けると、精算サウンドとともにエンジンが掛かった。

　三輪バギーの前半分は、幸いなことにバイクとまったく同じ構造だ。その上どうやら操作はマニュアルらしい。俺はグリップを握ると、せずスロットルをった。内燃機関が甲高くえ、バギーは前輪を浮かせながら、弾かれたように車道へと飛び出した。

「きゃっ……！」

　後ろで可愛らしい悲鳴が聞こえ、俺の腹に細い両手が回される。

「しっかり摑まってて！」

　今更のようにそう叫び、路面を焦がすような右ターンで車線に乗るや否や、アクセル全開。立て続けのシフトアップであっという間にメーターは百キロを超える。現実世界で、電動スクーターではなくギア付きのバイクに乗っていてよかったとしみじみ思う。

　車道を走る未来チックな四輪車を右に左にかわしつつ、忙しくシフト操作をしていると、右の耳元で女の子が叫んだ。

「な……なんで!?　このバギー、運転がめちゃくちゃ難しくて、男のプレイヤーでもまともに走れる人ほとんどいないのに……！」

　――すみません、ほんとはその男プレイヤーなんです。

　ともこの状況では言えず、俺は言葉を濁した。

「い……いやあ、昔ちょっとレース系のゲームもやってて……っとと！」

　前にいた大型バスがいきなり車線変更し、リアタイヤを派手に滑らせながら回避する。ギアを落として再加速、一息に抜き去る。まあ、確かに二〇二五年も終わろうというこの時代、マニュアルシフトの旧式バイクの運転経験がある人間などはほとんどいないだろう。そもそも教習所の実習からして基本は電スクなのだ。俺はエギルの知り合いがタダでくれるというから苦労してマニュアル許可の中型免許を取ったのだが、実際にあのタイ製マシンを受け取ってから、実は前オーナーの廃車費用を浮かせてやっただけだと気付いた時にはもう後の祭りだった。何せ、数年前にはガソリンエンジン車そのものが全面禁止になるなどという話も……

　――などと考えていると、不意に頭の後ろで笑い声が響き、俺を驚かせた。

「あはは……凄い、気持ちいい！」

　その声が、猫目の少女のものと認識するのにやや時間がかかった。どこか張り詰めた、それでいて寂しそうな気配を持つあの女の子が、こんな笑い方をすると思いも寄らなかったのだ。

「ねえ、もっと……もっと飛ばして！」

　少女の叫び声に、俺は約一キロ先に迫りつつある総督府タワーの威容をみ、「ＯＫ！」と応じた。頭を下げ、ギアをトップに蹴り込む。カァァァン、とエンジンがえり、スピードメーターの針が二百キロに迫る。

　この速度だと、一キロなどという距離は数十秒で駆け抜けてしまう、

　しかし、そのわずかな時間に少女が響かせた軽やかな歓声は、俺の記憶に強い印象を刻み込んだ。

　総督府へと続く広い階段の手前に、三輪バギーは横向きにスライドしながら停止した。

　さっと時計を見ると、三時まであと五分少々残っている。

「これなら間に合う！　こっち！」

　リアステップから飛び降りた少女が、俺の右手を握って走り始めた。その横顔には、すでに刃物の――いや高性能の銃のような鋭さが戻っている。いったいどちらが本当のこの子なのだろう、などと考えてしまいそうになるのを押しめ、俺も懸命に階段を駆け上る。

　二十段程度のステップを抜けると、目の前に、もなく巨大な金属のタワーがしていた。前後に長い流線型のフォルムを持ち、所々にアンテナのような円盤や、レーダーのようなドームが突き出している。

「これが総督府。通称《ブリッジ》。あなたが出てきたゲーム開始地点、《メモリアル・ホール》のちょうど反対側」

　俺の手を引きながら、女の子が言った。

「ブリッジ？　橋……？」

　訊ねると、少女も小さく首を傾ける。

「じゃなくて、《艦橋》っていう意味かな？　グロッケンが宇宙船だった時代の司令部だから、そう呼ばれてるみたい」

「宇宙船……、ああ、それで街がやたらと縦に長いんですね」

「そう。正式名称についてる《ＳＢＣ》ってのは、《》の略なんだって。イベントのエントリーとか、ゲームに関する手続きは全部ここでするんだ」

　そこまで解説が進むと同時に、俺たちはタワー改めブリッジ一階のエントランスを通り抜けた。

　内部は、かなり広い円形のホールだった。

　いかにも未来的なディティールの施された円柱が、十字の列を作って遥か高い天井まで続いている。周囲の壁には大画面のパネルモニタがぐるりと設置され、いろいろなイベントの告知から、実在企業のＣＭまでが薄暗いホール内に原色の光を投げ掛ける。もちろん一番派手なのは、正面の大モニタに映し出された、《第三回バレット・オブ・バレッツ》のプロモーション映像だ。

　だが、見とれている余裕は今の俺にはない。少女に引っ張られるまま、右奥の一角へと急ぐ。

　壁際には、縦長の機械がずらりと数十台並んでいた。コンビニに置いてある、ＡＴＭやコンテンツベンダーを兼ねたマルチ端末とよく似ている。

　俺をその一台の前へと導き、少女は早口に言った。

「これで大会のエントリーをするの。よくあるタッチパネル式端末だけど、操作のやりかた、大丈夫そう？」

「はい、やってみます」

「ん。私も隣でやってるから、解らなかったら訊いて」

　パネルで仕切られた右隣の端末に向かう少女に小声で礼を言ってから、俺は画面に眼を落した。

　モニターに映し出されているホーム画面には《ＳＢＣグロッケン総督府》と表記されており、驚いたことにメニューも含めてすべてが日本語だ。ダイブ前に現実世界のネットでＧＧＯのオフィシャルサイトを見た時は全て英語で閉口したものだが、どうやらゲーム内はある程度のローカライズが行われているらしい。

　指先でメニューをると、すぐに第三回バレット・オブ・バレッツ予選エントリーのボタンが見つかった。当然押す。すると、画面は名前や職業など各種データの入力フォームへと移行する。残り時間、あと百八十秒。

　ゲーム内なんだから、キャラネームなんかシステムが勝手に参照してくれよ、だいたい俺の職業って何なんだ……と内心で文句を垂れつつフォームをむと、一番上に驚くべきし書きがあった。

　く、【以下のフォームには、現実世界におけるプレイヤー本人の氏名や住所等を入力してください。空欄や虚偽データでもイベントへの参加は可能ですが、上位入賞プライズを受け取ることはできません】。

　これには、一瞬指が止まらざるを得ない。俺の主目的は、大会でできるだけ悪目立ちして《死銃》氏のターゲットにしてもらうことだが、賞品の二文字についクラリと来てしまうのはＭＭＯゲーマーのだ。だってそういう賞品は、たいてい通常プレイでは入手不可能な激レア装備だったりするわけで…………。

　ふらふらと指が氏名欄に吸い寄せられて、現れたホロキーボードに《桐ヶ谷》のＫを打ち込もうとしたその寸前で、俺はどうにか思いまることに成功した。

　今回、俺がゲームを楽しみに来ているわけではない。謎のプレイヤー《死銃》と接触し、その能力のを見極めることが第一の任務だ。もし、仮に、万が一《死銃》に何らかの力があるのなら、ゲーム内でリアル情報をすことは賢明とは思えない。可能性で言えば、《死銃》が運営サイドの人間で、全プレイヤーの登録データに自由にアクセスできるということだって絶対ないとは言えないのだ。

　レア賞品の誘惑をどうにか振り切り、俺は泣く泣く全フォームを空欄にしたまま、一番下のＳＵＢＭＩＴボタンを押した。

　再び画面が切り替わり、俺のエントリーを受け付けたの文章と、予選トーナメント一回戦の時間が表示される。日付は今日、時間は――わずかに三十分後だ。

「終わった？」

　不意に、水色の髪の女の子が隣から声を掛けてきた。どうやらあちらも無事にエントリーを完了できたらしい。ほっとしながら頷く。

「ええ、なんとか。……ほんとに、何から何までありがとうございます。その上、すごい迷惑かけちゃって……」

　俺の謝罪に、女の子は小さく微笑んだ。

「いいよ、バギーで走るの、ちょっと楽しかったし。それより、予選のブロックはどこだった？」

「ええと……」

　もう一度画面を見て答える。

「Ｆブロックですね。Ｆの三十七番」

「あ……そっか。同時に申し込んだからかな、私もＦブロックだよ。十二番だから……良かった、当たるとしても決勝だね」

「良かった、って、何でです？」

「予選トーナメントの決勝まで行けば、勝ち負けにかかわらず本戦のバトルロイヤルには出られるの。だから、私たちが二人とも本戦に出場できる可能性はゼロじゃないわけ。でも、もし決勝で当たったら、予選だからって……」

　猫を思わせる瞳をくるっとめかせ、

「手は抜かないけどね」

「ああ……なるほど。もちろん、当たったら全力で戦いましょう」

　と笑顔で答えておいて、モニタをホーム画面に戻す。そのついでに、俺はちょっとした疑問を口にした。

「それにしても、洋ゲーにしてはこの端末の日本語はしっかりしてますね？　公式サイトは英語オンリーだったのに」

「ああ……、うん。運営体の《ザスカー》っていうのはアメリカの企業なんだけど、このサーバーのスタッフには日本人もいるみたい。でも、ほら、ＧＧＯって日本でもアメリカでも、法律的には結構グレーらしくて」

「《通貨還元システム》のせいですね」

　俺の言葉に、少女はかすかな苦笑をませながらく。

「そう、ある意味、私営ギャンブルだもんね。だから、表向きのホームページとかには最低限の情報しかないんだ。所在地も載ってないんだから徹底してるよね。キャラ管理とか、通貨還元用の電子マネーアカウント入力とか、ゲームに関する手続きはほとんど中でしかできないの」

「何て言うか……凄いゲームですね」

「だから、リアル世界とはほぼ完全に切り離されているんだけど……でも、そのせいで、今の自分と、現実の自分も、まるで別人みたいに……」

　ふと、女の子の瞳を薄い影が横切った気がして、俺は瞬きした。

「……？」

「う、ううん、なんでもない、ごめん。――そろそろ、予選の会場に行かないと。って言っても、ここの地下なんだけどね。準備はいい？」

「ええ」

　俺が頷くと、少女は「こっち」と再び俺の手を引き、総督府一階ホールの正面奥へと向かった。その壁際にはエレベータが何台も並んでいて、いちばん右側の扉脇の下降ボタンがな指先で押される。

　すぐに扉がスライドし、少女はするりと中に踏み込むと、今度は【Ｂ20Ｆ】のボタンに触れた。どうやらこのタワーは、上にも下にも長いらしい。リアルな落下感と減速感が訪れ、ドアが開く。

　その向こうの暗闇を見た途端――俺は思わず息を詰めていた。

　一階ホールと同じくらい広い、半球形のドームだ。照明はギリギリまで絞られ、所々に設置された、に覆われたアークが申し訳程度の光を放っている。

　床や柱、壁は全て、黒光りする鋼板か赤茶けた。ドームの壁際には、無骨なデザインのテーブルがずらりと並ぶ。そして天頂部には、巨大な多面ホロパネル。しかし画面は漆黒に染まり、ただ【ＢｏＢ３　Ｐｒｅｌｉｍｉｎａｒｙ】という文字と、残り二十八分弱となったカウントダウンだけが深紅のフォントで表示されている。

　だが、俺を緊張させたのは、それらの光景や、低く流れているメタル系のＢＧＭではなかった。

　壁際のテーブルや、床から伸びる鉄柱の傍らにたむろする多くのシルエット――正確には、彼らの発する気配。

　ゲームの中なのに、陽気に騒いでいるものは全くいない。数人ずつ固まって低く囁きを交わすか、あるいは独りで押し黙っているかのどちらかだ。彼らが、間もなく開始されるＢｏＢの予選参加者なのは明らかで、そしてもう一つ明白なことがあった。ほぼ全員が、骨の髄まで仮想世界に染まりきった、ベテランＶＲＭＭＯプレイヤーだということだ。

　――いや、総ダイブ時間を比べれば、あるいは俺はこの空間にいる誰よりも長いかもしれない。何せ、、去年の丸二年間、一秒たりともログアウトしなかったのだ。

　しかし、プレイヤーには《プレイスタイル》というものがある。俺がほぼ専門だったのに対して――彼らは皆、筋金入りの野郎に違いない。光沢のないヘルメットや、分厚いフードの下から俺に向けて放たれる、なまでに情報を探ろうとする鋭い視線がそれを語っている。

　俺は、今年の春にＡＬＯが現行の運営体制に移管されてのち、対人戦闘はほとんど経験していない。その長すぎるブランクは、きっと俺のＰｖＰ勘を大いにび付かせているだろう。男たちの射るような視線にされてしまったのがその証拠だ。

　――こいつは、いよいよ難しい仕事になってきたぞ、菊岡さん。

　胸中で思わずそう呟いた俺の右が、軽く押された。見れば、水色の髪の少女がそうに首を傾げている。

「……どうしたの？」

「い、いえ、なんでも……」

　慌てて囁き返すと、少女は軽く頷き、同じく小声で言った。

「まず、控え室に行こう。あなたも、さっき買ったに装備替えしないと」

　そして、すたすたとプレイヤーたちの間を歩き始める。その足取りはまったく自然で、緊張の響きは皆無だ。と言って、彼女が周囲に無視されているというわけでもない。それどころか、男たちは俺に対してよりも遥かに強い、ギラつくような戦意を少女に浴びせかけているようだ。中には、膝に乗せた恐ろしげな銃を音高くして見せる者までいる。

　これほどのプレッシャーをさらりとスルーできるとは、いったいどういうをしているのか。俺はいよいよ驚きつつ、砂色のマフラーを追う。

　ドームの奥まった場所には、テーブルの代わりに素っ気ない鉄のドアが幾つも並んでいた。少女は緑色のインジケータが点灯している扉を開け、俺を中に導くと、背後で閉まったドア内側の操作パネルに触れた。がちゃん、という音とともに、インジケータランプが赤に変わる。

　内部は、やや狭いロッカールームふうの空間となっていた。もちろん、俺たちの他には誰もいない。

「……ふう」

　部屋の中央まで進むと、少女は軽く息を吐き、呟くように言った。

「まったく……お調子者ばっかり」

「へっ……お、お調子者!?　さっきのイカツイ人たちが!?」

　ドームに満ち満ちていたたちの姿を思い出しつつ聞き返すと、少女は当然と言わんばかりに頷く。

「そうよ。試合の三十分も前からメインアームを見せびらかすなんて、対策して下さいって言ってるようなもんじゃない」

「あ……、ああ……なるほど……」

「あなたも、とファイブセブンは、自分の試合直前に装備したほうがいいよ」

　薄く微笑みながらそう口にした少女は、俺がこくこくと頷くと、くるりと背を向け。

　先刻の台詞の数十倍は俺の度肝を抜く行動に出た。

　ち、右手を振ってメインメニュー・ウインドウを出すと、装備フィギュアの一括解除ボタンを押したのだ。

　サンドカラーのマフラーが消え、少し濃いカーキ色のジャケットが消え、ゆったりしたカーゴパンツが消え、無地のＴシャツが消えた。

　今や少女が身に着けているのは、機能素材っぽい光沢をもつ、小面積の下着のみだった。

「う……うわあ!?」

*［＃挿絵img0514.png］*

　俺は裏返った声を発し、慌てて右手で顔を覆った。すると指と指の隙間で、少女が不思議そうな顔で振り向いた。

「何してるの？　あなたも早く着替えないと」

「は、はい、ええと、そのっ……」

　ＧＧＯにダイブして以来最大級の動転に見舞われつつも、俺は必死に考えた。

　この状況下で取り得る選択肢はそう多くない。一つ、何かの言い訳を見つけて部屋の外に逃れる。二つ、あくまで女のフリを押し通してボディアーマーだけ装備する。しかしどちらも、この親切な少女に対してまったく不誠実なことしい。

　やむなく俺は、彼女がこれ以上の武装解除を行うというカタストロフが到来する前に、第三の選択肢へと突貫した。

　びゅんと最大速度で頭を下げ、同時にメインメニューからネームカードを実体化させ、両手で少女に差し出したのだ。

「あ、あの……すみません！　今まで自己紹介もしなくて……私、いや俺、こういう者です！」

「え？　お……オレ？」

　不思議そうな声とともに、指先からカードは離れる感触。

「キリ……ト。ふうん、面白い名前だね……………………って……………………」

　俺はギルド、いやこの世界では《スコードロン》に所属していないゆえ、ネームカードには名前ともうひとつ――性別表記しか存在しない。

「……って、え……？　でも、あなた、だって………………」

　とした声が流れるとともに、真下を向いた俺の視界の上端で、可愛らしい素足が一歩遠ざかった。

「うそ…………お、男…………？　そのアバターで………………？」

　そして、沈黙。

　ロッカールームに満ちた緊迫感に耐え切れず、俺は顔を上げかけた。

　途端、何か白いものが猛烈なスピードで飛んできて、俺の左頬にし、紫のエフェクトフラッシュをらせた。

　それが少女の右であると理解したのは、インパクトの勢いでのように回転し、頭のまわりにお星様を幾つか明滅させながら床にへたりこんだ後のことだった。

「ついてこないで」

「で、でも、この後どうすればいいのか……」

「ついてこないで」

「で、でも、他に知り合いいないし……」

「ついてこないで」

　という囁き声による会話の間にも、俺は前を行く水色の髪を必死に追いかけた。

　少女は、デザートカラーのミリタリージャケットに同系色の耐弾アーマー、コンバットブーツという出で立ちに変わっている。街用装備と共通しているのは、首に巻いたマフラーだけだ。先の忠告どおり、武器はまだオブジェクト化していない。

　俺の格好も似たようなものだが、こちらは全身ナイト・カモとでもいうのか、ほとんど黒いに近い迷彩柄だ。今回ばかりは趣味を捨て、汎用性のある色のほうがいいのかと思ったが、ランダムに決定されるマップタイプの全てに対応する迷彩の色柄を揃えるには予算がとても足りないと言われ、結局は好みで選んでしまった。

　そのアドバイスをしてくれた当人は、俺の一メートル先を振り向きをせずに歩いていく。

　彼女の怒りは当然ではあるものの、俺だってべつに「女です」と嘘をついたわけでも、語尾に「だわ」と付けたわけでもないのだ。そりゃ確かに勘違いを利用したかもしれないが、そっちだって着替えるなら着替えるで、ひとこと言ってくれればそれなりの対処の仕方というものが……。

　だんだん愚痴っぽくなる思考を抱えつつ、半ばヤケでマフラーのにくっついて歩いていると、不意に少女がぴたりと両足を停止させた。すでに、広大なドームを半周している。

　同じく立ち止まった俺の目の前で、少女は振り向いた。

　藍色の瞳がじろりと俺を睨みつける。猫っぽい、と言うよりもすでにレベルのさだ。小さな唇が大きく空気を吸引し、うわあついにられるのか、と俺は首を縮めたが、発せられたのは勢いのいいため息だった。

　どすん、と傍らのボックス席に腰を下ろし、少女は再びそっぽを向いた。俺もおそるおそる、向かい側に座る。

　ドーム中央のホロパネルを見上げると、予選開始までのカウントダウンは十分を切っている。この後どうすればいいのか、俺はまったく知らない。開始前に更にどこかに移動しなくてはならないのか、あるいは何らかの手続きが必要なのか、それらの情報がどこに書いてあるのかすらわからないのだ。

　首を縮めつつもそわそわ体を動かす俺を、少女は再度した。そして再度、深い深いため息。

「…………最低限のことだけ説明しておく。その後は本当に敵同士だから」

　という言葉がごく低く発せられ、俺は思わずほっと頬を緩めた。

「あ、ありがとう」

「勘違いしないで、あなたを許したわけじゃない。――あのカウントダウンがゼロになったら、ここにいるエントリー者は全員、どこかにいる予選一回戦の相手と二人だけのバトルフィールドに自動転送される」

「ふ、ふむふむ」

「フィールドは一キロ四方の、地形タイプや天候、時間はランダム。最低五百メートル離れた場所からスタートして、決着したら勝者はこの待機エリアに、敗者は一階ホールに転送される。負けても武装のランダムドロップはなし。勝ったとして、その時点で、次の対戦者の試合が終わってればすぐに二回戦がスタート。終わってなければ、それまで待機。Ｆブロックは六十四人だから、五回勝てば決勝進出で本大会の出場権が得られる。――これ以上の説明はしないし、質問も受け付けない。」

　ぶっきらぼうな言葉のわりにはな解説によって、どうやら予選トーナメントの概略は想像できた。俺は改めて少女に礼を言った。

「だいたいわかったよ。ありがとう」

　すると彼女はもういちど、一瞬だけ俺に視線を投げ、またすぐに横を向いた。唇が動き、ごくごくかすかな声が流れる。

「――決勝まで来るのよ。これだけ色々レクチャーさせたんだから、最後のひとつも教えておきたい」

「最後？」

「敗北を告げる弾丸の味」

　その言葉に、俺は思わず微笑していた。や苦笑ではなく、本心からの笑みだ。こういうメンタリティの持ち主は、まったくもって嫌いではない。

「……楽しみだな。しかし、君のほうは大丈夫なのかい？」

　少女はフン、と小さく息を吐き出した。

「予選落ちなんかしたら引退する。今度こそ――」

　広いドームに満ちる敵手たちを凝視する瞳が、強烈な色の光を放った気がした。

「――強い奴らを、全員殺してやる」

　その言葉はほとんど実際のボリュームを伴わずに発せられ、微小な振動として直接俺の聴覚に響いた。少女の唇が動き、獰猛な獣のような笑みを形作った。俺の背筋を、久しく感じたことのなかった、氷のようなが駆け上った。

　男たちの放つプレッシャーを、この子が意にもさなかったのは当然だ。

　なぜなら、少女は彼らよりも圧倒的に強い。ＶＲＭＭＯプレイヤーとしての技量も――そしてそれを支える、本人のメンタルに於いても。

　息を呑み、黙り込んだ俺をちらりと見て、少女は笑みを消した。少し考えるように視線を止めてから、右手を振ってメニュー・ウインドウを出す。短い操作で、その指先に小さなカードが出現する。

　それをテーブルの上に滑らせ、俺が受け止めると、少女は言った。

「こうして話すのは今日は最後だろうから、ここで名乗っておくわ。――それが、いつかあなたを倒す者の名前」

　無言で眼を落とす。表示された文字は――【Ｓｉｎｏｎ】。性別は、もちろん。

「シノン」

　俺が呟くと、少女は水色の髪を揺らして軽く頷いた。俺ももう一度、改めて名乗った。

「キリトだ。よろしく」

　無意識の動作で卓上に右手を差し出したが、シノンという名の少女は当然のように無視し、ぷいとそっぽを向いた。苦笑し、手を下ろす。

　シノンはそれきり黙り込み、もう口を開こうとはしなかった。

　ドーム天頂のモニターを見上げると、残り時間はまだ五分も残っている。椅子の上でおとなしく膝でも抱えているか、それとももう一度話しかけてみるかと悩んだが、結論を出す前に、俺の耳は近づく足音をえた。

　顔を上げると、テーブルに一直線に歩み取ってくるのは、額にの長髪を垂らした背の高い男プレイヤーだった。

　ダークグレーにもう少し明るいグレーのパターンが入った、直線的な迷彩柄の上下を身に付けている。肩にはやや大型の機関銃――多分サブマシンガンではなくアサルトライフルという奴を下げ、スリムな体に似合った鋭い顔立ちだ。アーマー類も最低限で、戦場ではさぞかし素早く動くだろうと感じさせるものがある。歴戦の兵士というよりは、特殊部隊の隊員といった雰囲気。

　男は、暗がりにひっそり座る俺には眼もくれず、シノンをまっすぐ見て、口元に笑みを刻んだ。途端、鋭利なアバターが少年の柔らかさを帯び、俺は小さく瞬きする。

「やあ、遅かったね、シノン。遅刻するんじゃないかと思って心配したよ」

　男の口から発せられたれ馴れしい声に、俺はまたシノンが言葉の弾丸をぶっぱなすぞ、と思って首をすくめた。しかし意外や、水色の髪の少女は身にまとった氷点下のベールをふっとらげ、あまつさえ唇に微笑まで浮かべて応じた。

「こんにちは、シュピーゲル。ちょっと予想外の用事で時間取られちゃって。あれ、でも……あなたは出場しないんじゃなかったの？」

　すると、シュピーゲルと呼ばれた男は、照れくさそうに笑いながら右手を頭に触れさせた。

「いやあ、迷惑かもと思ったんだけど、シノンの応援に来たんだ。ここなら、試合も大画面で中継されるしさ」

　どうやら二人はフレンド、あるいはギルドメンバー的な間柄らしい。シノンが体をずらすと、シュピーゲルは当然のようにその隣に腰掛ける。

「それにしても、予想外の用事って？」

「ああ……ちょっと、そこのヒトをここまで案内したりとか……」

　シュピーゲルの問いに、シノンが打って変って冷たい眼を一瞬だけこちらに向けた。俺はやれやれ、と思いながら縮めていた首を伸ばし、今初めてこちらに気付いたらしきシュピーゲルに軽くした。

「どーも、そこのヒトです」

「あ……ど、どうも、はじめまして。ええと……シノンのお友達さん、ですか？」

　それなりに雰囲気のある男ではあるが、どうやらシュピーゲルはその鋭い外見に似合わず、礼儀正しい性格のようだった。あるいは――やはり彼も、俺の性別を誤解しているのか。

　ここでどう答えると面白いかなあ、などと思いながら俺が言葉を探していると、シノンが短く吐き捨てた。

「されないで。男よ、そいつ」

「えっ」

　目を丸くするシュピーゲルに、仕方なく普通に名乗る。

「あー、キリトと言います。男です」

「お、男……。え、ていうことは、えーと……」

　シュピーゲルは困惑した表情で、俺とシノンを交互に見る。どうやら、シノンが男性プレイヤーと同行しているという状況が呑み込めないらしい。

　へえ、ほう、ふーん、と思った俺はちょっとした心で、彼の混乱に燃料を注いでみることにした。

「いやあ、シノンにはすっかりお世話になっちゃって、いろいろと」

　途端、シノンが青色レーザーのような視線で俺をみ、語気荒く囁いた。

「ちょっと……やめて、私は世話なんてしてないでしょ。だいたいアンタに、シノンなんて呼ばれる覚えは……」

「またそんな、つれないことを」

「つれないもなにも、赤の他人よ!!」

「えー、武装のコーデまで面倒見てくれたのに？」

「そっ……それは、アンタが……」

　と、そこまで掛け合いを続けた時だった。

　突然、ドーム内に控えめのボリュームで流れていたＢＧＭがフェードアウトし、代わりに荒々しいエレキギターによるファンファーレがいた。

　続けて、甘い響きの合成音声が、数百人の頭上に大音量で響き渡った。

『たいへん長らくお待たせしました。ただ今より、第三回バレット・オブ・バレッツ予選トーナメントを開始いたします。エントリーされたプレイヤーの皆様は、カウントダウン終了後に、予選第一回戦のフィールドマップに自動転送されます。幸運をお祈りします』

　ドーム内に、盛大な拍手と歓声が沸き起こる。カタタタッという自動銃の作動音や、甲高いレーザーの発射音が続き、天井に向けて色とりどりの光がまるで花火のように打ち上げられる。

　喧騒の中、シノンはすっくと立ち上がり、俺に右手の人差し指を突きつけた。

「決勝まで上がってくるのよ。その頭、すっ飛ばしてやるから」

　俺も腰を上げ、にやりと笑って答えた。

「デートのお招きとあらば、参上しないわけにはいかないな」

「こっ、この……」

　進行していた二十秒のカウントダウンがゼロに近づき、俺はシノンに手を振ってから、転送に備えようと前を向いた。そして、じっと俺を見ていたシュピーゲルと視線が合った。

　その鋭い眼に、明らかな警戒と敵意の色を見て、これはちょっとやりすぎたかな、と思ったのもの間――。

　俺の体を青い光の柱が包み、たちまち視界の全てを覆い尽くした。

　転送された先は、暗闇の中に浮かぶ一枚のパネルの上だった。

　目の前には薄赤いホロウインドウがあり、上部に【Ｋｉｒｉｔｏ　ＶＳ　餓丸】と大きく表示されている。名前にアルファベットしか使えなかったＳＡＯと異なり、ＧＧＯは日本語ＯＫらしい。ウエマルと読むのであろう対戦相手の名前に、もちろん見覚えはない。そしてウインドウ下部には、【準備時間：残り58秒　フィールド：失われた古代寺院】という文字列。

　おそらく、指定されたフィールドに適合する装備を整えるための準備時間として一分間が与えられているのだろうが、予備の武装も、マップの知識も持ち合わせていない俺にはあまり意味がない。右手でメニューを呼び出し、ＡＬＯのものとよく似ている装備ウインドウの武器欄に、主武装として《カゲミツＧ４》なる固有名の、副武装として拳銃の《ファイブセブン》をセットする。装備忘れの防具がないかざっと確認し、ウインドウを消去。

　残り時間のデジタル数字がのろのろと減少していくのを待つ間、俺はあるひとつのな可能性について、ぼんやりと考えていた。

　あのシノンという少女が、一瞬見せたな微笑。どんなやすらも貫通するライフル弾のような、凝縮された殺気。

　まるでテレパシーの如く俺の脳裏に響いた彼女の声を思い出す。

　強い奴らを、全員殺してやる――。ある意味子供っぽいとも言える、あまりにな台詞ではあるが、俺はあの時、ＳＡＯ時代を通しても何度とはえがないほどのを感じていた。ゲーム内のロールプレイを超えたリアルな意思が、彼女の小さなから強烈に放射されたかのようだった。

　電子信号が作り出す仮想の世界に於いて、あそこまでの意思力を感じされるプレイヤーにはほとんど会ったことがない。女性プレイヤーでは、端的に言えば、本気になった時のアスナ以外には知らない。いや――《》、そしてそれ以前は《狂剣士》とまで呼ばれたアスナでも、あれほどしい印象を俺に与えたことはなかった。

　有り得るだろうか？　あの水色の髪の少女が、俺の探す《死銃》その人である、というようなことが？

　が俺に聞かせた死銃の声だという音声ファイルの、あの金属がむような不快な絶叫と、シノンの澄んだ声とはまるで違う。だが、ＧＧＯはあくまで、ＳＡＯとは異なる通常のゲーム世界だ。一人のプレイヤーが複数のキャラクターを所持し、ログインごとに使い分けるということはごく当たり前に行われている。

　それに、口ぶりからすれば、シノンはバレット・オブ・バレッツ本大会進出に絶対の自信を持っているようだった。死銃はきっとその大会に出てくる、という俺の予測が正しければ、候補者は三十人にまで絞られる。シノンはその一人、ということになる。

　偽りのない心情としては、こんな可能性は検討したくない。俺をショップに案内し、あれこれ説明してくれた時の彼女からは、まったくと言っていいほど殺気を感じなかった。それどころか、そこはかとない寂しさ、人恋しさを漂わせていたような気すらした。

　いったい、どちらが本物のシノンなのだろう。

　――いや、ここでいくら考えても結論は出ない。剣を交えれば、いや銃を撃ち合えば、きっと何かが解るだろう。

　そう思って、伏せていた視線を上げたその瞬間、残り時間表示がゼロになった。俺の体を、再度の転送エフェクトが包んだ。

　次に放り出されたのは、なの空の下だった。

　甲高い笛のような音を引いて、風が吹き過ぎていく。上空では黄色い雲がれんばかりに流れ、足元のが激しく揺れる。

　すぐ傍らには、イオニア式だかコリント式だかの巨大な円柱がそびえていた。三メートルほどの間隔を置いて、コの字型に何本も連なっている。ある柱は上部が崩れ、あるいは完全に倒れて、はるか昔に滅びた神殿のといっただ。

　俺はとりあえず、手近な柱にぴたりと体を寄せてから素早く周囲を見回した。

　色せた草原がゆるやかに波打ちながら四方にどこまでも続き、低いのには、今いる場所と似たような遺跡が点在している。シノンの説明によればフィールドは千メートル四方ということだが、地平線までは数十キロはありそうだ。おそらく小川やの形を取った移動制限領域が設定してあるのだろう。

　更に彼女の解説を思い出す。対戦者は、現在少なくとも五百メートル以上離れた位置に出現しているはずだが、視界内に人影はない。きっと、俺と同じようにどこかの遺跡に隠れてるのだ。敵の位置を教えてくれるカーソルのようなものは存在しないので、まず相手を見つける所から始めねばならない。

　このまま俺も隠れ続けて、敵がれを切らせて動いたところを発見するという作戦も考えられるが、どうも《待ち》は性分ではなかった。それよりも、とりあえずいちばん近い他の遺跡まで全力ダッシュして、えて銃撃されることで敵の位置を確認する方が手っ取り早いなあ……と思いながら、俺は何気なく左手で、腰に装備されているハンドガン――《ファイブセブン》の感触を確かめた。

　と、ひときわ激しい風がざああっと吹き渡って、周囲の草原を激しく波打たせた。突風が過ぎ去り、草が再び立ち上がった、まさにその瞬間。

　俺のすぐ目の前、わずか二十メートルほど離れた草の中から突然、音も無く人影が立ち上がった。

　すでに両手でぴたりと構えられたアサルトライフル、その機関部に寄り添う茶色い、顔の上半分を覆うレンズ付きのゴーグルと、ダミーの草が伸びたヘルネットなどが一瞬で網膜に焼きつく。フィールドには俺と対戦相手しかいないのだから、奴が《ウエマル》であろうことは確実だ。

　いつのまにこんな距離まで接近されたのか、まるで判らなかった。その理由の一端は、ウエマルが身に付けた迷彩服にあるのは明らかだった。周囲の草むらとまったく同じカーキ色の地に、細いのパターンが入っている。なるほど、これがあの六十秒の準備時間の効用か、と思う間もなく。

　敵が右肩に構える黒いライフルから、数十本の赤いライン――《弾頭予測線》が伸び、俺を含む周囲の空間をびっしりと貫いた。

「うわっ!!」

　俺は思わず悲鳴を上げ、同時に思い切り地面を蹴り、跳んでいた。もっとも予測線の密度が薄かった方向――上空へ向かって。

　直後、敵のライフルがカタタタタタ！　と軽快な音を立て、右足の部分に立て続けに二回の衝撃を感じた。視界の左上に表示された俺のＨＰバーが、がくん、がくんと合計一割も減少する。とても全てけ切れる弾数ではない。シノンが警告してくれた、《フルオート射撃》という言葉を今更のように思い出す。

　俺は空中でくるりと宙返りをし、背後の、半ばから折れた円柱の上面に着地した。とりあえず反撃してみようと、左手で腰のホルスターからファイブセブンを抜く。

　が、それを構える余裕すらも敵は与えてくれないようだった。再び、俺の身体に無数の予測線が突き立った。

「わあああ」

　情けない悲鳴を上げ、円柱の後ろに転げ落ちる。が、更に一弾が左腕をめ、ＨＰが容赦なく削られる。

　降り注いだ弾丸の雨のほとんどは石の柱に命中し、ビシビシビシと音を立てて細かい破片を飛散させた。必死に両手両足を縮こまらせ、円柱の陰に全身を隠す。

　――いやはや、これは確かに剣対剣の戦闘とはまったく違う！

　あの弾避けゲームのＮＰＣガンマンによる銃撃は、インターバルを置いての最大六連射で、それを避けるのにも全神経の集中を要したのだが、いくらなんでもこんな――秒間十発以上とさえ思える連射には手も足も出ない。

　俺の右腰に下がる光剣《カゲミツ》でウエマルのをぶった斬るには、どうしたってすぐ目の前まで接近しなくてはならないが、そこまでり着く前に穴だらけにされ、全ＨＰが吹っ飛ぶのは必至だ。

　完全に回避するのが不可能なら、どうにかして銃弾を《防御》するしかない。だが、この世界には、レーザーをする《防護フィールド》はあっても実弾を防いでくれるマジックシールドのような代物は存在しない。ＳＡＯなら、剣を盾の代わりに使う《武器防御スキル》というものがあったのだが。

　俺はふと、ベルトにカラビナでぶら下がったままの光剣に手を添えた。この剣で、せめて何発が銃弾を防ぐことができれば、不可能ではないだろう、だって昔の大作ＳＦ映画では実に軽々と弾きまくっていたではないか。アメリカの企業が作ったゲームなら、きっとあのシーンを再現できるに違いない。だが、そんな離れを実現するためには、襲ってくる弾の軌道を正確に予測する必要が……

　いや――。

　いや、それは可能だ。可能なはずだ。なぜなら、弾の軌道は、《予測線》がきっちり教えてくれるではないか。

　俺はごくりとを飲み込み、右手で光剣を強く引いてベルトから外した。

　現在、銃撃は一時的に止んでいる。おそらく、ウエマルは再び草むらに身を沈め、左右どちらかから回り込んでくるつもりだ。

　俺は眼を閉じ、聴覚のみに集中した。

　あいかわらず風がびゅうびゅうと鳴っている。そのしいサウンド・エフェクトを、意識から排除する。次に、波立つ草原の乾いたれの音のみに集中、パターン化されたそのリズムの中に、イレギュラーなサウンドを探す。

　これは、各種ノイズの音成分がくっきりと分離されているＶＲ空間ならではのテクニックで、ＳＡＯ時代には《システム外スキル》としてかなりお世話になった。Ｓ級食材の《ラグー・ラビット》あたりは、この技を使わなければ仕留めることはほぼ不可能だったものだ。

　――――果たして。

　左斜め後方、七時の位置に、九時方向へとゆっくりと移動する不規則音源を俺の耳はえた。二、三秒動いては停止し、こちらを探る気配。

　敵の移動が再開し、止まり、そしてまた動き始めた、その瞬間。

「い……けッ！」

　俺は自分に叫ぶとともに思い切り地面を蹴り飛ばし、敵のむ位置へと一直線の全力ダッシュを開始した。

　よもや、草むらにしている自分に向かって俺がまっすぐ突っ込んでくるとは、ウエマルも想像しなかったのだろう。枯草の中から体を起こし、膝立ちになってライフルを構えるまでに一秒半ほどのタイムラグがあった。

　その時点で、俺は敵との距離約二十五メートルを半分近く詰めていた。走りながら、右手に握ったフォトンソードのスイッチを親指でスライドさせる。ブン、と頼もしい振動音とともに、青紫色に輝く刃が長く伸びる。

　三たび、ウエマルのアサルトライフルから伸びる十数本の着弾予測線が表示された。

　今までは反射的に逃げ場を探してしまったが、今度は両眼を前だけにえる。首筋をちりちりと撫でる恐怖をこらえつつ観察したところ、細く赤いラインは全てが同時に現れたわけではなく、ほんの少しずつの時間差があった。その差がつまり、ライフルの銃口から吐き出されてくる弾丸の順序、というわけなのだろう。

　ダッシュする俺の、現実と比べれば相当に小柄な体をしっかりと捉えている予測線は、合計で六本存在した。あとは皆、上下左右にわずかずつ外れている。ごく近距離であることを考えると、敵のライフル――もくしは射手自身の命中精度は、案外大したことはないのかもしれない。

　久々のＰｖＰがもたらす緊張感に、ようやく俺自身のギアも戦闘モードへとシフトし始めたようだった。視界のマージン部分が放射状に引き伸ばされ、ターゲットの姿だけが鮮明になっていく、懐かしいアクセル感。徐々に速度を落とす時間の中にあって、意識だけが猛烈なスピードで駆動する。

　敵のライフルの銃口が、パッとオレンジ色に光った。

　その瞬間、俺の体をポイントする六本のライン、その初弾と次弾の軌道を、光剣の刀身で寸分の狂いもなくる。

　バッ、バシッ!!　と鮮やかなオレンジ色の火花が、光の刃の表面に弾けた。それを意識した時にはもう、俺の右腕は電光のようにき、三弾め、四弾めの軌道を結ぶ線分にフォトンソードを重ねている。再度、銃弾が高密度のエネルギーによって弾かれる衝撃音。

《当たらないはず》の銃弾どもが耳元で立てる甲高い唸りを一切無視して突進し続けるのはかなりの精神力を要する行為だったが、俺は歯を食縛って更に剣を動かした。

*［＃挿絵img0515.png］*

　五……そして六発目！　命中弾を余さず剣で弾き飛ばすことにどうやら成功した俺は、残る距離を一気に駆け抜けるべく、全力で地面を蹴る。

「う……そだろッ！」

　濃いに囲まれたウエマルのががくんと落ち、大きく開かれた口から驚愕の声が漏れた。だが、それでも奴の両手は止まらなかった。慣れた動作で空になったマガジンをリリース。同時に腰からスペアを引き抜いて、ライフル本体に叩き込もうとする。

　そうはさせじと、俺は左手に握っていたファイブセブンを男に向けた。引き金に指が触れた途端、敵の胸部分を中心に薄い緑色の円が表示されて驚かされるが、構わず立て続けに五回、トリガーを絞る。

　以外に軽い反動が肘から肩へ伝わり、半透明サークルの内部、ウエマルの肩とわき腹に二発が命中した。残り三発は背後の草むらへと消えていったが、どうやら当たった弾は奴の防弾装備を貫通してダメージを与えたようだった。画面右上のＨＰゲージが一割弱減少する。ウエマルはぐらりとよろめき、ほんの一瞬動きを止める。

　その時間で充分だった。

　間合いに入った瞬間、俺は体を小さく右にり――。

　仮想の大地を突き破る勢いで踏み込むと同時に、ダッシュのスピードを余さず乗せた全力の直突き、ＳＡＯ世界であれば《ヴォーパルストライク》と呼ばれた必殺の一撃を、敵の胸板に叩きこんだ。

　まるでジェットエンジンのような振動音とともに、光の刃はあっけなく根元まで貫通した。行き場の無いエネルギーの嵐が、一瞬敵の体内で吹き荒れるような感触。

　直後、凄まじい光と音が俺の右手元から円錐状に放射され、敵の身体を無数のポリゴン片に変えて虚空に拡散させていった。

　れるような戦闘の余韻を全身に感じながら、俺はゆっくりと体を起こした。

　ヴヴン、と音をさせて光剣を左右に切り払い、一瞬背中に収めそうになってから慌ててスイッチを切る。

　右腰のスナップリングに剣を吊り、左手のハンドガンもホルスターに収めると、ようやく溜めていた息を長く吐き出した。黄昏の空を仰ぎ見ると、垂れ込める雲をスクリーンにして、コングラチュレーションの表示が浮かび上がった。

　一回戦は何とか勝った。光剣でライフルの弾を防御できたのはかなりの好材料だ。とはいえ剣きにもない集中力を要求され、俺の神経はすでにぷすぷすと焦げ臭い煙を上げている。

　このしんどい戦闘が、あと四回――。

　がくりと肩を落とす俺の体を、転送エフェクトの青い光が包んでいく。寂しい風鳴りが徐々に遠ざかり、大勢の人間が放つがそれに取って代わった時には、俺はもう待機エリアへと戻っていた。

　どうやら、場所も転送時と同じ壁際のボックス席付近のようだった。きょろきょろと左右を見るが、シノンとシュピーゲルの姿はない。シノンは戦闘中としても、彼女との関係は少々気になるあの男はどこに行ったのだろうと視線を周囲に広げると、少しドームの中央寄りの場所に、覚えのあるアバーン・カモの背中があった。俺の帰還に気付く様子もなく、天井のマルチモニタを一身に見上げている。

　同じように視線を上向けると、予選開始前は無愛想にカウントダウンだけしていた巨大画面に、今は幾つもの戦場が映し出されていた。砂漠やジャングル、あるいはで、拳銃やマシンガン、あるいはライフルをぶっ放しまくるプレイヤーたちの姿が、アクション映画さながらの迫力あるアングルで捉えられている。

　おそらく、現在同時進行している数百の試合のうち、交戦シーンだけを選んで中継しているのだろう。時折、プレイヤーが銃弾を受けて四散するたびに、フロアにたむろする無数のプレイヤーから大きな歓声が湧き上がる。

　どれどれ、シノンの試合は映っているかな、と思いながら俺も数歩前に進んだ。右上から一つずつ確認していくが、カメラが目まぐるしく動くのでなかなか見分けられない。彼女の髪の水色を探して、じっと視線を集中する。

　――だから、いきなり右耳のすぐ近くで声がした時は、心臓が止まるほど驚いた。低く乾いた、それでいて金属質な響きのある声が、直接聴覚に注ぎ込まれたかのようだった。

「おまえ、本物、か」

「……っ!?」

　反射的に飛びりながら振り向く。

　、と一瞬考えてしまった。

　もちろん本物を意味するわけではない。アインクラッド六十五層あたりの古城フロアに夜間出没するＭｏｂに、《ゴースト系》という奴がいたのだ。

　全身、ボロボロに千切れかかったダークグレーのマント。に下ろしたフードの中には漆黒の闇。その奥に、眼だけがかな赤に光る。

　待機ドームのおぼろな照明の下、俺の眼前に立つ何者かのその出で立ちは、ＳＡＯのゴースト系モンスターに限りなく酷似していた。だから俺は、反射的に飛びいて抜剣しそうになった。衝動を完全に抑え切れず、右手がぴくりと震えたほどだ。

　かすかにぎつつ、俺はそいつの足元を見た。すり切れたマントのから、ほんの少しだけ、薄汚れたブーツのつま先が覗いていた。

　幽霊ではなく、プレイヤーだ。当たり前の事実を確認し、俺は詰めていた息をそっと吐いた。

　よくよく見れば、赤い眼もべつにではなく、顔全体を覆う黒いゴーグルのレンズが光っているだけだ。初心者じみた反応をしてしまった自分と、マナー無視気味の至近距離からいきなり声を掛けた相手の両方にやや腹を立てながら、俺はぶっきらぼうにき返した。

「本物って……どういう意味だ？　あんた、誰だよ？」

　しかし、灰色マントのプレイヤーは名乗ることもなく、間合いを取った俺にわざわざもう一度接近してきた。今度はこちらも下がらず、わずか二十センチほどの距離から無機質な視線を受け止める。

　再び、何らかのボイス・エフェクターを使用しているのだと思われる、倍音の混ざった不快な声が切れぎれに響く。

「試合を、見た。剣を、使ったな」

「あ……ああ。別に、ルール違反じゃないだろ」

　応じた俺の声は、内心の動揺をアミュスフィアが馬鹿正直に再現し、ややれていた。それを看破したかのように、灰色マントは更に数センチ顔を近づける。

　次の声は、その距離でも集中しないと聞き取れないほど低い囁きだった。

「もう一度、訊く。お前は、本物、か」

　問いの意味を理解するよりも先に、俺は雷撃めいたひとつの直感に一撃され、その場に立ちすくんだ。

　――俺は、こいつを知っている!!

*［＃挿絵img0516.png］*

　間違いない。絶対にどこかで会っている。顔を見合わせ、言葉を交わしている。

　だが、どこで。ＧＧＯにログインしてから俺が喋ったのは、出現ポイントの傍にいたアバター・バイヤーの男と、買い物や大会エントリーのガイドをしてくれたシノン、そして彼女の友人のシュピーゲル、この三人だけだ。だから、この世界に於いてではない。

　ならばＡＬＯか？　アルヴヘイムで、それぞれ別のアバター同士で俺はこいつと出会っているのか？　必死に記憶のインデックスを操り、口調と気配に合致する知り合いがいないか考える。だがまるで思い当たらない。こんな、前に立っているだけで全身に鳥肌が立つような冷気を放散する奴と、俺は遭遇した覚えはない。

　どこだ。俺はどこで、こいつと…………。

　その時、ぼろぼろのマントが揺れ、中から細い腕が突き出した。俺は再び飛び退きそうになったが、マントと同じぼろ布のようなグローブに包まれた手は空だった。

　その手は空中に、俺に見える向きでウインドウを呼び出し、生気のしい動きで操作した。表示されたのは、現在進行中の第三回ＢｏＢ予選の組み合わせ一覧とおぼしき、六つのブロックに分かれたトーナメント表だった。

　針金のような指が、Ｆブロックを叩いた。そこだけが画面いっぱいに拡大される。もうワンクリック。更に真ん中あたりにズームする。

　俺の視線は、指が示したポイントに引き寄せられた。

　名前が二つ、並んでいる。

　左に【餓丸】。その右に【Ｋｉｒｉｔｏ】。右の名前から薄く光るラインが上へと伸びている。さっきの試合で俺がウエマルを下し二回戦に駒を進めたことが、すでにアナウンスされているのだ。

　指がわずかに動き、Ｋｉｒｉｔｏの名前を上から下へとなぞった。再び――声。

「この、名前。あの、剣技。……お前、本物、なのか」

　瞬間、三度目の、そして最大の衝撃。

　膝が震え、あやうくよろけそうになるのを、俺は必死にえた。

　この灰色マントのプレイヤーは――知っているのだ！

《キリト》という名前の出自。そして、俺がウエマルを倒すのに使用したソードスキル。その両方を、こいつは知っている。

　つまり……、つまり、俺がこのプレイヤーと出会ったのは、ＧＧＯでもＡＬＯでもなく。

　ＳＡＯ。《ソードアート・オンライン》。あのデスゲームの舞台となった浮遊城アインクラッドのどこかで、俺はこいつと遭遇した。

　ぼろマントの中に潜むアバターは……、いや、アバターと接続したアミュスフィアを装着する生身のプレイヤーは、俺と同じ、《ＳＡＯ》なのだ。

　いつの間にか、鼓動がのように鳴り響いている。暗いドームの中でなければ、俺のアバターの顔がになっていることが露見してしまうだろう。

　落ち着け、落ち着くんだ。それだけを脳裏で繰り返す。

　ＳＡＯ生還者と遭遇したからといって、別にパニックを起こす必要はない。アインクラッド崩壊の少し前あたりでは、エクストラスキル《二刀流》の記事や、血盟騎士団団長ヒースクリフとの公開デュエルのせいで、俺の名前はかなりの広範囲にしていた。それに先刻ウエマルに対して使用した《ヴォーパル・ストライク》は、メジャーな片手直剣カテゴリのソードスキルだ。アインクラッドでハイレベルに達していたプレイヤーなら、さっきの試合の映像とトーナメント表のプレイヤー名から、俺がＳＡＯ攻略組の《キリト》ではないかと類推することは可能だ。俺だって、この会場で当時の知り合いらしきプレイヤーを見つければ、同じように声を掛け、旧交を温めようとしたかもしれない。

　だから、恐れる必要はないのだ。ないはずなのだ。

　なのになぜ、俺はこんなにも…………

　――――瞬間。俺の眼は、トーナメント表を消してマントの中に戻ろうとした細い腕の一点に吸い寄せられた。

　ぼろぼろの包帯を巻き付けたかのようなグローブの前腕部分、手首内側の少し上に、ごく細い隙間があった。奥に、青白い肌がちらりと覗いた。

　そして、その肌には、五センチ四方ほどのタトゥーがひっそりと刻まれていた。

　は、カリカチュアライズされた西洋風の。ニタニタと笑う不気味な顔が描かれている。そしてそのは少しだけずらされ、内部の暗闇から白いの腕が伸びて、見る者を手招きする。かつて、ここではない世界で、毒入りの水を使って俺をさせ、殺そうとした男の腕にも全く同じ図柄が貼り付いていた。

　そうと認識した時点で、叫ぶ、床に倒れる、あるいは脳波異常で強制ログアウトすることのいずれも俺が耐え切ったのは、ほとんど奇跡だった。

　その場に立ったまま、何の反応も見せない俺を赤いレンズで凝視し、ぼろマントのプレイヤーは囁いた。

「質問の、意味が、解らないのか」

　俺はゆっくりと、慎重にアバターの首を頷かせた。

「……ああ。解らない。本物って、どういう意味だ」

「……………………」

　灰色マントは、無音でするりと一歩下がった。赤い眼光が、瞬きするようにちかちかと点滅する。

　やけに長く感じられた数秒ののち、無機質さを増した声が放たれた。

「…………なら、いい。でも、名前を、った、偽物か…………もくしは、本物、なら」

　後ろに振り向きながら、最後のひと言。

　――――いつか、殺す。

　その言葉を、俺は、ゲーム内のロールプレイだとはまったく思えなかった。

　ぼろぼろのマントは、まるで本物の幽霊であるかのように音もなく遠ざかっていき――唐突に消滅した。

　周囲には、もう数秒前にプレイヤーが存在したという一つ残っていなかった。

　俺は今度こそ小さく体をよろめかせ、懸命に踏みとどまると、傍らのボックスシートに崩れるように座り込んだ。細い脚を抱え込み、膝に額を押し当てる。

　閉じたの奥には、コンマ一秒以下だったろうが確かに見えた。小さなタトゥーが鮮明に焼き付いていた。

　笑う棺桶。アインクラッドであのエンブレムを使用していた集団は、たった一つしか存在しない。

　ギルド、《ラフィン・コフィン》。

　二年に及んだＳＡＯの攻略期間に於いて、食い詰めたあげく他のプレイヤーからやアイテムを奪い取るプレイヤーこそ比較的初期から出現したが、その手口は多人数で小数を囲んで一方的トレードを強要したり、せいぜい毒を使用したりといった範囲にまっていた。

　実際の攻撃によってＨＰバーを全損させれば、そのプレイヤーは現実世界でも本当に死んでしまうわけで、そこまでの行為に手を染める覚悟のあるものはいなかったのだ。なぜなら、一万人のプレイヤーは基本的に全員重度のネットゲーマーで、現実世界での犯罪とは無縁に生きてきた人間たちばかりだったからだ。

　その、《ＨＰ全損だけはさせない》という不文律が破られたのは、たった一人の異質なプレイヤーの存在ゆえのことだった。

　男の名は《》。ユーモラスな響きのキャラネームだが、意外にも――あるいはだからこそ、奴はある種の強烈なカリスマを備えていた。

　その理由の第一は、ＰｏＨがエキゾチックなを持ち、また少なくとも三か国語を操るマルチリンガルだったことだ。恐らくは日本人と西洋人の混血だったのだろうが、日本語にな英語やスペイン語のスラングの混じる、まるでプロＤＪのラップのような奴のりは、周囲に集まるプレイヤーたちの価値観を容易に染め変えて言った。ネットゲーマーから、よりクールでタフでリアルなアウトロー集団へと。

　そして第二のカリスマ性は、単純に、ＰｏＨの強さだ。

　奴のきは天才的だった。まるで手の延長のように自在にくは、システム的なソードスキルに頼らずとも、モンスターを――あるいはプレイヤーを切り刻んだ。ことにデスゲーム後期、《》という物騒な銘の大型ダガーを手に入れてからの奴は、攻略組プレイヤーですら恐れるほどの実力を身につけていた。

　血盟騎士団のヒースクリフとは対極的と言えるそのカリスマ性で、ＰｏＨは徐々に、徐々に、己を慕って集まったはぐれ者たちの心理的リミッターを緩めさせていったのだ。

　ゲーム開始から一年が経過した、二〇二三年のの夜。

　三十人近い規模に膨らんでいたＰｏＨの一味は、フィールドの観光スポットで野外パーティーを楽しんでいた小規模なギルドを襲い、全員を殺した。

　翌日、システムには規定されていない《レッド》属性を名乗るギルド、《ラフィン・コフィン》結成の告知が、アインクラッドの主だった情報屋に送付された。

　先刻俺にコンタクトしてきた灰色マントのプレイヤーは、少なくともＰｏＨ当人ではない。抑揚のないれのり方は、マシンガンのように激しく扇動的だったＰｏＨの口調とはまるで違う。

　だが、あんなふうに喋る奴が、《ラフコフ》には確かにいた気がする。俺はそいつと顔を突き合わせ、言葉を――そしておそらく剣をも交わしているはずだ。無印のメンバーではない。かなりの上級幹部。そこまで推測できるのに、なぜ顔も名前も思い出せないのか。

　いや、その理由も、本当は解っている。俺自身が、思い出すことを拒否しているからだ。

《ラフィン・コフィン》は、二〇二四年の元日に結成され、八ヶ月後の、とある夏の日の夜に消滅した。

　自発的解散や、内紛による自壊ではない。攻略組、つまり最前線で戦うプレイヤーから五十人規模の討伐部隊が組織され、剣の力によって壊滅させられたのだ。

　本来であれば、もっと初期にその手段が取られても不思議はなかった。それが八ヶ月もかかってしまったのは、ラフコフのアジトがどうしても突き止められなかったせいだ。

　アインクラッドに於いて、プレイヤーが購入可能な家や部屋は、それが街区圏内にあろうと圏外にあろうとＮＰＣの不動産屋で正確な所在地を確認できる。三十人以上が寝起きできる規模となれば、ちょっとした屋敷かクラスの物件を購入してアジトに使っているはずだと予想されたので、攻略組から依頼された情報屋たちは、第一層から始めて全ての大型家屋をしらみつぶしに調査していった。

　しかし、幾つかの中小規模のオレンジギルドのアジトは見つかったものの、肝心のラフコフの本拠だけは何ヶ月経っても発見されなかった。

　それもそのはず。奴らは、すでに攻略された低層フロアのダンジョン――しかも上層に繫がるタワーではなく、デザイナーが配置だけして忘れてしまったような小の安全地帯をに使っていたのだ。攻略組プレイヤーは基本的には迷宮区タワーの攻略しか行わないし、中級プレイヤーも人が多いダンジョンにしか潜らない。もちろんには偶然問題の洞窟を見つけ、立ち入ってしまうプレイヤーもいたはずだが、彼らが全員容易に口をがれてしまっただろうことは想像に難くない。

　巧妙に隠されたラフコフのアジトが、八ヶ月後になってようやく判明したのは、おそらくは殺人の罪悪感に耐えかねたメンバーの一人が攻略組に密告したからだった。その情報をもとに偵察が行われ、間違いなく問題の洞窟が奴らの本拠だと断定されて、ついに大規模な討伐部隊が組まれた。リーダーを務めたのは、最大ギルド《聖竜連合》の幹部。《血盟騎士団》他の有力ギルドからも多くの実力者が参加し、ソロプレイヤーの俺も依頼を受けて部隊に加わった。

　アジト強襲は午前三時に行われた。

　部隊の人数も平均レベルも、ラフコフを大幅に上回っているはずだった。アジトとなっている安全地帯の入り口と出口を封鎖し、奴らに無血投降させることすら充分に可能と俺たちは考えていた。

　しかし――。奴らから密告者が出たのと同様に。

　極秘に極秘を重ねて計画された討伐作戦の情報も、いかなる経路によってか、奴らにれていたのだった。

　俺たちがダンジョンに突入した時、ラフコフのメンバーは、一人として安全地帯の大部屋にはいなかった。と言っても、事前に逃亡したわけではない。奴らは、ダンジョンの枝道に身を潜め、俺たちを背後から襲ってきたのだ。

　、毒、目まし、ありとあらゆる準備を整えた上での不意打ちだった。討伐隊は当初かなりの混乱に見舞われたものの、突発事態への対応力こそ、攻略組にもっとも必要とされる能力である。すぐに態勢を立て直した俺たちは、猛然と反撃した。

　――だが。ラフコフと討伐隊の間には、思いもよらなかった差が存在した。

　それは、殺人への忌避感の有無だった。狂騒状態となったラフコフのメンバーが、どんなにＨＰゲージを削られても降参しないと悟った時、俺たちは激しく動揺した。

　その状況が有り得ることを、事前に話し合ってはいたのだ。そしてそこでは、敵のＨＰ全損もやむなしと決したはずだった。しかし、ゲージを真っ赤に染めた相手に、実際にとどめの一撃を振り下ろすことになると覚悟していた者は、俺を含めて誰一人いなかったのかもしれない。討伐隊の中には、自分の剣を捨ててしゃがみ込んでしまう者すらいたのだ。

　まず討伐隊に数名の死者が出た。それで同じく狂乱した攻略組の反撃で、ラフコフの数人も死んだ。

　そこから先は、血みどろの地獄となった。

　戦闘が終了した時、討伐隊からは十一名。そしてラフィン・コフィンからは、二十一名のプレイヤーが消滅していた。そのうち二人のゲージを吹き飛ばしたのは、俺の剣だった。

　敵の死者・捕縛者の中に、首領たるＰｏＨの名前はなかった。

　さっきの灰色マントのプレイヤーが、その戦闘で生き残りののに送られたラフコフメンバー十二人の誰かなら、俺とは戦後処理中のどこかのタイミングで会話しているはずだ。口調を覚えているのに顔も名前も思い出せないのは、俺がラフィン・コフィン討伐の一件を無理矢理に忘れようとしてきたからだ。

　…………いや。

　いや、もしかしたら。あのマントの中にいたのは。

　俺がこの手で殺した二人のどちらかだったのだろうか。

　そんなことを考えてしまってから、俺は椅子の上で膝を抱え込んだ格好のまま激しく首を振った。割れ砕けんばかりに歯を食い縛り、懸命に思考を立て直す。

　死者は生き返らない。ＳＡＯ事件の被害者四千人は、俺が愛した人も、憎んだ者も、皆もう二度と戻ってこないのだ。だからあの灰色マントは、ラフコフの生存者十二人の誰かでなければならない。俺はその名前を全員知っているはずだ。深く深くめた記憶を、引きつるような痛みに耐えて掘り返そうとした――――

　その時。

　俺は、今更にすぎる一つの可能性に気付き、いだ。

　あの灰色マントの、金属的にんだ声。ごく低い囁きしか発しなかったあいつが、フルボリュームで叫んだらどうなるか。

　耳の奥に、一週間に聞いた音声ファイル内の絶叫がる。

『これが本当の力、本当の強さだ！　愚か者どもよ、この名を恐怖とともに刻め！』

『俺と、この銃の名は《死銃》…………《デス・ガン》だ！』

　同じだ。間違いない。声の波形は限りなく一致する。

　あいつが――――。

　もしそうならば、俺は、ＧＧＯにダイブして注目され、《死銃》のターゲットとなるという今回の任務を早くも達成したことになる。

　しかし……しかし。こんな展開が有り得るなどとは、まったく考えもしなかった。

《死銃》がＳＡＯ生還者で、そのうえ元ラフィン・コフィン所属のプレイヤーである――などということは。

　ゲーム内からの銃撃によって、現実世界で二人のプレイヤーを殺したかもしれない男。

　その力は、もしかしたら……もしかしたら、本当に…………

　不意に左肩を叩かれ、俺は危うく悲鳴を上げそうになった。びくりと全身を震わせてから顔を上向けると、そこには鮮やかな水色のショートヘアが揺れていた。

「……なんて顔してるのよ」

　眉をひそめてそう言う少女――シノンに、俺はった頬を動かし、どうにか笑みらしきものを浮かべてみせた。

「あ……い、いや、何でも……」

「そんなギリギリの試合だったの？　その割には、ずいぶん早く戻ってきてたみたいだけど」

　その言葉に、俺はようやく、自分が《バレット・オブ・バレッツ》の予選トーナメント出場中だったことを思い出した。瞬きし、周囲を見回すと、広大なドームにひしめいていたはずのプレイヤーたちはいつの間にかほぼ半減している。予選一回戦がだいたい終わり、敗者は地上へと転送されたのだ。もうすぐにも俺の次の対戦者が決定し、二回戦が始まるのだろう。

　しかし、この状態で、とてもまともに戦えるとは思えない。

　俺は、少し離れた所からそうな視線を送ってくるシュピーゲルと、すぐ前に立つシノンを順に見やり、緩めた唇から力なく息を吐き出した。

　するとシノンが、キッと真剣な顔を作って言った。

「たかが一回戦でそんな有様じゃ、決勝なんて夢また夢よ。しっかりしなさいよね……私、あんたから貸しを取り立てないといけないんだから」

　そして右を握り、もう一度俺の肩をどんと突いた。

　無意識のうちに、俺は離れようとする小さな手を自分の両手で捉えていた。胸に引き寄せ、額を押し当てる。

「ちょ、ちょっと……何するのよ！」

　シノンが慌てたように囁き、手を引き抜こうとするが、俺は強く握り続けた。

　ポリゴン製のアバターから伝わる仮想の熱量でも、今の俺には言葉にできないほど温かく感じられた。体の芯に居座る恐怖の冷たさを自覚すると同時に、全身が今更のように小刻みに震え始めた。

「…………どうしたの…………？」

　途惑ったような呟きが聞こえ、胸の中で小さく、温かい手から、ゆっくりと力が抜けていった。

　　　７

　右手の人差し指にかすかなきを感じ、シノンはをひそめた。

　親指の腹を使ってり落とそうとする。しかし、指の芯をちくちくと刺激する感覚はなかなか去ろうとしない。

　原因は判っている。

　キリトだ。あの無礼でなしい新参者に、右手を思い切り握られたせいだ。

　常識的には有り得ない話だと、頭の半分では理解している。シノンはいまアミュスフィアを使って仮想世界にフルダイブしているのであり、そこでどんなに強く手を摑まれようと、現実の肉体の血流が滞ったり神経が圧迫されたりということは絶対に起こらない。この世界で発生するあらゆる肉体的感覚が、マシンが電子パルスに乗せて脳に直接送り込んでくる擬似信号でしかないのだから。

　――――でも。

　現実に、シノンの右手には、黒髪の使いに強く握られた時の圧力と温感がまざまざと残っている。あれから、もう二時間近くも経つというのに。

　感覚を消去するのをめ、シノンは二脚で保持した対物狙撃ライフルに右手を戻した。スプリングを軽めに設定してあるトリガーに、そっと人差し指を添わせる。無数の戦闘を共にしてきた愛銃《ヘカートⅡ》のグリップは、まるで体の延長であるかの如くしっくりと手にむが、それでも小さなきは消えない。

　シノンは今、小高いのに生えた貧相なの下で腹いになり、狙撃のチャンスを待っている。

　ステージは《の十字路》。乾燥した高地の中央で、二本の直線道路が交差している地形だ。対戦相手の名前は《スティンガー》。ＢｏＢ予選Ｆブロック五回戦、つまり準決勝第一試合の開始から、約十二分が経過。

　この試合に勝てば、次の決勝の結果がどうあれ、明日の日曜に行われるＢｏＢ本大会にバトルロイヤルへの出場権が得られる。だが、ここまで勝ち上がってきただけあって、敵のスティンガーも相当な実力者だ。

　名前がそうだからといって、携行型対空ミサイルの《スティンガー》を装備しているわけではない。メインアームは確か《ＦＮ・ＳＣＡＲ》カービンライフルだが、これも充分に危険な武器だ。高性能なＡＣＯＧスコープを備え、集弾率にかなりのプラス補正を得ている。目視距離まで接近されれれば、狙撃手のシノンでは太刀打ちできないだろう。

　幸い、このマップは、道路で四分割されたブロックからブロックへと移動するためには絶対に中央に十字路を通らねばならない地形になっている。二人のプレイヤーの出現位置は、最短でも五百メートル離れているはずなので、最初から同じブロックに配置されているということは有り得ない。

　つまりスティンガーは、シノンをＳＣＡＲの射程に捉えるためには狙われていると解っていても中央の交差点を突破せねばならず、逆にシノンはスティンガーが交差点の突破を図る時に何としても狙撃を成功させねばならないという状況だ。

　ゆえに、スティンガーとしてはぎりぎりまで強行突破を遅らせ、シノンの集中力を消耗させる作戦に出てくると予想される。されるのだが、その裏をかいて早めに出現する可能性も否定できないので、シノンは結局常に神経を張り詰めさせ、こうしてスコープを覗き続けるしかない。

　現在、ＡからＯまである予選トーナメント十五ブロックの半数以上ですでに決勝戦が終了し、同時進行している試合は十程度しかない。ゆえに、待機ドームや一階ホール、街の酒場ではその全試合がノーカットで中継されているはずなのだが、このシノン対スティンガー戦を見ている観客は、さぞかし退屈しているだろう。何せ、試合開始からまだ一発の銃弾も発射されていないのだ。

　もっとも、同時に行われているＦブロック準決勝第二視界が、こちらの地味さをしてもお釣りが来るほど派手な展開になっているに違いない。

　なぜなら向こうは、サブマシンガン二丁使いという近距離戦の専門家と、それを上回る超接近戦用武器――光剣使いの戦いなのだから。

　集中を切らしてはならない。そう解っていても、シノンの思考は、あの謎めいた黒髪の少女、いや少年へと戻っていく。

　一回戦を十分程度で片付け、待機ドームに帰還したシノンを最初に出迎えたのは、シュピーゲル――の祝福だった。手短に礼を言い、最初のボックスシートに戻ろうとしたシノンは、そこにキリトの姿を見つけて少々驚いた。まさか、自分より短時間で勝ち戻っているとは思わなかったのだ。へえ、少しはやるじゃない。そんな言葉を掛けるつもりでシートに歩み寄り――そしてシノンはもう一度、別種の驚きに見舞われた。

　試合が始まる前は、あれほどふてぶてしい態度を貫いていたキリトが、ベンチシートの上できつく膝を抱えて座り、けた頭と細い肩を小刻みに震わせていたのだ。

　……勝ったくせに、銃相手の戦闘が、そんなにも恐ろしかったのだろうか。

　そう考えたシノンは、無意識のうちに右手を伸ばし、ナイト・カモ柄のジャケットの肩をそっと叩いていた。

　途端、キリトはびくりと全身を縮こまらせてから、恐る恐る、としか形容できない動作で頭を持ち上げた。

　知らなければ誰しも型と思うであろう、さとさが同居したアバターの顔には――まるで地獄のを覗き込んできたかのような、深い恐怖に彩られていた。

「……なんて顔してるのよ」

　思わずシノンが呟くと、キリトは数回激しく眼をしばたかせてから、頬をぎこちない笑みの形に動かして見せた。

　何でもない、とれきった声をすキリトに、シノンは一回戦がそんなに厳しかったのかと訊ねた。だが、少年は長い黒髪の下に表情を隠しながら弱々しく吐息を漏らすのみで、もう何も答えようとはしなかった。

　それ以上、関わる義理はない相手だった。

　キリトは、アバターの性別に対するシノンの誤解を恐らくは意図的に解かず、街を案内させたり買い物をガイドさせたり、あまつさえ同じ控え室までのこのこ付いてきたのだ。

　もちろん、女の子だと勘違いしたまま、ネームカードを要求しなかったシノンにも非はある。だから、シノンの怒りは半分以上、自分自身に向けられたものだ。

　現実世界で、同級生たちにいいように利用されて以来、もう誰にも頼らない、友達なんかいらないと心に決めてきたはずだった。その決意を、ＧＧＯでは珍しい女の子プレイヤーに道案内を頼まれた途端、あっさりと忘れてしまった。

　楽しかった。マーケットであれこれ買い物をしている時、三輪バギーの後ろに乗っている時、シノンは自分が、ＧＧＯの中で物凄く久しぶりに笑っていることを自覚していた。そう――シノンは、本当はキリトが男だったことに怒っているのではない。彼と一緒にいる時、余りにも無防備になってしまった自分が許せないのだ。

　だから、キリトが一回戦を勝ち抜いてきたと知って、本心から嬉しいと思った。

　決勝戦でぶつかり、その可憐なアバターをヘカートの銃弾で打ち砕くことで、こいつと出会う前よりももっと強くなってやる。そう思ったのに、そのキリトは、まるで別人のようなえにわれていた。

　シノンは、無意識のうちに、鋭く押し殺した声で言っていた。

「たかが一回戦でそんな有様じゃ、決勝なんて夢また夢よ。しっかりしなさいよね……私、あんたから貸しを取り立てないといけないんだから」

　そして右拳を握り、もう一度キリトの肩をどんと突いた。

　その手が、いきなり白い両手に包まれた。そのまま強く引き寄せられ、ファティーグの胸にしっかりと抱え込まれた。

「ちょ、ちょっと……何するのよ！」

　反射的に叫び、引き抜こうとしたが、このなアバターのどこにこんなＳＴＲ値があるのかと思えるほどの力でキリトはシノンの手を抱き続けた。

　両手は氷のように冷たく、手の甲に触れる吐息もまた冷え切っていた。

　その時点で、シノンの視界には、ハラスメント行為のを促すアイコンが点滅していた。左手でそれに触れるか、コールと言うかすれば、キリトのアバターはグロッケンの監獄エリアに転送されてしばらく出てこられなかったはずだ。

　しかし、シノンは動けず、何も言えなかった。

　自分の手を握り、全身を小刻みに震わせるなアバターに、シノンは強烈な既視感を覚えていた。こんな風情の女の子を、どこかで見た。そう考えてからすぐに、それは誰であろう自分自身であることに気付いた。

　狙撃手シノンではなく、現実背の世界の。血とのいにれた記憶に怯え、ベッドで身体を縮こまらせて、助けて、助けて、と呟き続ける詩乃の姿そのものだった。

　そうと気付いた途端、シノンは我知らず、右手から力を抜いていた。

「…………どうしたの…………？」

　くようにねたが、答えはなかった。それでも、シノンには感じられた。

　シノンの手にり付く、黒髪のアバター――いや、そのうちに宿る、顔も名前も知らないプレイヤーは詩乃と同種の暗闇にわれているのかもしれない。

　何があったの、とシノンは言葉を掛けようとした。

　しかしその寸前、キリトの身体が淡い光に包まれて消え去った。彼の次の対戦相手がようやく決定し、予選二回戦のフィールドへと転送されたのだ。

　あの様子では、とてもまともに戦えはしないだろう。シノンはそう判断し、小さく吐息を漏らした。

　敗者は、地下の待機ドームではなく地上の総督府ホールへと戻される。だから、キリトが負ければ今日は――あるいは、もう二度と顔を合わせる機会はないかもしれない。

　別に、それならそれでいい。最初から友達でも何でもない。ただ行きずりで総督府まで同行しただけの相手なのだ。今日を限りに、顔も名前も忘れるだけだ。

　そう自分に言い聞かせながら、シノンは宙に取り残された右手を、そっと胸に引き戻した。

　――なのに。

　キリトは、シノンの予想を大きく裏切り、二回戦、三回戦、そして四回戦までもを、光剣とハンドガンだけで勝ち上がったのだった。

　自身の試合に待ち時間に、シノンは一戦だけ、キリトの試合をモニタで観戦する機会があった。彼の戦いぶりは、迫るとでも形容したくなるほどの、捨て身の特攻戦法だった。アサルトライフルを速射するＡＧＩ型相手に、小さなハンドガン――シノンが購入を勧めたファイブセブンで応射しつつ正面から突進、アバターの末端部に命中する敵弾は無視して致命弾だけを光剣で防御するという離れであっという間に零距離にまで踏み込むや、ライフルごと敵を叩き斬ったのだ。

　そんな戦い方をするプレイヤーは、第一回、第二回のＢｏＢには一人もいなかった。待機ドームに広がるどよめきの中で、シノンもまた大きく眼を見開くことしかできずにいた。

　あの調子なら、キリトがＦブロックの決勝まで上がってくる可能性は大いになる。しかし、あんな無茶苦茶な相手と、どう戦えばいいのか。

　キリトの試合を見て以来、自分の準決勝が始まってからも、シノンはずっとそれを頭の一部分で考え続けている。そして同時に、キリトというプレイヤー本人に関しても考えるのを止められないでいる。

　一緒に買い物をしている時の、好奇心にれたナチュラルな笑顔、自分が男だとばれてからの、人を食ったとした物腰。一回戦後に、シノンの手にって震えていた弱々しさ。そして――い光の刃で容赦なく敵を斬り伏せる、の如き姿。

　いったい、どれが本物の《キリト》なのか。

　そしてなぜ、自分はそんなことを考え続けているのか。

　理由のないちを覚え、高倍率スコープに右眼をつけたままシノンが小さく唇を嚙んだ、その時――。

　一キロ先の十字路を捉えた視野の左側、切り立った崖の陰から、何か大きな影が高速で飛び出してきた。

　シノンは半ば自動的にヘカートの照準を微調整した。風は左から二・五メートル。湿度五パーセント。細く光る照準線の中心点を影から少し上に離し、着弾予測円の最初の収縮に合わせてせずトリガーを引く。

　。

　スコープの視野を、五十口径弾が空気にのようなトンネルをちながら飛翔していく。左下に向けてゆるやかな曲線を描くその軌道が、影の上部に命中。

「……おっと」

　呟きながら、シノンはヘカートのボルトハンドルを引いた。空のカートリッジが排出され、次弾が薬室に収まる。

　パッと無音で砕けた影の正体は、対戦相手のスティンガーではなく、直径一メートルはありそうなただの岩の塊だった。

　次の瞬間、岩が飛び出してきたのと同じ場所から、さらに巨大なシルエットが土煙を上げて突進してきた。

　四輪の装甲車両、《》だ。車両系アイテムはプレイヤーの個人所有物ではなく、ステージのどこかにボーナス的に隠されており、早い者勝ちで乗り込むことができる。まっさらの新品のはずなのに、出現した車のフロントが小さくんでいることにシノンは素早く気付いた。つまり、最初に飛び出した岩は、あの車が意図的に跳ね飛ばしたものだ。

　運転席に座っているであろうスティンガーは、シノンのメインアームであるヘカートⅡが、連射できないボルトアクション・ライフルだと知っている。更に、自分が通らなくてはならない十字路をシノンが狙っていることも承知している。

　ゆえに、まずＨＭＭＷＶで十字路に岩を跳ね飛ばしてそれを狙撃させ、次弾の準備が整わないうちに交差点を通過するという作戦を立てたのだ。

　狙いはいい。事実、シノンがハンドルを引いている間に、車はもう十字路の中央まで達している。撃てるとしてあと一発。しかも慎重に照準している時間はない。

　しかし、シノンは慌てなかった。

　スティンガーは、シノンからスナイパー最大の武器である《予測線なしの第一射》を奪った代わりに、貴重な情報を与えてくれた。シノンの視界には、一発目が描いた弾道の曲線が焼き付いている。慌てさえしなければ、二発目もまったく同じ軌道を飛ぶ。それを利用すれば、一発目よりも遥かに高精度の狙撃を行うことが可能となる。

　シノンは小さく銃身を動かし、静かにトリガーを引いた。再びの轟音。

　放たれた弾丸は、吸い込まれるようにＨＭＭＷＶ側面の小さなウインドウに命中し、分厚い防弾ガラスをなく貫いた。

　直後、車両は大きく蛇行し、路肩の岩に乗り上げて横転。真正面から奥側のに突き刺さり、ボンネットから赤黒い炎を吹き上げる。

「……いっそ車から降りて走れば、予測線を見て回避できたかもしれないのに」

　呟きつつも、三発目を。右眼はスコープから離さず、燃えるＨＭＭＷＶをレティクルで捉え続ける。何秒待ってもスティンガーは現れず、ほぼ間違いなく運転席で即死したのだと思われるが、それでも射撃姿勢は崩さない。

　シノンがブッシュの陰から這い出し、立ち上がったのは、色の空にコングラチュレーションの文字が刻まれた後のことだった。

　試合時間、十九分十五秒。準決勝、突破。

　これで、予定通り明日のＢｏＢ大会への切符を手に入れたことになる。しかしシノンはガッツポーズはおろか、笑みのひとつも浮かべることすらしなかった。意識はすでに、このあと始まるＦブロック予選決勝へと飛んでいた。

　謎の来訪者キリトが、シノンよりも短いタイムで準決勝を勝ち抜いているだろうことに疑いはない。彼の対戦相手は両手にＳＭＧを装備した近距離タイプだ。いかに大量の弾をばらこうとも、あの光剣使いにまで接近を許せば、ＨＰを削り切るよりも先に致死のエネルギーブレードを浴びてしまう。何せキリトは《弾道予測線を予測する》という恐るべき反応速度を持っているのだ。正面戦闘で彼を圧倒するには、それこそＭ１３４ミニガンでも持ち出さねばならないだろう。

　ゆえに、シノンは両手にヘカートを抱いたまま、身動きせずに次の戦場へと転送される瞬間だけを待った。

　数秒間、待機ドームへ帰還することなく、シノンは決勝戦の準備空間へと飛ばされた。へクスパネル状に浮かぶウインドウに表示された対戦相手の名前は、予想通り【Ｋｉｒｉｔｏ】だった。

　次の転送を経てを開けると、どこまでも一直線に伸びる高架道と、その先で今まさに沈まんとしている血の色の夕日が眼に飛び込んだ。

《大陸間高速道》ステージだ。これまでの戦場と同じく広さは一キロ四方だが、中央を東西に貫く幅百メートルのハイウェイから降りることはできないので、実質的にはただ細長いだけの単純なマップだ。

　しかし路上には無数の乗用車や輸送車、墜落したヘリコプターなどが遺棄され、またあちこちで面が斜めに飛び出したりしているので端から端までを見通すことはできない。

　シノンはさっと後ろに振り向き、自分がマップのほぼ東端にいることを確認した。つまり敵たるキリトは、西に伸びる高架道の、少なくとも五百メートルは離れたどこかに出現しているはずだ。

　次に周囲を見回し、すぐに走りだす。目指したのは、右斜め前に横たわる大型の観光バスだ。半開きになった後部ドアから内部に駆け込み、二階席への階段を上る。中央の床面に体を投げ出すように腹いになり、肩から外したヘカートⅡの二脚を展開。バス前面のパノラマウインドウに銃口を向けて設置し、姿勢を取ると、スコープ前後のフリップアップ・カバーを跳ね上げた。

　太陽はまっすぐ正面に存在する。それゆえ、屋外のどこかに隠れて銃を構えても、スコープのレンズに反射した陽光を敵にられてしまう危険が残る。位置の露見したスナイパーほど制圧にいはない。

　しかしこのバスの中なら、ミラーコーティングされた窓がスコープの反射光を隠してくれる。しかも高さがあるので、路上ののほとんどを見通すことができる。

　おそらくキリトは、物の陰から陰へと高速で移動しながら近づいてくるだろう。あの敵に、弾道予測線ありの狙撃が命中するとは到底思えない。チャンスは、彼がこちらの位置を特定できていない状況でのたった一弾のみ。

　――当てる。必ず。

　胸の奥で強く念じながら、シノンは右眼をスコープに当てた。

　なぜこれほどまでに勝ちたいと思うのか、自分でも明確に説明はできない。

　確かにシノンは、己の性別を隠して近づいてきたキリトに道案内や装備の手ほどきをさせられた。その上、控え室で着替えまで見られた。

　でも、言ってしまえば、たかがその程度の事なのだ。アイテム的な損害を受けたわけではないし、見られたのもアバターの下着だ。グロッケンの路上で出会ってから、待機ドームで別れるまでの数十分を丸ごと忘れることだって、そう難しくはないはずなのだ。

　でもいまシノンは、これまでＧＧＯで経験したあらゆる戦闘が色褪せるほど強く、キリトに勝ちたいと思っている。そう――あの恐るべきミニガン使い、ベヒモスよりも。今日この世界に来たばかりの、しかもガンナーですらない邪道な光剣使い相手に、なぜこんなにも…………。

　…………いや。

　いや、もしかしたら、その理由ももう解っているのかもしれない。

　それは、私があいつを、心のどこかでは《敵》と認識し切れていないから。硬いシートの上でがたがた震えていたあいつの冷たい手を握ってしまった時、名前を付けられないひとつの感情が胸に生まれた気がするから。

　同情？　違う。

　れみ？　違う。

　共感……？　絶対に、違う。

　私が共感できる人間がいるはずがない。私を苦しめる暗闇を一緒に背負ってくれる人間なんかいるはずがない。私はそれを期待しては、何度も何度も何度も何度も裏切られてきたじゃないか。

　自分を助けられるのは、自分の強さだけ。そう悟ったからこそ、私はいまここにいる。

　キリトの抱えた事情など知りたくないし、知る必要もない。無感情な一撃であの心惑わせるアバターを吹き飛ばし、これまで同じように撃ち倒してきた無数のターゲットの中に埋没させる。そして忘れる。

　すべきことの、それが全て。

　強く強くそう思い定めながら、シノンはスコープの視野を見つめ、指をトリガーに添わせ続けた。

　だから――。

　深紅の夕日を背景に、そのシルエットが黒く浮き上がった時、スナイパーとしての抑制も一瞬忘れて声を漏らしていた。

「…………な……」

　微風に揺れる長い黒髪。夜間迷彩のファティーグに包まれたな。ベルトから下がる光剣の。間違いなくキリトだ。

　しかし彼は走っていなかった。それどころか身を隠そうとする気配すらもなかった。ハイウェイのど真ん中、少し盛り上がった中央分離帯の上を、ゆっくり、ゆっくりと歩いてくる。先の試合とはまったく対照的な、無防備極まる姿だ。

　――弾道予測線がなくても、私の狙撃なんかいつでもかわせるってこと？

　のような思考が脳裏に弾けると同時に、シノンはスコープの照準線をぴたりとキリトの頭に重ねていた。トリガーに指を掛けようと――したその寸前、一秒前の推測が誤っていたことを悟る。

　キリトは、前を見ていなかった。深く深く顔をけ、虚脱したように全身の力を抜いて、ただ両足を交互に動かしているだけだ。先の試合の鬼気迫る突進とはまったく正反対の、無気力極まる歩み。

　あれでは、シノンの狙撃を回避することは絶対に不可能だ。ヘカートⅡの放つ弾丸は音速を遥かに超えるため、銃声が聞こえた時にはもう遅い。そして下を向いていれば、当然発射炎を見つけることはできない。

　つまり――つまり、キリトは、最初から弾をける気がない。わざと攻撃をらい、自分の負けでこの試合を終わらせる気なのだ。本大会の出場権を得るという目的さえ果たせば、後のことは……シノンとの決勝なんかはどうでもいい。そういうことなのだ。

「…………ふ、ざ……」

　シノンの唇から、れた声が漏れた。

　トリガーに指を掛け、力を込める。緑色の着弾予測円が現れ、キリトのれた顔を中心に高速で拡縮する。その激しい動きは、シノンの心拍が大いに乱れていることを示しているが、弱い追い風のうえに距離はたった四百メートルだ。撃てば絶対に当たる。

　人差し指の下で、トリガースプリングがきりっと小さく鳴る。しかしそこで指が緩む。もう一度力が込められ、トリガーが鳴る。また戻る。

「…………ふざけないでよ!!」

　その叫びは、子供の泣き声のように歪んでいた。

　同時にシノンは引き金を絞った。五十口径ライフルのが観光バスの内部に満ち、大判のフロントガラスが真っ白に曇りながら砕け散った。

　放たれた弾丸は、夕焼けの深紅を一直線に貫いて飛び――キリトの右頬から五十センチ以上離れた空間を通過して、遥か背後の路面を横転する乗用車の腹に命中した。火柱、続いて黒煙が噴き上がる。

　頭のすぐを十二・七ミリ弾が横切った圧力に押され、キリトは小さくよろめいてから、立ち止まって顔を上げた。

　少女のように整ったそのには、なぜ外したのか、という疑問の色だけが薄くんでいた。スコープ中央に映るその顔を凝視しながら、シノンはボルトハンドルを引くと入れずに二発目を発射した。

　今度の弾は、キリトの頭上を飛び去りフィールドのへと消えた。

　再装塡。トリガーを引く。三発目が黒衣の足元、少し左側のアスファルト面に巨大なをつ。再装塡。撃つ。再装塡。撃つ。再装塡。撃つ。

　六個のがシノンの周囲に転がり、少しの間を置いてから消滅した。

　無傷で立ち尽くすキリトは、スコープ越しに、ただ問いかけるような視線だけを向け続けていた。

　シノンはふらりと立ち上がると、ヘカートを両手で抱き、バスの通路を歩き始めた。ほぼもなくなったフロントガラスをくぐって路上に飛び降り、そのまま更に歩く。

　数十秒で、キリトからわずか五メートルほどの距離まで近づくと、シノンは足を止めた。

　尚も動こうとしない黒衣の光剣使いを正面から凝視し、唇を動かす。

「…………何でよ」

　その問いの意味と、込められた非難は、キリトに伝わったようだった。黒い瞳が揺れ、再び足元に向けられる。

　やがて、まるでＮＰＣのように感情をわせない声が小さく返った。

「……俺の目的は、明日の本戦に出ることだけだ。もうこれ以上戦う理由はない」

　予想された答えではあった。しかし、だからこそ許せないという感情が強く胸に溢れ、更なる言葉を押し出した。

「なら、試合開始直後にその銃で自分を撃てばいいじゃない。が惜しかったの？　それとも、わざと撃たれてキルカウントを一つ献上すれば、それで私が満足するとでも思ったの……!?」

　くキリトに、もう一歩近づき――。

「たかがＶＲゲームのたかがワンマッチ、あんたがそう思うのは勝手よ！　でもその価値観に、私まで巻き込まないでよ!!」

　震える声でそう叫びつつも、シノンは自分もまた筋の通らないことを言っていると自覚していた。

　個人的な価値観を相手に押し付けている、それは今のシノンも同じだ。キリトが許せないと思うのなら、最初の一弾で試合を決着させ、そのまま忘れればよかったのだ。そうせずに、六発もの弾をわざと外して相手をし、そのうえ面と向かってき出しの感情をぶつけている。むしろ、無茶苦茶なのはシノンのほうなのかもしれない。

　――――でも。

　それでも、シノンは自分を止められなかった。ヘカートを抱える両腕が震えるのを、顔がくしゃくしゃに歪むのを、そして両眼の縁からが一滴こぼれるのを止めることはできなかった。

　彼方の地平線に去りゆく太陽を背に、半ばシルエットになったキリトの両眼がきつく閉じられ、が引き結ばれた。

　やがて細いアバターからふっと力が抜け、弱々しい、しかしかな感情のこもった声が流れた。

「…………俺も……。俺もずっと昔、誰かをそうやって責めた気がする…………」

「……………………」

　無言のシノンをちらりと見て、キリトはそっと一度頭を下げた。

「…………済まない。俺が間違っていた。たかがゲーム。たかが一勝負、でもだからこそ全力を尽くさなきゃならない……そうでなければ、この世界に生きる意味も資格もない。俺は、それを知っていたはずなのにな……」

　そこで顔を上げ、漆黒の瞳でシノンをまっすぐ見て、異邦から来た剣士は言った。

「シノン、俺にう機会をくれないか。今から、俺と勝負してくれ」

　予想外の言葉に、シノンは一瞬りを忘れてを寄せた。

「今から、って言っても……」

　ＢｏＢの予選及び本戦は、敵の位置が判らない状態から開始される遭遇戦だ。それをこうして戦わずに顔を突き合わせてしまっては、開始時の状況に戻れるはずもない。

　しかしキリトは薄く微笑むと、左腰のファイブセブンをホルスターから抜いた。反射的に身構えかけるシノンを手で制してから、一度スライドを引く。排出された弾薬を空中で器用にキャッチし、銃をホルスターに戻す。

　細身の五・七ミリ弾を左手の指先でくるりと回し、キリトは言った。

「そっちも、まだ弾は残ってるよな？」

「…………ええ、一発だけ」

「なら、決闘スタイルで行こう。そうだな……十メートル離れて、そっちはライフルを、俺は剣を構える。この弾を投げて、地面に落ちたら勝負スタート。それでどうだ？」

　驚く、というよりもシノンはれ返った。先刻の憤りがいつの間にか薄れかけているのにも気付かず、口を動かす。

「あのね……それで勝負になると思ってるの？　たった十メートルからなら、このヘカートの弾は絶対に当たる。私のスキル熟練度とステータス補正、それにこの子のスペックが重なるから、システム的に必中距離なのよ。光剣を動かす暇もない。結局はあんたの自殺と一緒じゃない」

「やってみなきゃ判らないさ」

　にもそう言い放ち――キリトはい唇ににやりと笑みを浮かべた。

　その表情を見た途端、シノンは背中にびりっとるものを感じた。

　本気だ。この光剣使いは、本気でシノンとウエスタン・スタイルの決闘をして勝つつもりなのだ。

　確かに、ヘカートⅡのマガジンにはあと一発の弾しか残っていない。だからそれをどうにかして回避すれば勝機あり、と考えているのかもしれないが、甘い。必中にして必殺の弾丸を《どうにか》できようはずもない。ショッピングモールにあった《弾けゲーム》のガンマンが使う骨董品リボルバーとは弾速も精度も威力もが違うのだ。

　でも――もしキリトに《何か》があるのなら。

　それを見たい。どうしても。

　次の瞬間、シノンはこくりとき、言っていた。

「……いいわ。それで決着をつけてあげる」

　そして振り向き、中央分離帯の上を十数歩東に進むと、もう一度太陽に向き直った。

　二人の距離は、正確に十メートル。抱えていたヘカートを持ち上げると、ストックを右肩に押し当て、両足を開いてしっかりと構える。

　現実世界なら、どんなに屈強な大男でも、対物狙撃ライフルを立射でまともに撃てはしないが、ＧＧＯでは充分なステータス値さえあれば決して不可能ではない。もちろん巨大な反動にまでは耐えられず、後ろに倒れてしまうだろうが、どうせ弾は一発なのだから関係ない。

　ボルトハンドルを引き、マガジンに残った最後の弾をチェンバーへと送る。

　レシーバーに頬付けしてスコープを覗くと、最低倍率にしてもキリトの姿が視野いっぱいに広がった。

　その少女めいたに、数分前のろな無気力感は存在しなかった。のようなをと輝かせ、唇に不敵な笑みを浮かべている。

　ファイブセブンから抜き取った弾丸を左手の指先にみ、その腕をまっすぐ前に突き出した格好のまま、キリトは右腰から光剣を外した。親指がスライドスイッチを入れると、青白く輝くエネルギーの刃が振動音とともに伸長する。

　今頃、外でこのＦブロック決勝を観ているギャラリーたちは、あの二人は何をしているのかと首をっているだろう。だが知ったことではない。一弾対一刃。常識的には勝負になるはずもない決闘だが、いまシノンのうなじをチリチリと焦がしているこの緊張感だけは本物だ。

　――――やっぱり、あいつには《何か》がある。

　そう直感したシノンは、ヘカートの照準をごくわずかに滑らせた。

　レティクルの向こうで、キリトの唇が動いた。

「……じゃあ、行くぜ」

　そしてなく左手の指を弾く。弾薬が回転しながら高く高く舞い上がり、夕日を受けてルビーのめきを宙に連ねる。

　キリトがすっと腰を落とす。左を前にした半身の構え。右手の光剣はやや下向きに垂れたままだ。つま先から指先に至るまで、一切の力みを感じさせない、い立ち姿。しかしそれでいて、まるでライフルの銃口に心臓を狙われているかのようなプレッシャーが、華奢なアバターの全身から届いてくる。

　シノンもまた、自らの感覚が急激に高まっていくのを自覚していた。宙を舞う五・七ミリ弾の動きがあまりにも遅い。あらゆる音は消え、ただ自分の体とヘカートⅡだけが意識される。いや、その二つの境界すらもいつしか消滅する。射手と銃は完全に一体化し、銃弾を標的に命中させる、ただそれだけを目的とした精密なる装置へと変わる。

　視界から、白いも、緑の予測円も消えた。

*［＃挿絵img0517.png］*

　静かに立つ黒衣の剣士の手前を、ゆっくり、ゆっくりと合図の弾丸が落ちてくる。スコープの視野を横切り、消えてからも、その存在をシノンは感じる。くるり、くるりと回りながら路面に近づき――鋭利な弾頭がアスファルトに触れ――二つのオブジェクトの接触を判定したゲームシステムが、サウンド・エフェクトを発生させる命令をアミュスフィアに伝え――信号素子から放たれた電子パルスが、シノンの聴覚野に――――

　キン。

　という小さな音を響かせた瞬間、右手の人差し指がトリガーを引き絞った。

　続く一秒のあいだに起きた幾つかの現象を、シノンは加速された意識のなかで鮮やかな色彩とともに近くした。

　ヘカートの大型マズル・ブレーキからオレンジ色の炎がり。

　その向こうで、青白いが夕闇を斜めに切り裂き。

　流星のように輝く小さな光が二つ、右と左に分かれて彼方へと飛んでいった。

　対物ライフルの巨大な反動に押され、後方へと倒れ込みながら、シノンは自分が見た光景の意味するところを後れて悟った。

　斬ったのだ。

　合図の銃弾が地面に落ちた瞬間、キリトは右手の光剣を斜めに斬り上げ、己に命中するはずだった致死の五十口径弾を空中で切断した。シノンが見た二つの流星は、高密度エネルギーの刃によって分かたれ、キリトの体を両側をめて後方へと飛翔していった弾丸のだ。

　だが――有り得ない！

　弾の軌道に山を張り、一か八かで剣を振った結果ならばむしろ理解できる。しかしシノンは、当然狙うべきアバターの中心線ではなく、キリトの左脚を照準していたのだ。

　ヘカートのような大口径銃は、《インパクト・ダメージ》という追加効果を持つ。この超近距離から撃たれれば、たとえ当たったのが腕や脚でも、インパクトによる範囲攻撃力をまるまる被ってＨＰがひとたまりもなく全損する。

　今日このＧＧＯにコンバートしてきた、しかも銃に関してはまったくののキリトがそこまで知っているとは到底思えない。だから、弾道に山を張るなら、当然体の中心を守ろうとするはずだ。

　なのにキリトは、自分の左脚部を狙って飛んできた弾丸を、光剣の一閃で正確に捉えてのけた。ではない。そしてこの距離、この弾速なら、予測線のアシストもまったく役に立たない。いったいなぜ――どうやって…………。

　という一瞬の驚愕に打たれる間にも、シノンの腕は止まらなかった。後方に吹き飛びながらも左手をヘカートから離し、本能的に腰のＭＰ７を抜こうとする。

　だが、それよりも早く。

　十メートルの距離を稲妻のようなダッシュで詰めたキリトが、シノンの目の前に肉薄した。右手の刃がり、視界をい青に染めた。

　斬られる。

　そう予感しつつも、シノンはだけは閉じまいとした。見開いた両眼の先で、巨大な夕日を背景に、艶やかな黒髪が扇のような弧を描き――。

　そして、全てが停止した。

　右手にヘカート、左手にＭＰ７を下げたままシノンは深く後傾したが、しかしいつまでたっても路上に倒れない。キリトの左腕が背中を支えているからだ。

　そして剣士の右腕は、けるシノンの無防備なもとに、光剣の刃をぴたりとえていた。低く唸るプラズマの振動と、遠い風の音だけが聞こえた。

　左足を深く踏み込んで身を乗り出すキリトと、けに倒れかけたシノンは、まるでダンスのワンシーンを切り取ったかのように密着したまま、しばし静止し続けた。

　漆黒の瞳が、すぐ目の前にあった。これまで、現実世界はもちろん仮想世界でも誰にも許したことのない距離だったが、そうと意識することもなく、シノンはキリトの眼を覗き込みながら囁いた。

「……どうして私の照準が予測できたの？」

　エネルギーブレードの向こうで、唇が小さく動いた。

「スコープのレンズ越しでも、君の眼が見えた」

　眼。つまり――視線。

　シノンの視線で弾道を呼んだと、黒髪の剣士は言っているのだ。

　そんなことができる人間がこの世界に存在しようとは、これまでシノンは考えもしなかった。とは似て非なるひとつの感覚が、背筋から頭のまでを貫いた。

　強い。キリトの強さは、もうＶＲゲームの枠を超えている。

　でも、それならば尚更――なぜあの時、待機ドームの片隅で、あんなにも深く震えていたのか。なぜあんなにも冷え切った手で、シノンの手にったのか。

　シノンの唇から、いっそうかすかな声が流れ出た。

「それほどの強さがあって、あなたは何にえるの」

　するとキリトはわずかに瞳を揺らし、短い沈黙を経て、何かに耐えるような声で答えた。

「こんなのは強さじゃない。ただの技術だ」

　それを聞いた途端、シノンは喉もとに当てられた光の刃の存在も忘れ、激しく首を振っていた。

「。嘘よ。テクニックだけでヘカートの弾を斬れるはずがない。あなたは知っているはず。どうすればその強さを身につけられるの？　私は……私はそれを知るために……」

「なら聞こう！」

　当然、キリトが低く、しかしい炎のような熱量を秘めた声で囁いた。

「もしその銃の弾丸が、現実世界のプレイヤーをも本当に殺すとしたら……。そして、殺さなければ自分が、あるいは誰か大切な人が殺されるとしたら。その状況で、それでも君は引き金を引けるか!?」

「…………!!」

　シノンは呼吸も忘れ、両眼を開いた。

　知っているのか、一瞬、そう思った。この謎の来訪者は、シノンの顔を黒々とした闇に染める、あの出来事を知っているのか。

　――いや、違う。そうではないのだ。おそらくは……この人も昔…………。

　シノンの背中を支える左手が硬くり、すぐに緩んだ。シノンの額に前髪の先端を触れさせながら、キリトは力なく首を振り、呟いた。

「……俺には、もうできない。だから俺は、強くなんかない。俺は…………あの時斬った二人、いや三人の、本当の名前も知らない…………。ただ眼をつぶり、耳をいで、何もかもを忘れようとしてきたんだ…………」

　その言葉の意味は、シノンには解らなかった。

　だが、ひとつだけ確かなことがあった。やはりキリトは、その内側に、シノンと同種の闇――恐怖を隠している。そしておそらくは、待機ドームで次の試合を待っている間に何かがあったのだ。埋めたはずの闇が再び溢れてしまうような、何かが。

　シノンの左手からＭＰ７が滑り落ち、路上に転がった。

　空いた手は、見えない糸に引かれるように持ち上がり、光剣の刃越しにキリトの白い頬に近づいた。

　指先が触れる、その寸前――。

　不意に、キリトの頬にそれまでのふてぶてしい笑みが戻った。瞳の奥にはまだ痛々しい光が残っていたが、それでも剣士は小さく首を振ると、シノンの手を遮るように言った。

「――さて。それじゃ、決闘は俺の勝ち……ってことでいいかな？」

「え……？　あ、ええと……」

　気持ちが切り替えられず、ぱちぱち瞬きしていると、キリトはいっそう顔を近づけて囁いた。

「なら、してくれないかな。女の子を斬るのは好きじゃないんだ」

　その、あまりにで無礼で格好つけた言いぐさに、シノンはようやく自分の現状を再認識した。つまり、背中の左手と喉もとの光剣に拘束され、動けないところをほぼ密着状態で覆い被さられている情けない有様と――そしてこの光景がありのまま、待機ドームや総督府ホール、そしてグロッケンじゅうの酒場に生中継されているのだ、という事実を。

　たちまち頬にかあっと血が上るのを意識しながら、シノンは食い縛った歯の間から唸るように囁き返した。

「…………あんたともう一度戦うチャンスがあることを感謝するわ。明日の本大会、私と遭遇するまで絶対生き残るのよ」

　そしてぷいっと顔をけ、リザイン！　と大声で叫んだ。

　試合時間、十八分五十二秒。

　第三回バレット・オブ・バレッツ予選トーナメントＦブロック決勝戦、終了。

（つづく）

　　　あとがき

　です。シリーズ五作目、もう一シリーズのほうと合わせると十冊目の本となる『ソードアート・オンライン５　ファントム・バレット』をお買い上げ頂きありがとうございます。

　さて、ネットゲームには、ＭＭＯＲＰＧの他に大きな人気ジャンルが二つあります。一つが《》、そしてもう一つが《》です。

　私はどちらも好きですが、ＲＴＳについて語り始めると紙幅が足りないので省きます（笑）。

　ＦＰＳというのは、その名の通り主人公（＝プレイヤー）の一人称視点で主に銃器を用いて戦うゲームです。発祥はアメリカで、今でもタイトル数プレイヤー人口ともに米国のほうが圧倒的に多いと思うんですが、オンラインであちらのプレイヤーと対戦すると、「あんたシモ・ヘイヘの生まれ変わりかよ！」と言いたくなるシーンがかなりあるんですよね。こっちが全力でダッシュしてるのに、遠くでターンて音がして、次の瞬間ミケンから血を噴いて倒れる私。みたいな。あるいは接近戦で、こっちがアサルトライフル乱射しているのにヒョイヒョイけて近づいてきて、ナイフでぐさーみたいな（この場合は「あんたスティーブン・セガールの生まれ変わりかよ！」と叫びます）。まあ私がヘボすぎるという説もありますが！

　ＭＭＯでのＰｖＰは、レベル差や装備差がかなり影響するのに対して、ＦＰＳは基本的にキャラの能力は大差ないので完全にプレイヤースキルなわけです。そういう種類の《強さ》をＳＡＯシリーズでも表現してみたいという動機が、このファントム・バレット編を書くひとつのきっかけになっています。

　ただ問題としては、私ＦＰＳは好きなんですが銃器についてはまったくのでして……今回、いろいろな銃の名前や専門用語を乱射しまくってますが、それらはもれなく付け焼刃のザ・しったかぶり知識となっております。詳しい方がお読みになると「そんなんねーよ！」と言いたくなる場面が多々あろうかと思いますが、どうぞひとつ「ゲームの中だし」と言うことで納得して下さると助かります。

　関連タスクが増大しまくる中、根気よく原稿修正に付き合って下さった担当のさん、今巻の二人（笑）のヒロインを素晴らしく魅力的に描き出してくださったイラストのａｂｅｃさん、そして前巻の後書きで「次から迷走ぎみ」とか書いたにもかかわらずここまでお付き合い下さいましたあなたのにも、感謝のヘッドショットをげます。次巻もしくお願いします！

二〇一〇年六月十日　　　川原 礫